



“技術論”の 源流をたずねて

—1930年代ソ連における“マルクス主義的技術史”の探究—

市川 浩

広島大学出版会

『“技術論”の源流をたずねて』

—1930年代ソ連における“マルクス主義的技術史”の探究—

市 川 浩

広島大学出版会

『“技術論”の源流をたずねて』

—1930年代ソ連における“マルクス主義的技術史”の探究—

市 川 浩

広島大学出版会

『“技術論”の源流をたずねて』

—1930年代ソ連における“マルクス主義的技術史”の探究—

目 次

序章 問題の所在と課題	1
1. 戦前わが国におけるマルクス主義技術論	1
2. “極度の客観主義”への不満	3
(1) 転向後の相川春喜	3
(2) 「適用説」のエートス	4
(3) “技術の内的発達法則説”批判	5
3. 「労働手段体系説」の隆盛	6
4. “源流”をたずねて	6
(1) ニコライ・ヴォルコフ——相川技術論の源流	7
(2) “マルクス主義的技術史”のもうひとつの探究	8
(3) “物質文化史”——“マルクス主義的技術史”へのオルタナティヴ	9
5. ソ連史の過酷な激動のなかで、	10
(1) 「文化革命」と“マルクス主義的技術史”教育	10
(2) 「哲学論争」の複雑な軌跡	10
(3) 「大テロル」	11
6. 本書の課題	11
第1章 ニコライ・ヴォルコフと高等工業教育における “マルクス主義的技術史”の探究	19
1. 全連邦共産党(ボリシェヴィキ)中央委員会11月総会	19
2. ニコライ・ヴォルコフとは何者で、何を問題としたのか	20
3. ヴォルコフ論文以前の技術史教育	24
4. アナトーリー・ズヴォルィキンによる“整備・統一”と論集『技術史』刊行	27
5. “プロレタリア専門家”=技術者養成と“マルクス主義的技術史”	30

第2章 ソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所(1932~1938年) ……	43
1. 知られざる研究所 ……	43
2. 設立の経緯と最初期の活動 ……	44
3. 研究活動の展開 ……	48
(1) 1933年 ……	48
(2) 1934年 ……	50
(3) 1935年 ……	51
4. 技術史分野の活動 ……	51
(1) “物質文化史”か“技術史”か? ……	51
(2) 『技術史全史』全10巻編纂事業 ……	52
5. 終焉 ……	54
6. 科学史=技術史研究所が残したもの ……	56
第3章 ハイム・ガルベルの技術論 ……	65
1. ハイム・ガルベルとはどのような人物であったのだろうか ……	65
2. ガルベルによる技術の把握 ……	66
(1) 「人間の自然に対する能動的な態度」—技術の定義をめぐって— ……	67
(2) 発達したMaschinerieにおける原動機の主導性 ……	69
3. ガルベル技術論への批判—ズヴォルィキン— ……	73
4. 消し去られたもうひとつの技術論 ……	75
第4章 “物質文化史”か“技術史”か? —1930年代初頭のソヴィエト国立物質文化史アカデミーにおける論争— ……	83
1. 国立物質文化史アカデミーとニコライ・マル ……	83
2. ヴラジスラフ・ラヴドニカスによる“物質文化史”の提唱と受容 ……	85
3. イヴァン・スミルノフのラヴドニカス批判 ……	91
4. 袋小路に陥る“物質文化史” ……	94
補論 [1] ニコライ・ブハーリンの技術論 ……	105
1. ブハーリン批判の前提 ……	105

2. ブハーリンによる技術の定義	107
3. 資本主義における技術進歩をもたらす諸矛盾	108
4. 独占資本主義における技術進歩	109
5. 未成熟に終わったブハーリン技術論	111
補論 [2] ヴィクトル・ダニレフスキー再考	115
1. “ソ連を代表する技術史家”ダニレフスキー	115
(1) ダニレフスキーの学界デビュー	116
(2) ズヴォルィキンの台頭とダニレフスキー	117
2. その後のダニレフスキー	118
3. 日本におけるダニレフスキーの語られ方―「軍事技術論争」に寄せて ..	121
結	127
あとがき	133
人名索引	138
図の典拠	144
初出一覧	145

【凡例】

- ・ 典拠となった資料からの直接引用はカギカッコに括って示した。引用文中省略した箇所は「……」で示した。また、引用者(本書著者)による訳注、補足や言い換え、解釈などは引用文中の該当箇所の直後に「」で括って示した。
- ・ 旧漢字・かなづかいは現代のそれに改めている。
- ・ 巻末の「人名索引」については重要人物および注目していただきたい人物のみとし、可能な限り原綴、生没年を示した。存命が確実、ないし確認できない人物には生没年(ないしその片方)を入れていない。外国人の名前については、中国人のそれを除いて、現地音を重視した表記にしている。
- ・ 直接引用文のほか、特有のタームや他と区別が必要な使い方をしている語は、原則初出に限り「」で括っている。
- ・ 登場人物の叙述や発言内容を筆者なりにまとめて示す場合、ないし特殊なジャーゴン、内容が疑わしいイデオロギー的な用語法による語は、“ ”で囲んでいる。
- ・ 図版の出所についてはそれぞれの箇所にキャプションを設け、巻末で典拠を示している。
- ・ なお、本書では、ウクライナの地名をほぼロシア名で表記している。過去の文献にある地名との同定を容易にするためでもあるが、国籍自認とは別に、ウクライナではロシア語を常用語としている人が多く、とくに事情がない限り、地名はロシア語で表記した。

序章 問題の所在と課題

「技術論」は、いくつかの大学で講義科目として設置されていることでわかるように、ひとつの学問領域を示す用語であるが、これを簡便に英語に訳すことは難しい。広島大学で開講されていた「現代技術論」の「技術論」の部分に、当時の担当者であった木本忠昭は *Social Philosophy for Technology* との英訳を当てていたが、内容をかなりの程度正確に反映しているとはいえ、やはりくどい。「物性論」(本田光太郎は *Property of Matters* と訳したそうであるが……) と並んで、その受容に日本的なバイアスを感じさせる用語である。これを、技術史 (*History of Technology*) を中核としながら、経済学などの社会科学、あるいは哲学や文化論において広く技術を対象とする(ないしそれに関連した)学際的な探究の総体と、ひとまず括っておこう。

1. 戦前わが国におけるマルクス主義技術論

「技術論」の重要な要素としての技術の歴史的叙述は、いつわが国に登場したのであろうか。横井時冬の『日本工業史』(1887年、1926年に改造社より復刻)を先駆けとしつつ、1909年から1911年にかけて編纂された田辺朔郎編『工業大辞典』(2000年に日本図書センターより復刻)は工芸、手工業、工業技術のそれぞれについて詳細な歴史的叙述を含んでいた。のち、1925～31年には、商工省の手で10巻からなる『明治工業史』の編纂が進んだ。これらは、一方では、技師・技術者養成に有益な啓蒙的性格をもつとともに、他方では、19世紀末のわずかな間に疾風怒濤のように経過した日本産業革命⁽¹⁾における先駆者たちの偉業を顕彰する記録でもあった。

しかしながら、技術を対象とする人文・社会科学的、歴史的研究の本格的な展開は1930年代のことであった。第1次世界大戦における、戦車、軍用機、潜水艦など新しい兵器の登場と、1920年代における嵐のような技術発展、とりわけ「電化」と「化学化」は人々のあいだに工業文明の未来に対する期待と不安を呼び起こした。やがて、資本主義世界は1930年代、未曾有の経済危機の時代を迎える。日本の知識人の間でも、ルイス・マンフォード流の技術観⁽²⁾が影響力をもった。このような類の哲学的・文化批評的技術観が欧米から日本につぎつぎと紹介された⁽³⁾。技術の問題に対する人々の知的関心の高まりのなかで技術史に関する諸

著作⁽⁴⁾も日本語に翻訳された。

この時期、この分野におけるオリジナルな展開がマルクス学派の著作のなかに見られるようになった。世界恐慌にあえぐ資本主義世界を尻目に、ソ連はその“社会主義”建設の基盤をかためつつあった。それは、資本主義の現状に批判的な知識層の一部に、資本主義的な搾取関係を揚棄しつつ、ひとにぎりの独占体による技術独占体制に風穴をあけ、人類史上どの段階における技術のあり方とも違った新しい技術の活用の様式を生み出す可能性を切り開くものとして、技術と人類の未来に対する明るい遠望を抱かせるものであった。また、1930年代前半、日本資本主義の基本的な特徴付けについて、大きな論争が進行していた（「日本資本主義論争」⁽⁵⁾）。

1932年9月、「唯物論研究会」が結成された。日本の唯物論者たちは、一連の問題（「技術」の定義その他弁証法的唯物論の基礎的諸概念、文化の問題、日本産業革命と日本資本主義の特徴付けなど）に取り組んでいった。このような環境で「技術論」は形成された。「唯物論研究会」のリーダーの一人、戸坂潤は、技術のブルジョアの観念を批判しつつ、技術の唯物論的把握を探究した⁽⁶⁾。その本性上一人の人文主義者であった三枝博音は独創的な技術の哲学を展開した⁽⁷⁾。また、唯物論者のいく人かは技術史の概説書を執筆した⁽⁸⁾。

このようなマルクス主義技術論の興隆は次のような事情でも説明され得る。技術史学の泰斗、山崎俊雄はのちに「科学と技術の歴史的研究は戦時には良心的な社会学者、哲学者の弾圧からの避難場所であり、同時に、ファシズムの不合理性にたいする唯一の抵抗の場であった」⁽⁹⁾と述べている。

この時代、わが国におけるマルクス主義的技術観の形成に大いに貢献した少壮・気鋭の論者が相川春喜⁽¹⁰⁾であった。技術論論争史に関する浩瀚な著作のなかで中村静治は、「[技術の]概念規定をめぐる唯研内部の論争は、以上の相川『技術論』をもって、一段落したとしてよかろう」⁽¹¹⁾と述べている。相川による技術の概念規定とは、「技術とは、史的唯物論に従えば、人間社会の物質的生産力の一定の発展段階に於ける社会的労働の複合体であり、一言にしていえば、労働手段の体系コンプレックスに他ならない」⁽¹²⁾という点にあった。相川は、このような、わが国におけるマルクス主義的技術観、のちに「労働手段体系説」（あるいは単に「体系説」）と呼ばれることになる技術観の確立に大きく貢献した。

2. “極度の客観主義”への不満

こうして確立された「労働手段体系説」は、しかし、マルクス学派のなかでも必ずしも完全無欠の定義として定着したわけではなかった。相川説が一面で持つ“極度の客観主義”（金山浩司の表現を借りれば⁽¹³⁾）に対しては、これまでもいくどか不満が表面化していた。



図1 相川春喜

(1) 転向後の相川春喜

産業労働調査所やプロレタリア科学研究所、そして唯研に属して、左翼論壇を賑わせていた相川は、何度か警察の検束を受けていたが、1936年7月、いわゆる「コム・アカデミー事件」で長期にわたり拘留され、“転向”（「マルクス経済学は否定しえないが、実践運動より離る」という半転向）し、翌年3月起訴留保となり釈放された。相川は“転向”後にも旺盛な著述活動を展開する。確かに、『東南亜の資源と技術』（1944年）、『技術及技能管理』（同年）など、見るからに国策に沿った著作は弁解の余地のない転向の所産ともいえよう⁽¹⁴⁾。

マルクス主義の潮流が沈黙を強いられるなかで、“転向思想”として登場したものに、「生産力理論」がある。「生産力理論とは一国の生産力の伸展を目標として社会構造の合理的改造を主張する理論である。あらゆるマルクス主義的批判が封殺された当時において、それはかつてのマルクス主義に代り、政治批判の主流的潮流を形成した」⁽¹⁵⁾。こうした流れと転向後の相川の思想的営為とが、どの程度交差していたかはわからない。

しかし、近年、気鋭の日本現代史研究者アーロン・モーアは、転向後の相川に新しい光を当てようとした⁽¹⁶⁾。転向後の相川は唯物論的な技術の定義を退け、新たに「技術は、社会的歴史的な人間の目的を意識した活動のプロセスにおける外的手段又はその複合コンプレックス、その組織システム、その体系」⁽¹⁷⁾と定義した。この定義により、技術は「本質的に実践と生産に根ざすものであり、それは『生活』のなかに具体的な表現を見出せるものとされ」⁽¹⁸⁾、したがってそれは「自由主義的資本主義のもとで疎外を引き起こす客観的力ではなく、その根本的本質で人類のために世界を創造し変革することと調和しなくてはならない。それは近代の病を克服し、ア

ジアを西洋帝国主義から解放するための普遍的エトスによって満たされるとしたのである」⁽¹⁹⁾。かつてとはまったく違った文脈の上ながら、こうして相川は「社会を技術を通じて変革することをあきらめてはいなかった」⁽²⁰⁾のである。

また、金山浩司は転向後の相川の著作に、「仮面のうちの連続性」を看取した。相川は、「巧みに従来の説の根幹部分を保持しようとし」つつ、あまりに客観主義的であった自説を発展させ、当時日本を席卷していた精神主義に「一定の歯止めをかける理論装置」を構築しようと格闘していたとする⁽²¹⁾。相川は技術の本質規定についても、過去の自分の立場を超え、三枝博音に従って、「過程しつつある手段」という規定を受け入れるなど、独自の模索を続けてゆく⁽²²⁾。

相川に限らず、多くの論者がそれぞれの“転向”後にむしろ活発な言論活動を展開した背景について、唯研のリーダーであった戸坂潤は「累進的に何ものかの威圧が取り除かれつつ今日に至った、と考える外ないのである」⁽²³⁾という意味深長な一句を吐いている。「威圧」とは、唯物論の枠組みに議論を組み入れなければならないという“強迫観念”であったと考えられる。思想弾圧によってかえって執着から切り離され、その限りで彼らは皮肉にも一面での“自由”を得たのである。

あるいは、ソ連における激しい権力闘争、“哲学戦線”におけるデボーリン派批判など大きな変動⁽²⁴⁾を経て進むスターリン化のわが国左翼論壇における影響⁽²⁵⁾もまた「威圧」であったと見るのはうがちすぎた見方であろうか。相川にとって“転向”はそれまでの極度に客観主義的な技術論からの“解放”でもあったのかもしれない。

(2)「適用説」のエトス

大日本帝国の敗北と次々と明るみになるその罪過は日本帝国主義の批判者であったマルクス主義の学術的権威を高めた。しかし、マルクス主義「技術論」の分野では、技術の本質をめぐる深刻な意見の対立があらわれた。著名な物理学者、武谷三男は、戦時中に弾圧されたときに執筆し、検事調書に寄せた自身のメモ⁽²⁶⁾を公表した。そこで、彼は、技術の本質は「客観的法則性の意識的適用」にあるとする見解を明らかにした。技術者の主体性を強調したこの技術観は、若い技術史研究者や技術者の支持をえた。こうした立場に立つ論者は、一般に、「適用説論者」と呼ばれている。とりわけ、星野芳郎はこの立場から盛んな言論活動を展開した。

星野の周囲に「現代技術史研究会」が組織され、長期にわたり雑誌『技術史研究』を刊行した。『技術史研究』の「創刊の辞」にはそこに結集する論者たちの「正しい技術を求める強い意欲」という表現が見られるという⁽²⁷⁾。そうした彼らにとって『技術は労働手段の体系である』というソ連流マルクス主義の考え方が持つ「科学や技術自体は価値中立的である」⁽²⁸⁾という捉え方は我慢ができないものであった。やがて彼らは、1960年代、70年代、大学紛争や公害反対運動などのなかで、科学者や技術者の立場を厳しく問うてゆくことになった。

(3) “技術の内的発達法則説” 批判

労働手段の素材、構造、運動形態は客観的な自然諸法則によって規定され、そこに内在する諸法則は社会・経済的な過程に解消しきれない相対的自律性を有している。このような相対的な自律性に着目し、技術の発達過程を貫徹する“内的な法則”を定式化しようとしたのが、哲学者である田辺振太郎と熱機関工学者、石谷清幹両氏によって提唱された「技術の内的発達法則説」である。この説の中核は「労働過程の技術の根本矛盾も動力と制御である」⁽²⁹⁾とする点にある。中村静治はこの説を「マルクスによって『強調』されながら、理論化が果たされなかった領域における画期的な達成」⁽³⁰⁾と高く評価した。近現代においては「工学」に体现される人間の技術発達のための主体的な営為を度外視し、技術発達をあたかも自然法則の貫徹であるかのようにとらえるこの説は、「労働手段体系説」に内在する“客観主義”の極北ともいえるものであった。

この説に対する批判⁽³¹⁾は1970年代からあったが、市川浩（以下、「本書著者」）は、『物体を動かす』運動がより高次の形態に移行するに際しては動力と制御の均衡もより高次のものとして再現されるとはいえ、それは過程の結果であって、そのままでは過程を説明するもの、つまり、発展の契機であることを意味しはしない。田辺・石谷説は単なる対立、つまり、事物に内在し、対立的に区別される二要因を見つけ出すことで考察をおえ、その対立がいかなる意味で事物の発展を必然するかの論証は行わない⁽³²⁾として、この説の根本的な問題がこの説における矛盾概念の不当な拡張にあることを指摘した。また、労働手段の発達における「自然法則性」の外観の由来について、「労働手段は人間によって生きた自然の諸連関から分離され、社会的生産器官として役立つように再構成された物質であり、そこにはすでに合自然法則的に規定された『内的発達法則』は存在しな

い。自然法則性が存在するのは、労働手段の運動における単なる諸連関の秩序としてであり、それが労働手段発達の『合自然法則性』という外観の一つの根拠をなしている⁽³³⁾とした。著者のこの提起に対しては中村から激しい批判もあったが、その後のマルクス主義の退潮もあり、「技術の内的発達法則」説をめぐる論争は十分な展開を見せなかった⁽³⁴⁾。

3. 「労働手段体系説」の隆盛

こうした「労働手段体系説」（その“極度の客観主義”）に対する不満にもかかわらず、「体系説」は技術の社会的・経済的・文化的諸問題に関心をもつ知識層のなかに広がっていった。とりわけ、「体系説」論者のなかで、中村と山崎俊雄の創造的活動は銘記されなければならないであろう。中村は技術論の方法論的達成を現代日本の経済分析に適応し、エコノミスト賞を授与された名著『戦後日本経済と技術発展』⁽³⁵⁾をはじめ、多数の著作を著した。技術を貨幣表現可能な物的財貨とするその立論は経済学と親和性が高く、当時数多くいたマルクス経済学者に支持された。また、彼の浩瀚な著作『技術論論争史』⁽³⁶⁾はこの分野の重要な思想的概観となっている。

他方、山崎は近現代日本技術史に関する大著『日本現代史体系 技術史』⁽³⁷⁾を執筆した。同時に、彼は東京工業大学にアカデミック・ポストをえて、才能ある技術史研究者を育てた。彼らのなかで、加藤邦興はわが国においてすでに古典となっている『化学の技術史』⁽³⁸⁾の著者であり、また公害の歴史の研究でも顕著な成果を挙げた。木本忠昭は、山崎と共著で、これまた古典の地位をもつ名著『電気の技術史』⁽³⁹⁾を著した。さらに加藤と木本はそれぞれ、本書著者を含む後継者を養成してゆくことになる。

中村の旺盛な執筆活動、山崎にはじまるアカデミズムにおける後継者養成は「労働手段体系説」の隆盛を支えたといえよう。

4. “源流”をたずねて

このように、わが国では、一部にその“客観主義”に対する不満をはらみながらも、「労働手段体系説」が強い影響力を保持していた。では、そもそも相川がどのようにして「労働手段体系説」の立場にいたりついたのかを探るために、その1935年の著作に立ち帰ってみよう。

(1) ニコライ・ヴォルコフ——相川技術論の源流

先に述べたように、中村は、相川の著書『技術論』から引用しつつ、その「労働手段体系説」確立に果たした役割を確認したが⁽⁴⁰⁾、彼はさらに進んで、相川技術論の“源流”を遡ることまではなかった。相川は、この著書で、ソ連における哲学論争の軌跡をなぞる一方、その主張の核心的な部分で「N. ヴォルコフ」の論文「科学史及び技術史の若干の問題」⁽⁴¹⁾に依拠していたのである。

相川が活躍した「唯物論研究会」の結成に3年ばかり先立つ1929年、その11月の全連邦共産党（ボリシェヴィキ）中央委員会総会は高等工業教育機関への“マルクス主義的技術史”の導入を決議した。ニコライ・ヴォルコフは党イデオログとして養成され、当時ある工業専門学校の一教員として勤務していたが、彼のイニシャティヴにもとづき、工業専門学校における要員養成に便利な技術史・技術観が確立されていった。高名な電気工学者で、“レーニンの戦友”グレブ・クルジジャンフスキー率いる人民委員会議（内閣）附属高等技術教育委員会に附置された「マルクス主義的技術史委員会」がその主な舞台となり、アナトーリー・ズヴォルキンらによってこの技術観は整備されてゆく。このことは次章で示そう。

ヴォルコフのこの論文はただちにわが国にも紹介され、先述のように相川春喜に支持されて、わが国「技術論」の主流＝労働手段体系説確立に大きな影響を与えた。当時、ソ連におけるマルクス主義理論に関する最新情報は多くが遅滞なくわが国にも伝えられていた。その様子を高名な科学史家、佐々木力は、「その情報の受容の仕方は、まず例外なく当時の[スターリン —引用者]権力……が流した形態を、最新の権威ある知識としてそのまま尊重するといったふうであった。[戦前日本の親ソ派左翼思想界は、…… —引用者]ソ連邦の『正統派』思潮をほとんど無批判に受け入れていた」⁽⁴²⁾とまとめている。戸坂らの仕事のオリジナリティーの高さを考慮すると、このとらえ方は妥当性を欠いていると言わざるをえないが、技術論の場合、ソ連からの学術的情報はヴォルコフ流の“マルクス主義的技術史”に限られていたと見てよいであろう。

さらに、わが国技術論の黎明期に大きな足跡を残した論客、岡邦雄⁽⁴³⁾は、1937年、『唯物論研究』誌に「技術史について（上）、（下）」と題する論稿を発表した⁽⁴⁴⁾。岡はそこでヴィクトル・ダニレフスキーの仕事を紹介した。ダニレフスキーの著書『18～19世紀の技術史概説』（*B. B. Данилевский. «Очерки истории техники XVIII-XIX вв.»*, М.-Л., Соцэргиз, 1934）は岡と榎本セツの手で翻訳され、1937年、三笠

書房から『近代技術史』の題名で刊行された。その結果、ダニレフスキーは日本人にとって“ソ連を代表する技術史家”となった。本書補論[2]に示されるように、ダニレフスキーは、この当時、ズヴォルィキンと密接な連携を保っており、その技術観はヴォルコフのそれを超えるものではなかった。

(2) “マルクス主義的技術史”のもうひとつの探究

では、この当時、“マルクス主義的技術史”を探究していたのはヴォルコフら高等工業教育機関の「技術史」担当教員や彼らを指導する教育行政家だけであつたのであろうか。つぶさにこの当時のソ連の言論界を見てみると、ほかならぬアカデミズムのなかに、“マルクス主義的技術史”を追究しようとしていた、もうひとつの潮流があつたのである。そしてこれに関する史実発掘が本書の大きな課題となる。

2005年当時、ロシア科学アカデミー・セルゲイ・ヴァヴィーロフ名称自然科学史=技術史研究所の技術史部副部長であつたオクサーナ・シモネンコは「技術のマルクス主義的概念の修得にもっとも関連性が強い哲学的諸問題に取り組んだのは、Kh. I. ガルベルであつた」⁽⁴⁵⁾と評している。しかしながら、わが国のマルクス主義技術史・技術論に関連した文献のなかにハイム・ヨシフォヴィチ・ガルベルの名前を見いだすことはできない⁽⁴⁶⁾。

ガルベルはレニングラード(現、サンクト=ペテルブルク)に立地していたソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所を舞台に活発な論述活動を展開していた。本書第2章で示されるように、この研究所は1932年3月28日のソ連邦科学アカデミー総会で設立が承認されたものの、わずか6年後の1938年3月5日付科学アカデミー幹部会布告により閉鎖されている。しかも、1936年夏に研究所がモスクワに移転した際に、その規模を大幅に縮小した。「事実上」という副詞を添えると、この研究所は1936年の夏、すなわち、設立からわずか4年数カ月で活動を停止していたことになる。ソ連解体後、かつての機密文書が公開されるようになり、この研究所についての研究も進んだが、ガルベルに関する記述はわずかである。ガルベルの技術のとらえ方が「技術の哲学」や技術史方法論の文脈で検討されることはなかった。

金山浩司は「全体主義国家における忌むべき言論弾圧の一環としてこの歴史過程[ソ連における科学をめぐるもろもろの論議 — 引用者]をとらえる傾向は、

とりわけ、ペレストロイカ以後のソ連・ロシアの科学史家に顕著である」⁽⁴⁷⁾と述べたが、こうしたガルベルの扱われ方は、現代ロシアの知識人におけるマルクス主義への嫌悪、あるいは少なくともその内容に対する関心の著しい低下が背景にあるものと考えられる⁽⁴⁸⁾。

1930年代の、少なくとも前半まで、金山が「この国においては、国是とされたマルクス主義的哲学体系=弁証法的唯物論に照らした各科学分野の哲学上の議論が、各種の学術雑誌・総合雑誌等の誌上において制度的・政治的後押しを得つつ、たたかわされた」⁽⁴⁹⁾と述べているように、技術論についても、国家イデオロギーの許容範囲内とはいえ、いくつかのヴァリエントが併存していた。行中に示されるように、ガルベルも、ドイツ語版原書にまで遡って原著者の用語例を確認するなど、カール・マルクスの『資本論』に精通していたほか、エルンスト・カップ、ルートヴィヒ・ノワレ、フランツ・ルーロー、オズヴァルト・シュペングラーなど「技術の哲学」の領域における古典的な著作を含む、非マルクス主義的な見方に立つ論考も詳細に検討しており、当該分野における該博な知識を基礎に、新しいマルクス主義的な技術論を構想していたとみなすことができる。しかしながら、本書第3章で触れるように、ガルベルは若くして悲劇的な形で生を中断させられ、その独創的な「技術論」も未展開に終わった。

(3) “物質文化史”——“マルクス主義的技術史”へのオルタナティブ

さらに興味深いことに、この当時、党中央が提起した“マルクス主義的技術史”創造の課題に対するオルタナティブを突きつけようとした一連の研究者がいた。

当時、レニングラードでは「国立物質文化史アカデミー（Государственная академия истории материальной культуры: ГАИМК）」を名乗る研究者集団が活発に活動していた。もともと考古学分野の研究機関であったため、非文字人工遺物の研究に精通しており、非文字人工遺物の視点から、原始から現代までの人類の歩みにアプローチしようとする壮大な構想をもっていた。この立場から、彼らは“マルクス主義的技術史”に替わる概念として、“物質文化史”を提唱する。

高名な考古学者ヴラジスラフ・ラヴドニカスと若い歴史家イヴァン・スミルノフとの間で激しい論争が闘わされたが、“物質文化史”の潮流はさしたる展開、成果を見せることなく、「大テロル」や第2次世界大戦期の“レニングラード封鎖”のなかで多くの所員の命を失いながら、やがて、もとの考古学に落ち着いていっ

た。これについては、本書第4章で詳述しよう。

5. ソ連史の過酷な激動のなかで、

ガルベルらによる“マルクス主義的技術史”の探究も、一部考古学者らによるそのオルタナティブの構想もともに萌芽的な段階にとどまり、大きく発展することはなかった。その事情は、スターリン前期ソ連の過酷な政治史抜きで語ることはできない。ここで予めその大枠を示しておこう。

(1)「文化革命」と“マルクス主義的技術史”教育

1928年の10月、ドンバス地方で発生した“ブルジョア専門家”による“反革命サボタージュ事件”，いわゆる「シャフトイ事件」以降、党は“ブルジョア専門家”への警戒をさらに強め、自前の“ソヴィエト的な”技術者の養成を急務と考えた。帝政ロシアで養成された専門家の大量排除をともなった「文化革命」が進行している時期でもあった。また、高等教育にも社会主義建設に必要な専門家を速成する方法として、教育年限の大幅短縮を伴う“突撃隊方式”が適用されようとしていた時期でもあった。“突撃隊方式”は早くも1931年7月にはは正過程が始まるが、完了するまでに「大テロル」が猛威を振るいはじめ、大学、高等教育機関は混乱のさなかに突き落とされた⁽⁵⁰⁾。

(2)「哲学論争」の複雑な軌跡

相対性理論、量子力学の登場など、「20世紀初頭に起こった物理学における一連の過程は、力学的決定論から相対論的量子論的世界観へのパラダイム転換であり、それによって新しい科学概念をめぐる哲学的、思想的対立と混乱が全世界で生じたのである」⁽⁵¹⁾。ソ連ではこの「力学的決定論」と「相対論的量子論的世界観」との思想的対立はマルクス主義のジャーゴンに彩られた「機械論者」と「弁証法論者」との哲学論争というかたちで現象した。そして、「弁証法」の概念を押し出すことによって20世紀の新しい自然科学的概念を柔軟に評価できたデボーリン[アブラム・デボーリン —引用者]ら弁証法論者の側⁽⁵²⁾に優位性があった。スターリンらは、「機械論派」とされていた政敵ニコライ・ブハーリンの権威失墜にこれを利用できた⁽⁵³⁾。

しかし、弁証法論者の“勝利”はごく一時的なものであった。1930年6月7日付の党中央機関紙『プラウダ』に若い哲学者マルク・ミーチン、ヴァシーリー・ラ

リツェヴィチ、パーヴェル・ユージンの共著論文「マルクス＝レーニン主義哲学の新しい課題について」が掲載された⁽⁵⁴⁾。これが、当時知的権威を高めていたデボーリンら「弁証法論者」に対するミーチンらの批判の嚆矢となった。彼らは「哲学の党派性」を掲げ、哲学の政治課題への従属を哲学者に迫った。

この論文にはじまる論争は哲学論争の装いをまといながら、その実、政治権力のみならず、知的権威をも欲するようになっていたスターリンによる、ミーチンら走狗を使ったデボーリン追い落としキャンペーンにほかならなかった⁽⁵⁵⁾。

(3) 「大テロ」

“右翼反対派”ブハーリンはまず1929年4月の党中央委員会・中央統制委員会合同総会、第16回党協議会において、政治局内には留まったものの、責任をもっていた部署[内容不詳]から解任され、つづいて11月の中央委員会総会で政治局から解任された⁽⁵⁶⁾。

元貴族、白軍、元富農にも平等に投票権を与え、直接・秘密投票を約束した、“民主的な”1936年の「スターリン憲法」の本格施行を前に、スターリン権力は、少なくとも客観的には、農業集団化、社会主義工業化の強行のなかで蓄積された一般住民の不满をそらす捌け口を準備しなければならなかった。すでに政治的には失脚していたはずのブハーリンは、彼に対するすさまじい批判キャンペーンの末に、2回目の、今度はその肉体的抹殺に結果する決定的な失脚を経験した。しかし、一般民衆の不满はあまりに大きく、権力の側でも制御不能になってゆく。これに、ソ連を取り巻く国際環境の悪化（1936～37年にはドイツのラインラント進駐、蘆溝橋事件、日独「防共協定」締結、スペイン内戦での左派の敗北があった）を背景とするゼノフォビアが著しく拡大、そこにソ連国家の複雑な多民族性が絡み合っ、マス・ヒステリア状態が醸成されていった。さらに、過度の付度、上位のものの排除をみずからの出世の機会ととらえる傾向が被害を極大化した⁽⁵⁷⁾。

6. 本書の課題

本書の課題は、こうした政治史の展開を背景としつつ、1930年代前半のソ連で“マルクス主義的技術史”がどのように確立されていったのか、さらに、そのオルタナティヴがどのように探究され、どのように沈黙していったのか、それゆえ、正統“マルクス主義的技術史”となった潮流はどのような制約＝歴史的被規

定性をもっていたのであろうか、それらを探ることである。

科学史家を含め、歴史家の仕事は、過去にさかのぼって、現状の問題の淵源、いわば“躓きの原点”を探り、“ありえた歴史のオルタナティブ”を提示することで、現代に対する根源的な批判を試みることにあるとすれば、本書は、長く忘れられていたマルクス主義的技術史探究の史実を発掘し、こうしてえられる公正で正確な史観の上に技術史における、(そう言ってよければ)“スターリニズム”の影響を検証し、新たな視点から技術史方法論を探究する手がかりを次の世代の技術論研究者に提供するものと位置づけることができよう。

注

- (1) 長岡新吉『産業革命』教育社, 1979年.
- (2) Lewis Mumford, *Technics and Civilization*. New York, 1934 (ルイス・マンフォード／三浦逸雄訳『技術と文明』育生社弘道閣, 1942年)。彼は技術を“文化複合体”の要素のひとつとしながら、しばしば暴走し“複合体”そのものを圧倒する要素とみなした。
- (3) Friedrich Dessauer, *Philosophie der Technik*. Bon: Cohen, 1927 (フリードリヒ・デッサウアー／永田廣志訳『技術の哲学』科学主義工業社, 1941年), Oswald Spengler, *Der Mensch und die Technik*. München: Verlag C. H. Beck, 1931 (オズヴァルト・シュペングラー／阿閉吉男・加茂儀一訳『人間と技術』三笠書房, 1938), Werner Sombart, *Die Zähmung der Technik*. Berlin, 1935 (ヴェルナー・ゾンバルト／阿閉吉男訳『技術論』科学主義工業社, 1941年) など。
- (4) Abbot P. Usher, *A History of Mechanical Inventions*. New York, 1929年 (アボット・アッシャー／富成喜馬平訳『機械発明史』岩波書店, 1940年), Otto Johannsen, *Geschichte des Eisens*. Düsseldorf, 1925 (オットー・ヨハンゼン／三谷耕作訳『鉄の歴史』慶應書房, 1942); John A. Fleming, *Fifty Years of Electricity*. London & New York, 1921 (ジョン・フレミング／奥村正二訳『近代電気技術発達史』, 科学主義工業社, 1942) など。
- (5) 小山弘健・山崎隆三『日本資本主義論争史』こぶし書房, 2014年 [再刊] 参照。
- (6) 戸坂潤『技術の哲学』時潮社, 1933年。
- (7) 三枝博音『日本の知性と技術』(第一書房, 1939年) など。
- (8) 榎本セツ『技術史』(三笠書房, 1938年), 小山弘健『近代軍事技術史』(三笠書房, 1941年), 三枝博音『現代日本文明史 14 技術史』(東洋経済新報社, 1940年), 奥村正二『工作機械発達史』(科学主義工業社, 1941年) など。
- (9) 山崎俊雄著／木本忠昭編『日本技術史・産業考古学研究論』水曜社, 1997年, 13頁。

- (10) 相川春喜(本名一矢浪久雄)の生涯については、内海庫一郎・山崎俊雄・小林端五編『〔復刻版〕相川春喜小伝』(中央公論事業出版, 1979年, 5~25頁)を参照。
- (11) 中村静治『技術論論争史 上』青木書店, 1975年, 46頁。
- (12) 相川春喜『技術論』三笠書房, 1935年, 8頁。
- (13) 金山浩司「実践的生産過程での媒介としての技術—1940年代初頭における相川春喜(1909-1953)の理論的著作—」『科学史研究』第Ⅲ期第54巻第273号, 20頁。
- (14) 同, 18, 19頁。
- (15) 思想の科学研究会編『共同研究 転向』〔改訂増補版復刊版〕中巻, 平凡社, 2000年, 205頁。この部分の執筆者, 高島通敏自身は, 代表的な人物として風早八十二, 大河内一男を挙げているが, 「生産力理論」は経済学の分野で活発で, 名和統一(『日本紡績業と原棉問題研究』大同書院, 1937年), 豊崎稔(『日本機械工業の基礎構造』日本評論社, 1941年)など大阪商科大学を拠点とした経済学者グループや学生による「戦時抵抗」へとつながり, 大規模な弾圧事件, 「大阪商大事件」が引き起こされることとなる(上林貞治郎『大阪商大事件の真相—大阪市大で何が起きたか—』日本機関紙出版センター, 1986年, 参照)。
- (16) アーロン・モーア・塚原東吾ほか訳『「大東亜」を建設する—帝国日本の技術とイデオロギー—』人文書院, 2019年, 9~91頁。
- (17) 相川春喜『現代技術論』三笠書房, 1940年, 85頁。
- (18) モーア, 前掲書, 52頁。
- (19) 同, 54頁。
- (20) 同, 52頁。
- (21) 金山, 前掲(注13参照), 引用はそれぞれ21, 22, 24頁。なお, 金山には, 相川を論じた別稿がある(金山浩司「第二次世界大戦中の日本技術論における地域特殊性の導出の理路—山田坂仁と相川春喜の場合—」, 九州大学哲学会『哲学論文集』第56号, 2020年3月, 1~17頁)。
- (22) 中村, 前掲(注11参照), 60, 63~68頁。
- (23) 戸坂潤「友情に係るエッセイ」, 『戸坂潤全集』別巻, 勁草書房, 1979年, 272頁(もとは『改造』1941年2月号に掲載)。
- (24) 藤岡毅『ルイセンコ主義はなぜ出現したか—生物学弁証法化の成果と挫折—』学術出版会, 2010年, 79~137頁。
- (25) 永田廣志(唯研では君島慎一)などがブハーリン, デボーリン批判を旺盛に展開した(永田廣志「デボーリン派は何故に批判されたか」『プロレタリア科学』1931年4月号, 同「ブハーリンにおける均衡論と政治的日和見主義」『プロレタリア科学』1931年5月, など)。
- (26) 武谷三男「技術論」, 『新生』1946年2月号(武谷三男『弁証法の諸問題—武谷三男著作集 第一巻』勁草書房, 1968年, 125~141頁に再録)。

- (27) 平野恵嗣『もの言う技術者たち—「現代技術史研究会」の七十年—』太郎次郎社エディタス, 2022年, 15頁.
- (28) 井野博満「技術の価値中立性と星野技術論」, 現代技術史研究会『技術史研究』No. 78 [追悼特集 星野芳郎] 2008年10月, 18頁.
- (29) 田辺振太郎『技術論』青木書店, 1960年, 48頁.
- (30) 中村静治「科学技術革命論の批判的検討」, 『現代と思想』第21号, 1974年9月, 167頁.
- (31) たとえば, 吉田文和「マルクス機械論草稿の批判的検討」(『現代と思想』第21号, 1975年9月, 260~284頁), 馬場政孝「機械についての一考察」(東京唯物論研究会編『現代の唯物論研究』合同出版, 1977年, 176~196頁)など.
- (32) 市川浩「技術における『自然法則性』について」, 大阪市立大学大学院経済・経営研究会『大阪市大論集』第49号, 1985年, 35頁. 科学史の碩学, 山崎正勝はソ連流のマルクス主義における「対立物の統一」概念に再検討を加え, デボリン批判の必要からミーチンらが, 著者本人が公開を前提にしていなかったレーニンの『哲学ノート』から片言隻語を引き, 事実上それがまるで弁証法的矛盾と同義であるかのような歪曲を加えたものであることを指摘し, その視角からマルクス主義科学論の再吟味を提唱していることはたいへん興味深い(山崎正勝「対立物の統一・闘争論の起源と日本の科学史研究への影響」, 研究会誌『イル・サジアトーレ (IL SAGGIATORE)』第50号—2023年—, 100~110頁).
- (33) 同, 40頁. 中村静治はその著『情報と技術の経済学』(有斐閣, 1987年)で市川を批判(とりわけ, 同書1~31頁), 「技術の内的発達法則」を擁護した。市川はこれにたいして反論を試みている(市川浩「ふたたび『動力と制御』の矛盾について」, 大阪市立大学経営研究会『経営研究』第39巻第2号, 1988年, 93~104頁)。
- (34) 中村静治『情報と技術の経済学』有斐閣, 1987年, 2~31頁, など.
- (35) 中村静治『戦後日本経済と技術発展』日本評論社, 1968年.
- (36) 中村静治『技術論論争史』青木書店, 1975年.
- (37) 山崎俊雄『日本現代史体系 技術史』東洋経済新報社, 1960年(一部は鎌谷親善等が執筆した)。
- (38) 加藤邦興『化学の技術史』オーム社, 1980年.
- (39) 山崎俊雄・木本忠昭『電気の技術史』オーム社, 1976年.
- (40) 中村, 前掲(注11参照), 46, 47頁.
- (41) N. ヴォルコフ「科学史及び技術史の若干の問題」, 『マルクス主義の旗の下に』27輯(哲学研究会訳・白楊社版, 1934年6月. 原著は, Н. Волков. “Некоторые вопросы истории науки и техники.” «Под знаменем марксизма». No. 4, 1933). この論文邦訳は他の2篇(S. リフシツ「ブルジョア自然科学の反技術主義と危機」, および, W. モロドシー「数学の起源及発展要因に関するエンゲルスの

所説)とともに、邦語版『マルクス主義の旗の下に』27輯における「科学と技術の問題」特輯をなしており、相川は、ヴォルコフ論文をその著『技術論』前掲(注12参照)のなかで再三引用するとともに、これら3論文について「サヴェート連邦における技術論(及び科学論)の現段階を示しているばかりでなく、日本におけるその発展のための批判的出発点を与えている重要な示唆をもっていた」(同書、12頁)として尊重する姿勢を示していた。また、相川は、「第二に、ヴォルコフのさきの要約を、更にこの際、技術なる概念の、『特殊・歴史的規定性』Spezische, historische Bestimmtheitを内包する、一般的規定にかえ、且つ若干の説明を與えておき度い」(同書93頁)として、技術を「それ[生産力]の一要素たる特定の労働手段又はその体系そのもの」(同書93頁)とする自己の概念規定を確認するためにヴォルコフの議論を援用している。なお、著者はニコライ・ヴォルコフの論稿に同時代における邦訳があることを長く知らなかった。この点ご教示いただいた渡辺弘氏に厚く感謝申し上げる。

- (42) 佐々木力『マルクス主義科学論』みすず書房、1997年、323頁。
- (43) 岡は戦後も、いち早く、ズヴォルイキンの技術史方法論に関する包括的な論稿「技術史の若干の諸問題について」(A. A. Зворыкин. “О некоторых вопросах истории техники.” «Вопросы философии». 1953 No. 6, С. 32–45)を紹介し(岡邦雄『新しい技術論』春秋社、1955年[1996年、こぶし書房より再刊されている]、わが国技術史・技術論のマルクス主義的潮流にも影響を与えた。なお、ズヴォルイキンは、いうまでもなく、技術史の包括的な大著『技術の歴史』(A. A. Зворыкин, Н. Н. Осьмова, В. И. Чернышев и С. В. Шухардин. «История техники». Москва: Соцэкгиз, 1962: ソ連科学アカデミー編 —アー・アー・ズヴォルイキンら—/山崎俊雄他訳『技術の歴史12』東京図書、1966年)の共著者のひとり(筆頭)であり、戦後“ソ連を代表する技術史家”と認められた人物である。
- (44) 岡邦雄「技術史について(上)」唯物論研究会『唯物論』第57号、1937年、19~27頁;同「技術史について(下)」第58号(1937年)、142~148頁。
- (45) O. Д. Симоненко. «История техники и технических наук: Философско-методологический анализ эволюции дисциплины». Москва: Институт истории естествознания и техники РАН. 2005. С. 23; この著書の当該部分については、邦訳がある(O. Д. Симоненко・市川浩訳『技術史と工学史—学術発展の哲学的・方法論的分析—』ロシア科学アカデミー・エス・イー・ヴァヴィーロフ名称自然科学史=技術史研究所、2005年、から「まえがき」と第1章「技術史の歴史」、日本科学史学会『技術史』第8号、2011年、23~45頁)。引用はこの36頁から。ただし、表現を一部変えている。
- (46) 本書が対象とする1930年代、日本でマルクス主義技術論の形成・発展に圧倒的な影響力をもっていたのは1932年に設立された「唯物論研究会」であることに誰しも異論はないであろう。「唯物論研究会」は早くから技術の諸問題に取り

組んだ(戸坂潤『技術の哲学』は1934年に時潮社から出版されている)が、同会発行の機関誌『唯物論研究』[本書著者は青木書店による復刻版(全19巻、1972～1975年刊)を参照した]創刊号に岡邦雄「科学と技術の計画的結合」(48～66頁)が掲載され、第4号からはときおり短信欄に「ソヴェート・ニュース」、あるいは「ソヴェート科学ニュース」が登場するなど、建国後まだ20年も経過していなかった新しい国ソ連に対する関心は高かったものの、ソ連における技術史・技術論の紹介はほとんど見られない。1935年2月刊行の『唯物論研究』第28号掲載の戸坂・岡・岸「技術に関する文献」(横組1～16頁)では、政治文献・マルクス主義の解説を除くと、その「B. 技術の歴史」にニコライ・ヴォルコフのものが挙げられている(横組9頁)くらいであり、続く第29号(横組1～8頁)、30号(同じく1～7頁)に掲載された岡らによる「サヴェート技術文献(1)、(2)」には工学書・経済書ばかりが挙げられている。

- (47) 金山浩司『神なき国の科学思想—ソヴィエト連邦における物理学哲学論争—』東海大学出版部、2018年、3頁。
- (48) 管見の限り、今日のロシアの科学史家のなかでは、わずかに、ミハイル・キセリョフが「マルクス主義的技術史」の内容に触れていて例外とも言える。彼は、ある学術会議で資料発掘を伝える発表の予稿のなかで、1932年5月10日、チブリスでの「共産主義アカデミー旬間」において、行政家・歴史家のユーリー・ミローノフがおこなった短い報告を扱っている(*М. Ю. Киселёв. “Марксистская история техники: позиция ученого Коммунистической академии.”* Российская Академия наук «История науки: Источники, памятники, наследие. К 150-летию со дня рождения президента АН СССР академика Владимира Леонтьевича Комарова —1869–1945—». Москва, 2019. С. 321–325)。ミローノフは「共産主義アカデミー」の技術研究所副所長でもあった。この立場から、ミローノフが、1929年にはじまる工業系専門学校における「マルクス主義的技術史」の教育、技術者の養成など、実践的課題について述べたこと、その過程で、技術が持つ、自然法則性と経済的カテゴリーとの間の二重性などに関するマルクスの所説に部分的に言及していたことは述べられているが、キセリョフ自身はマルクス主義にたいする関心をほとんど見せていない。
- (49) 金山、前掲書、(注35参照)、2頁。
- (50) 市川浩「第V部第1章 科学アカデミーの戦時疎開—格差と確執—」(市川浩編『科学の参謀本部』北海道大学出版会、2016年、359、360頁)を参照されたい。“突撃隊方式”高等教育は、社会主義建設に必要な専門家速成の方法として導入されたが、すべての大学教育において、学習時間の縮減、アカデミック・スタンダードの引き下げと卒業生の質の低下をもたらしていた。
- (51) 藤岡毅「第1章 ソヴィエトにおける『マルクス主義』公式化の始まり——1920年～1930年代初めの哲学・科学論争」、金山浩司編『ソヴィエト科学の裏

- 庭——イデオロギーをめぐるか葛藤と共存』水声社，2023年，33頁。
- (52) 同，40頁。
- (53) 同，56頁。
- (54) 同，58頁。
- (55) セルゲイ・コルサコフ／市川浩訳「第2章 “メンシェヴィキ化する観念論”——アブラム・デボーリン」金山編，同前，83～120頁。
- (56) ソ連邦共産党史翻訳委員会訳『ソ連邦共産党史 2』大月書店，1972年，609，610頁。
- (57) ウェンディ・ゴールドマン／立石洋子訳「五 テロルと民主主義」松井康浩・中嶋毅編『ロシア革命とソ連の世紀2 スターリニズムという文明』岩波書店，2017年147～174頁。

第1章 ニコライ・ヴォルコフと高等工業教育における “マルクス主義的技術史”の探究

相川春喜と彼を通じてわが国のマルクス主義論壇に強い影響を与えた論文の著者、ニコライ・ヴォルコフとはどのような人物であったのであろうか。彼は何を課題として論文を書いたのであろうか。そしてどのような人々が、どのような期待からヴォルコフ流の技術史方法論を正統“マルクス主義的技術史”方法論に位置づけたのであろうか。本章ではその過程を探ることにする。

1. 全連邦共産党（ボリシェヴィキ）中央委員会 11月総会

1929年11月の全連邦共産党（ボリシェヴィキ）中央委員会総会で掲げられた高等工業教育機関への“マルクス主義的技術史”の導入という政策課題⁽¹⁾の実践は、しばらくの間停滞していた⁽²⁾。ようやく1933年には、ソ連邦中央執行委員会全連邦高等技術教育委員会内に、「マルクス主義的技術史委員会」が附置され、翌年には同委員会が編纂する論集『技術史』第1巻が出版された⁽³⁾。同誌責任編集者となった“レーニンの戦友”グレブ・クルジジャンフスキーは第1巻に序文を寄せ、「これ〔論集—引用者〕は多年にわたる人類社会の技術発達の経験を普遍化するように努めている。この方向で前進を遂げながら、論集は相対的に狭い課題の枠を飛び出し、わが国技術系高等教育機関における技術史課程の確立を目指して進む」⁽⁴⁾とその刊行を言祝いだ。

しかし、現実には1933年の段階でも、ヴォルコフは、自身、モスクワ航空専門学校（モスクワ航空工科大学）の教壇に立って“マルクス主義的技術史”を講じつつも、「マルクス主義的技術史はすでに多くの技術系高等教育機関で教授されているが、その教育の経験は十分に検討されていない。さらに、安定した教科書も、広く普及した授業計画もない。……技術系高等教育機関の数だけ授業計画のヴァリエントがある」⁽⁵⁾と慨嘆していた。つまり、「技術史」の授業は担当教員任せであったのである。しかし、“マルクス主義的技術史”のカリキュラム、授業内容はその後急速に整備・統一されてゆくことになる。ここで結論を先回りして示せば、それは、ヴォルコフが1933年に『マルクス主義の旗の下に』誌に発表した（発表を認められた）論文「科学史=技術史の諸問題」⁽⁶⁾をベースとした“整備・統一”であった。

2. ニコライ・ヴォルコフとは何者で、何を問題としたのか

ここでは、まずヴォルコフの経歴を辿り、続いて彼が件の論文で何を問題にしていたのかを考察しよう。

【ニコライ・ヴォルコフという人物】

ヴォルコフは、鉄道員の息子としてドネツク地方に生まれ、早くから探鉱で働いた。V. I. レーニン名
称全連邦共産主義青年同盟（コムソモール）で活動し、1927～30年、モスクワの工業師範学校に学び、その後、共産主義アカデミー・マルクス主義技術家協会
の学術書記を経て、1932年からモスクワ航空専門学校技術史教室主任を努めた。並行して赤色教授学院世界経済=世界政策研究所で学び、1935年には科学アカデミーの博士課程生となった⁽⁷⁾。1940年には『強力なソヴィエト航空隊』と題する単著の小冊子⁽⁸⁾を



図2 ニコライ・ヴォルコフ

刊行している。1942年4月に教授となり、そのままモスクワ航空専門学校に1951年4月1日まで勤務したが、その間、第2次世界大戦中には戦争を公的に記録するために設けられた「大祖国戦争史委員会」内の戦時経済班長（党オルグ兼任）を兼務した。戦後の1946年にはソ連邦科学アカデミー・歴史学研究所の研究員となり（兼職で航空専門学校教授は1951年まで継続）、1948年から4年間、航空機工業省の機関誌（のひとつ）『航空隊の技術』（«Техника Воздушного флота»）誌の編集長（1948～51年）、モスクワ歴史・復興博物館副館長（1951～52年）を勤めた期間をはさんで、1952年9月に歴史学研究所に復職、1958年9月30日まで勤務した。その間、1955年9月からはモスクワ州立師範学校でソ連邦共産党史教室の教授を兼職した。彼は、1958年9月30日付で歴史学研究所を辞し、10月1日付でI. M. セーチェノフ名第1モスクワ医科専門学校にソ連邦共産党史教室主任として着任した。この移籍は彼の自発的な意志に基づくもので、彼みずから同校の教員募集に応募したとのことである⁽⁹⁾。同校に移ったあと、1961年には『ソ連邦共産党史の諸問題』と題する論集の“責任編集者”を努めた⁽¹⁰⁾。しかしながら、同医科専門学校の後進校、および、兼職先の師範学校の後進校、さらに党の記録を保管するロシア国立社会=政治史文書館にはその後の彼に関する記録が一切保

管されておらず、彼の足どりは以降不明である⁽¹¹⁾。

彼がこの論文で何より力を注いだのは、相川春喜の読み取り方とは違って、技術の本質規定ではなく、“マルクス主義的技術史”の授業実践に現れていた“偏向”の批判であり、授業方法論の提起であった。ここで、原典に即して、著者ヴォルコフが言いたかったことを探ってみよう。

【“経済主義”と“技術（偏重）主義”批判】

この論文の中で彼は“ふたつの誤った方向性”を大きく取り上げている。

まず、アレクサンドル・ミシューリン（後述）が「ベッセマー法そのものではなく、それを出現させた経済的条件を学ぶ必要がある⁽¹²⁾」と述べたことに対して「このような方向性の結果与えられるのは、技術の誘因に関する推論であって、マルクス主義的技術史ではない⁽¹³⁾」と批判する。

逆に、「マルクス主義的技術史の課題は、具体的な発明、技術思想の歴史について学ぶことにある⁽¹⁴⁾」とするユーリー・ミローノフ（後述）についてはその根深い“テフニツィズム技術（偏重）主義”を指摘する。

「ソ連における技術史のパイオニア、ミローノフ同志は逆の方向性を擁護している。ミローノフ・グループによって準備された技術史の授業計画は、根本的な悪習として、実践的な科学プログラムを構成しようとする単一で、真剣な試みを呈している。……社会的人間の労働活動の成果としての技術過程の社会的被規定性について認識を明らかにする必要がある⁽¹⁵⁾」。

【技術史の方法論について】

彼は、ソ連ではじめて技術史の教科書を出版したとされるセルゲイ・イヴァニツキー（後述）による労働手段の区分を吟味する。

「たとえば、ソ連ではじめて技術史の教科書を出版したイヴァニツキー同志は『労働用具のなかでもっとも高い意義をもつものは筋骨系の生産体系である』として、逆に『脈管系生産体系』を労働対象の保守だけを任務とするものとしている。……これはまったく正しくない。というのは、『労働対象の保守に』だけ役立つのでない化学の役割が完全にあいまいにされているからである⁽¹⁶⁾」。

また、少し時代は下るが、ヴォルコフは『マルクス主義の旗の下に』誌の書評欄⁽¹⁷⁾でヴィクトル・ダニレフスキーの著書『18～19世紀の技術史概説』⁽¹⁸⁾を取

り上げている。彼の技術史方法論をさらに掘り下げるために、ここでは、この書評を取り上げてみよう。彼はダニレフスキーの著書を次のように評価した。

「われわれが、マルクス主義の古典が資本主義経済の重要な発展過程を明らかにする際に基礎となった技術の水準や生産手段に親しむのを助ける。……この意味で[先行したイヴァニツキーの著書が欠陥をもつので、……一引用者]、ダニレフスキーの著書は、資本主義によって生み出された機械の無限の世界を示す最初の試みである」⁽¹⁹⁾。

その一方で、「彼は、繊維生産における革命の物質的基盤の準備に関する問題についてはあまりに淡泊に叙述しているだけである。……ある機構が他の機構になぜ取って代わるのか、明確なアプローチがない」⁽²⁰⁾などと説明の濃淡の不揃いを指摘している。また、ポルズーノフの蒸気機関発達史における功績について、詳細に事実を発掘する一方で、「しかしながら、その発展をもたらした原因がまったく示されない以上、18世紀の境目におけるウラルの炉のこれ以上ない[立派な一引用者]指標を確認するだけでは満足できないのである」⁽²¹⁾と不満を表明している。総じて、彼はダニレフスキーに厳しい。その著を「大量の事実資料で飽和している」⁽²²⁾と呼び、次のように批判した。

「著者は17世紀から19世紀にかけての技術史に関する膨大な資料を集めながら、資本主義の技術進歩の経済的原動力とその特殊性を明るみに出すことはしていない。それゆえ、彼には、恐慌などの彼にとって“つまらないもの”は欠落しており、それゆえ、ときに所与の問題に関する資料の目録のようなものとなっていて、そうしたところでは、万華鏡のような不揃いさと、映画のような急速さである機械が他の機械に取って代わるが、なぜそのようなことが起こるのか、原因は明らかにされないのである。……ただ、著者の誤りは、たいへん多くの典拠を引きながら、これら原典の通り一遍の分析さえ行わないことにある。著者は、資料全体の解釈を発展させ、原典に評価を下し、みずからの著書の底に横たわる一般命題を基礎付けることの代りに、序文の数段落のみに限定することで、誤りを犯している」⁽²³⁾。

【技術史における時代区分の問題】

ヴォルコフは、技術史における時代区分の問題をとくに重視している。彼はイ

ヴァニツキーの技術史の時代区分法を批判している。

「彼の教科書の第2章は『機械以前の技術』という馬鹿げたタイトルが付いている。ここには、すべてが、つまり、道具の誕生も金属の獲得もマニュファクチュア的分業も、一括りにされている」⁽²⁴⁾。

「……マルクスの『資本論』における歴史的な生産様式の交替における労働用具と技術の発達に関する指導的な学説を視野に入れつつ、技術発達の時代区分の問題の検討に取り組むことが必要である」⁽²⁵⁾。

ヴォルコフは、労働用具の素材に着目して、技術史を石器時代、青銅器時代、鉄器時代などに区分するやり方や原動力に着目して、人力時代、水力時代、蒸気時代などに区分するやり方のいずれも成功しえないことを明らかにする。

「ここで、しっかり強調しておかなければならない。どの時代にも普遍的な技術発達の法則など存在せず、それぞれの社会構成体における生産力の要素としての技術発達はその社会構成体に独特で固有の法則に沿って実現するのである。それゆえ、素材に従って、あるいは動力に従って技術史の時代区分を行おうとする図式は大失敗に終るのである。というのは、時代を規定する一般的な基準はどこにも存在しないからである。……それゆえ、マルクス主義的技術史は（一般技術史にせよ、分野別の技術史にせよ）社会構成体に沿って打ち立てられなければならない」⁽²⁶⁾。

こう述べて彼は技術の発達そのものに沿った時代区分の試みを排し、階級以前の社会、古代社会、封建社会、資本主義社会、社会主義社会の5つの時代区分に従って、技術史の時代も区分されなければならないとした。その理由は、「ブルジョアのそれとは違うマルクス主義的な技術史は弁証法的唯物論の方法という基礎の上に、技術進歩の階級的被規定性を明らかにし、個々の経済的構成体の技術学的原理がそこに含まれていることを示さなければならない」⁽²⁷⁾からであった。

【技術史教授のふたつの前提】

ヴォルコフは、また、技術史教育を補完するふたつの条件についても言及している。

ひとつは受講生に技術の実物を示すための（技術系）博物館の整備である。こ

の点では「ミュンヘン技術博物館の経験がとくに興味深い」⁽²⁸⁾としている。

もうひとつは、若い教育・研究要員が一種の事典として参照しうる浩瀚な科学史の著作である。この種の優れた参考図書は長く現れなかったが、ロシア語版のフリードリヒ・ダンネマンの『自然科学史』⁽²⁹⁾の出版（開始）は、この空白を埋めるものであった。ただし、ヴォルコフは、同書そのものについては、「科学史の、疑いなく豊富な事実資料は著者の折衷主義的な視点が注入されている」⁽³⁰⁾と批判的に捉えている。

3. ヴォルコフ論文以前の技術史教育

では、当時の技術史教育に現れた種々の偏向を鋭く批判し、時代区分の問題をはじめ“正しい”技術史の方法を提起した、このヴォルコフ論文以前、だが、どこで、どのように「技術史」の授業を展開していたのかを見てみよう。

ロシア科学アカデミー文書館には、当時“マルクス主義的技術史”形成を主導しつつあったアナトーリー・ズヴォルィキンが全連邦共産党（ボリシェヴィキ）中央委員会に届けた報告⁽³¹⁾が残されているが、そこにはたった3件のケースが書かれているだけである。これによると、モスクワ土木技術専門学校ではミローノフ⁽³²⁾が1時間50分の「技術史」の講義を週4課5コマ担当していた。モスクワ・エネルギー専門学校では、のちに物理学史の専門家として活躍することになるボリス・クズネツォフ⁽³³⁾が2時間の授業を不定期ながら、週3回くらいのペースで、I. V. スターリン名称モスクワ鉄鋼専門学校では、マルクス主義史学の創始者のひとりとして高名な歴史家ミハイル・ポクロフスキーの息子ユーリーが週4回ほど、「技術史」の教壇に立った。

また、以下に取り上げる3名の例のように講義録を著作として刊行したり、資料として文書館などに収めたりした場合は、初期の“マルクス主義的技術史”の内容が後世に伝わることになったが、こうした場合は幸運な例外で、これらから判明する講義内容は、いわば、“氷山の一角”にすぎないであろう。本書著者はレニングラード工業専門学校のために、科学アカデミー・科学史=技術史研究所学術書記マトヴェイ・グゴーフスキーの監修で作成され、受講生数に対応して200部だけ印刷された「マルクス主義的技術史課程（1935年）」の要点解説（所要所文章化されたレジュメ）⁽³⁴⁾を目にする機会をえたが、それは手書きの原稿を謄写版で印刷し、簡単に製本したただけのものであった。しかも保存されているのはそ

の第1部「資本主義以前の構成体」だけで、第2部以降は見いだせなかった。

この時期に高等工業教育機関で“マルクス主義的技術史”を担当した教員の実践にかかわる資料は、多くの場合、このようにごく簡素な授業資料が当該教育機関に残されているか、あるいは教員（の子孫）の家に死蔵されてしまっているか、歴史の流れのなかで散逸してしまったか、のいずれかであろう。このため、後述するミシューリン⁽³⁵⁾やクラスナヤ=プレスニヤ工場の職長ゲーロフなどのように、彼らを批判するものたちが残した文章のなかにもみその名が残されている例もある。

彼らはどのような技術史の授業を展開していたのであろうか。幸いにして、ヴォルコフが批判の対象とした教員のうち2名の授業、およびヴォルコフ自身のそれは、先述のように講義録が残されており、その内容を辿ることができる。彼らの授業を見てみよう。

【ユーリー・ミローフ】

「技術史」担当教員のうち、ミローフは、ソ連ではじめて、“マルクス主義的技術史”に関する包括的な考察を明らかにしたとされる。1930年10月2日に彼が共産主義アカデミーで行った講演「教育の対象としてのマルクス主義的技術史」の速記録は翌31年に出版されている⁽³⁶⁾。ミローフは、党中央委員会11月総会を「わが国民経済の社会主義的再編の不可欠な構成部分である偉大な技術革命の理論的解明の問題を提起している」⁽³⁷⁾ものにとらえ、“マルクス主義的技術史”を「技術進歩における弁証法を明らかにする」ことによって、ソ連の「技術的後進性」の克服と「社会主義社会に適合した新しい技術の創造」⁽³⁸⁾といった実践的課題に貢献するものと位置づける。すなわち、彼は“マルクス主義的技術史”を「社会全体の技術としての、また個別分野の技術としての、そして個々の機械としての自己運動の諸法則と経路を明らかにする」⁽³⁹⁾ものと期待するのである。

この立場から、彼は、マルクスが『資本論』などで取り上げている製粉水車や時計などの事例を手がかりに、労働手段の登場からその分化・多様化、さらにマニユファクチュアの登場と発展、そして機械の登場へと、次代の技術を準備する技術の内在的な発展を重視する⁽⁴⁰⁾。この“技術発達に内在的な論理”に対する過剰な関心がヴォルコフに、そしてズヴォルィキンに批判されることになる（ズヴォルィキンの批判については後述）。

また、「マルクスは、技術が自然科学の意識的適用のもとで打ち立てられ、他方、理論の成り立ちは技術的実践の基礎の上に不断に実現されていると強調している」⁽⁴¹⁾として、技術進歩における科学の役割を重視し、「科学の最新の成果の技術における全面的適用と技術の視点から見て重要な諸問題の科学的検討に関する問題にびたりと接近する」⁽⁴²⁾ものとして“マルクス主義的技術史”に期待している。

【セルゲイ・イヴァニツキー】

レニングラード工業師範学校講師であった歴史家セルゲイ・イヴァニツキー⁽⁴³⁾はその講義内容を『技術史入門』⁽⁴⁴⁾と題して出版し、同書の解説を試みた4回の技術史方法論セミナーを担当した⁽⁴⁵⁾。

イヴァニツキーは「純粋な技術主義に反対しつつ、……同時に、労働手段としての機械を、機械が応用される諸条件における社会的諸関係と混同しているブルードン・タイプの小ブルジョア観念論者の眩惑的な“経済主義”とも闘った」⁽⁴⁶⁾マルクスに倣って、技術の進歩と経済の発展をバランスよく叙述しようと努力する。機械の登場の革命的意義を強調する彼は、大胆にも全技術史を「機械以前の技術」(Домашинная техника)と機械以降の技術に二分している⁽⁴⁷⁾。また、エルンスト・カップの器官射影説を「カップの理論はこじつけで、まったく機械論的である」⁽⁴⁸⁾として斥けつつ、(マルクスに倣って?)その筋骨系と脈管系への労働手段の二分法は踏襲し、「技術の過程で革命的な役割は筋骨系の労働手段が担う。脈管系体系ではない」⁽⁴⁹⁾として、脈管系労働手段は重視していない。

マルクスによる機械の作業機、原動機、伝導機構の3つの部分への区分を踏襲しつつ、「革命は……原動機ではなく、まさに作業機がもたらした」⁽⁵⁰⁾と作業機の規定性を強調している。この点では第3章で扱うハイム・ガルベルと違い、マルクス自身、および、今日のマルクス主義的技術史の一般的な理解と同様の認識を示している⁽⁵¹⁾。

【ニコライ・ヴォルコフ】

では、技術史担当教員でもあったヴォルコフ自身の授業はどのようなものであったのであろうか。

彼は自身の講義の方法論や講義内容について貴重な記録を残している。現在、それらはロシア科学アカデミー文書館に保管されている⁽⁵²⁾。彼は全部で60時間

の授業時間を次のように割り当てていた。

- ① 技術史の対象と方法（6時間）
- ② 資本主義的社会構成体以前の技術（6時間）
- ③ マニュファクチュア時代の技術（6時間）
- ④ 産業革命（6時間）
- ⑤ 産業資本主義の技術（10時間）
- ⑥ 帝国主義時代の技術（12時間）
- ⑦ ソ連における技術発達（14時間）

ミローノフ（明示的ではないが、……）やイヴァニツキーの例でもわかるように、こうした時代区分の問題は、当時“マルクス主義的技術史”の方法論として重要な論点であった（これについては後述する）。このうち方法論の部分でその“観念論的・折衷主義的性格”を批判的にとりあげたのが、カップ、ルートヴィヒ・ノワレ、ヴェルナー・ゾンバルトなどであったが、同時に「ブルジョア技術史によって蓄積された事実資料を利用する不可避性」を認めていた⁽⁵³⁾。また、彼も「イギリスにおける18世紀の産業革命の出発点としての、労働者の手から労働対象を奪い取った、機械のなかの作業機」の意義を強調していた⁽⁵⁴⁾。

4. アナトーリー・ズヴォルキンによる“整備・統一”と論集『技術史』刊行

“レーニンの戦友”クルジジャノフスキーの寵をえて台頭著しいズヴォルキン（第2章、第3章も参照）は、ヴォルコフ論文刊行の翌年、それを下敷きとしつつ、新たに発刊された論集『技術史』第1巻の巻頭論文で、現状の技術史教育への批判的検討を試みている。

そもそも高等工業教育機関への“マルクス主義的技術史”授業の導入の目的は、「古い専門家の一部が直接的な妨害への道に進んだ」⁽⁵⁵⁾なかで“新しい技術インテリゲンチヤア”を創造することにあつた。

この課題に照らして見たとき、ズヴォルキンの眼には、それまでのマルクス主義的技術史の教育実践には、以下のような7つの欠点が見受けられた。



図3 アナトーリー・ズヴォルキン

【欠陥①：古典からの引用過少】

ひとつは、マルクスからの引用の少なさである。

「残念ながら、技術史に取り組んでいる同志はまったくマルクスの著作からも、レーニンの著作からも、この方面のことがらに関して引用することをしていない。……テヒノロジーの批判的な歴史に関するすばらしい注89を引用しても、彼らはこの注の最初のほうだけ論及する（ヴォルコフがしているように）か、全文を引用していても、最初の部分だけ解説を付けてそれで済みますか、するだけである」⁽⁵⁶⁾。

【欠陥②：“過度の単純化”】

続いて、過度の単純化の弊害を次のように指摘する。

「マルクス主義的技術史の成功裏の研究とその教育の成功のためには、この事業に現れた誤りのボリシェヴィキの批判とそこに位置を占める単純化の根絶が不可欠である。……多くの場合、マルクス主義的技術史を講義する教員は不十分にしか養成されていない同志であった」⁽⁵⁷⁾。

【欠陥③：「技術（偏重）主義」】

さらに、ミローノフに見られる「技術（偏重）主義」^{テフニツィズム}（техницизм）を批判する。この論点は当時のニコライ・ブハーリンの学説批判と関連付けられている。

「[ミローノフの]『教育の対象としてのマルクス主義的技術史』は労働用具出現に関するマルクスの学説の本質について、カップの観念論的学説と同一視している。授業計画でも、教科書でも、著者はブハーリン同志が打ち出した隘路の理論⁽⁵⁸⁾に反対して闘う必要から逃げていて、主導的な環に関する問題の解釈には誤った命題がある。……レーニンの主要な環に関する学説はブハーリンの隘路に均衡するという理念に不当に置き換えられている」⁽⁵⁹⁾。

ミローノフは次のように述べていた。

「マルクス主義的技術史コースの課題は、未来の技術者に、どのようにして具体的な技術的課題が生れ、解決されてゆくのか、……認識で武装させることにある。研究の対象は具体的な発明でなければならない。……個々の具体

的な発明の分析にあたっては、特別の注意がその技術学的原理と構造の形成の発達に向けられなければならない」⁽⁶⁰⁾

ズヴォルィキンはこれを激しく批判する。

「これがマルクス主義的技術史の課程をブルジョア的折衷主義の位置に追いやり、個々の発明をそれらと人類社会の生産力やそのなかで労働活動が発展する生産関係との関連、また技術発展の道筋における具体的な歴史のなかで大きな影響をもつイデオロギーとの関連に関する説明や検討なしに発明を記述することを技術史の課程に持ち込む脅威を創り出している」⁽⁶¹⁾。

【欠陥④：「経済主義」】

ミシューリンに代表される「経済主義」を取り上げる。「ヨーロッパの経済の前進がパドル法からベッセマー法への転換を呼んだ」⁽⁶²⁾と単純化するミシューリンによって「マルクス主義的技術史の社会=経済的側面」が強調され、「すべての事象は技術発達の社会=経済的被規定性の問題に閉じ込められる」⁽⁶³⁾と述べる。

【欠陥⑤：“弁証法のスコラ化”】

ズヴォルィキンは、鉄筋コンクリートの梁材を取り上げて、鉄とコンクリートの“対立物の統一”と呼ぶかのごとき“弁証法のスコラ化”にも警告を発する。

「何よりも、現実科学的な研究に取って代わってスコラ的な成句が登場している。……この例[上述の鉄とコンクリートの例—引用者]は技術発展の実際の経路を史的唯物論の分析の基礎の上に示すことができず、現実の生活をこじつけの論理的な図式に腐らせる傾向をまったく明瞭に特徴付けている」⁽⁶⁴⁾。

【欠陥⑥：現場課題偏重の傾向】

彼は一部に現場課題偏重の傾向があることも指摘している。職長グーロフは自身に関わる旋盤の特定の機種に話題を絞り込んでいた。ズヴォルィキンはこれを皮肉る。

「これらの例では、先を行く同志たちは個々の具体的な問題の解決にあたって何も言わずとも弁証法的に思考しているので、技術における唯物弁証法の

どのような特別な研究も不要である、と結論付けているように見える」⁽⁶⁵⁾。

【欠陥⑦：“引用過多”】

最後にズヴォルィキンは最初に上げた欠陥とは逆の“引用過多”を取り上げる。

「拾い集めた引用で、著者たちは自分たちの無知をうまく隠そうとして、結果として、『自分の意見』を発展させはじめるところで、われわれが本当の意味での単純化の珍妙さを目にするということが起こる」⁽⁶⁶⁾。

【論集『技術史』の刊行】

「マルクス主義的技術史委員会」が刊行した論集『技術史』は、1937年の第6巻（刊行決定は1935年12月）まで⁽⁶⁷⁾、年1冊のペース（1936年は「エンゲルス没後40周年記念」号と併せ2冊）で刊行され⁽⁶⁸⁾、刊行部数は工業専門学校教員などをおもな読者に想定しつつも1万部（1936年発行の第4巻の場合）を数えた⁽⁶⁹⁾。技術史担当教員たちはこの論集から“マルクス主義的技術史”講義のあるべき姿を学ぼうとしたに相違ない⁽⁷⁰⁾。

5. “プロレタリア専門家”＝技術者養成と“マルクス主義的技術史”

ズヴォルィキンは、1934年に論文を発表し、“方言的要素”（диалектизаторство）[共通の“標準語”を持たない、との意味—引用者]⁽⁷¹⁾の強かった各地の技術史教育を俎上に載せ、大胆に批判して、“マルクス主義的技術史”の教育内容・方法の統一をめざした。しかし、これはズヴォルィキンの独創⁽⁷²⁾によるものではなく、ニコライ・ヴォルコフという、一介の工業専門学校の一教員のイニシャティヴによるものであった。“マルクス主義的技術史”の教育実践における“経済主義”と“技術（偏重）主義”という両極端な偏向を批判したのは彼であった。また、その後ソヴィエト・“マルクス主義的技術史”のなかで踏襲される時代区分のあり方も彼を出発点としていた。あたかも、わが国において、技術の本質を客観的・法則性の意識的適用とする、いわゆる「意識的適用説」の武谷三男による提唱の陰に内山弘正の発想があった⁽⁷³⁾ように、ズヴォルィキンに代表されるソヴィエト・マルクス主義流の技術史論の背後にはヴォルコフの働きがあった。本性上、ひとりの党イデオログであったヴォルコフは「技術の歴史、すなわち、『社会的人間の生産器官』の歴史はその社会の歴史の骨格をなす」⁽⁷⁴⁾ととらえた。

話を1930年代のソ連における技術史教育にもどしてみると、この時代、高等工業教育機関で「技術史」の教壇に立った教師には、イヴァニツキーやミシューリンのような正規の高等教育を受けた、いわば学究とミローノフ（ロシア最高の大学＝モスクワ大学中退ではあるが……）、ヴォルコフのような活動家あがりの経歴をもつ、ある意味“にわか仕込み”の教師が混在していたことが関心を惹く。彼ら、とくに後者は、いきおい、党のイデオロギー問題には敏感にならざるをえない。時期的にもうレフ（レオン）・トロツキーとの闘争が問題になるようなことはほとんどなかった⁽⁷⁵⁾が、当時まだ完全失脚の前で、“同志”の呼称付きで呼ばれ、レニングラードにあった科学アカデミー・科学史＝技術史研究所所長にして論集『技術史』の編集委員のひとりでもあったブハーリンとのその周辺、なかなか、科学史＝技術史研究所への批判⁽⁷⁶⁾は際立っていた。とりわけヴォルコフは当時イデオロギー戦線に圧倒的な影響力を誇っていた『マルクス主義の旗の下に』誌に、ブハーリンを所長に戴く科学史＝技術史研究所の定期刊行物『科学史＝技術史アーカイヴ』（の第1巻，第2巻）を舌鋒鋭く批判した書評を、I.イリインスキーなる人物と共著のかたちで寄せている⁽⁷⁷⁾。また、ここで取り上げた他の論者、イヴァニツキーとミローノフも、ブハーリンの理論、いわゆる“均衡理論”を非難している⁽⁷⁸⁾。

ここで再度確認しておかなければならないのは、そもそも“マルクス主義的技術史”が高等工業教育機関において、往々にして10歳代後半の学生を対象とした講義科目として構想されていたことである。“プロレタリア専門家”としての技術者の大量養成を図るうえで、また、党の当時の“イデオロギー的課題”に応えるためにも、その内容と方法はヴォルコフのような党イデオログによる主導（あるいは介入）を必須とした。

本章で中心的に取り扱ったヴォルコフの論稿「科学史＝技術史の諸問題」は、刊行後さほど時を経ずして「哲学研究会」なる団体の手で邦訳され、『『マルクス主義の旗の下に』文庫』の1冊（第27輯改編第8冊）として白揚社から1934年に刊行された訳〔編〕書『科学と技術の問題』に収められ、翌年、同社から他の訳書（『唯物辯證法最近の諸問題』）との合冊版、哲学研究会訳〔編〕『技術論と唯物辯證法』（白揚社、1935年）として再刊された際も同書に所収された。当時、技術論の分野で健筆をふるっていた相川春喜も同論文を参照し、この時点におけるその主著『技術論』においても肯定的に引用している⁽⁷⁹⁾。いわゆる労働手段体系説に立つ

技術論の確立に果たした同書の役割⁽⁸⁰⁾を考慮すれば、わが国ではまったく違った文脈で読まれながらも、ヴォルコフは(間接的に)わが国のマルクス主義的技術論の形成に大きな影響を及ぼしたのである。

注

- (1) 全連邦共産党(ボリシェヴィキ)中央委員会11月総会は「世界の科学と技術の最新の成果のうえに立つ工業と農業の発展、すべての生産装置の根本的な刷新、社会主義的諸要素と資本主義的諸要素の間の闘争という条件で生じる社会経済的過程の複雑さは新しいタイプの、社会主義経済を打ち立てる技術指導者、組織者を要求している」(«Директивы ВКП(б) по хозяйственным вопросам». М.: Гос. социально-экономическое изд-во. 1931. С. 608)と述べていた。
- (2) この遅れの理由を端的に示す資料は、管見の限り見当たらない。しかし、その教育実践のためには「文化革命」期の高等教育の混乱の一定の終息を俟たなければならなかったのであろう(これについては、とりあえず、市川浩「第V部第1章 科学アカデミーの戦時疎開—格差と確執」、市川浩編『科学の参謀本部—ロシア/ソ連邦科学アカデミーに関する国際共同研究—』北海道大学出版会、2016年、359、360頁参照)。また、1933年になって事態が急速に動くようになった背景にナチスとその技術イデオロギーの台頭も挙げられなければならないであろう。1934年、ナチスが政権の座に就いた年の翌年に刊行された論集『技術史』第1巻の巻頭論文(A. Зворыкин. “Основные вопросы преподавания и изучения истории техники.” «История техники». Сборник No. 1, Москва; Изд-во “За индустриализацию.” 1934. С.5-28)でズヴォルィキンは、「その支配を確実にする目的で、ブルジョア科学は、観念論的秩序の技術史に関する研究を神聖視し、奨励する。……技術史の階級的活用の例は、ドイツの国家社会主義政府が与えている。……フリック[当時、ナチスドイツの内相—引用者]の技術史プログラムを解説しつつ、VDI Nachrichten (No. 20, 1933)の著者[不明]は以降授業計画の基礎に置かれなければならない“科学的”原理を述べている。『それ[技術史]は社会的対立を緩和し、無数の例で、才能あるひとびとの前進と成功を示す』と書いている。……こうした哲学の基本的な環は次のようなものである。歴史の原動力に立ち帰る必要がある。技術は歴史の原動力であり、ドイツ精神は技術の原動力であり、神はドイツ精神に靈感を与えるものである、と……」(Там же, С. 6-8)と警告している。
- (3) «История техники». Сборник No. 1, Москва; Изд-во. “За индустриализацию”. 1934. 184 сс.
- (4) Г. М. Кржижановский. “Предисловие.” Там же, С.3,4 : 論集『技術史』の発行は、ブハーリンを所長とするレニングラードの科学史=技術史研究所が先行して刊

行していた論集『科学史=技術史アーカイヴ(«Архив истории науки и техники»)』に対抗するものでもあったと考えられる。『技術史』第1巻のある書評には、「しかしながら、技術系高等教育機関における技術史の教授はその前に立ちはだかる学術上の問題のすべてを窮め尽くしているわけではない。……モスクワの論集『技術史』は有益にもレニングラードの『科学史=技術史アーカイヴ』の[当時既刊の、一引用者]2巻と以下の点で違っている。すなわち、技術史の具体的なモメントにマルクス主義的な分析を加える論文と並んで、方法論的な問題の検討にしかるべき注意を振り向けているからである」(H. Волков и И. Ильинский, “На пути к созданию новой науки.” Сб. «История техники». Вып. 1-й. Отв. редактор — акад. Г. М. Кржижановский. Москва. 1934. «Под знаменем марксизма». No. 2, 1934. С. 160)」と述べられている。

- (5) H. Волков. “Некоторые вопросы истории науки и техники.” «Под знаменем марксизма». No. 4, 1933. С. 153.
- (6) Там же, каз. С. 144-158.
- (7) Архив Российской Академии наук (далее - АРАН), Фонд (далее — Ф.) 154, Опись (далее — Оп) 2 а, Дело (далее — Д.) 7, л. 8.
- (8) H. С. Волков. «Могучая советская авиация». Москва: Госполитиздат, 1940. 80 сс.
- (9) ロシア科学アカデミー・ロシア史研究所文書館のコンスタンチン・ドロズドーフ氏の2020年11月16日付, および, 2021年1月13日付筆者宛て電子メール(典拠は同館所蔵の個人ファイル: Научный архив Института Российской истории Российской Академии наук, Личный фонд Н. С. Волкова)。なお, 「大祖国戦争史委員会」内での彼の役職名については, 同委員会を記念するサイト (<http://komiswow.ru/?q=chkomis> 2021年10月1日閲覧) で確認した。
- (10) Под ред. H. С. Волкова. «Вопросы истории КПСС» [Текст]: [Сборник статей]. (Труды 1-го Московского ордена Ленина медицинского института им. И. М. Сеченова Т. 12). Москва: 1961 - 295 сс.: しかし, 彼は“責任編集者”として名を寄せているだけで一文も書いていない。ただ, その前には, 兼職先の師範学校の紀要に「社会主義革命と労働者階級の文化的・技術的水準」と題する論稿を寄せている(H. С. Волков. “Социалистическая революция и культурно-технический уровень рабочего класса.” Московский областной педагогический институт, «Учёные записки». Т. 58. 1957 г. С. 19-73)。
- (11) I.M. セーチェノフ名称第一モスクワ国立医科大学学長室付顧問(元副学長)イヴァン・チージュ氏の2020年12月2日付筆者宛電子メール, および, 同大学附属医学史記念館マリーナ・チェルニチェンコ館長の2021年1月19日付筆者宛メール。および, 国立モスクワ州大学総務課のナターリヤ・スヌイトコ氏と同校文書館連名の2021年1月25日付筆者宛メール。唯一可能な推測は, 彼が1991年12月のソ連邦共産党解体の時点まで, 離党もせず, 除籍(除名)もされ

- ることもなく、党員資格を保有したまま存命であった、ということであろう。
- (12) Там же, С. 153: ヴォルコフはミシューリンのこの発言を新聞『技術』(«Техника») 1933年5月30日号に引用されている物質文化史アカデミーの寄稿から引用しているが、確認はできなかった。Академия материальной культуры, цит. по газ. «Техника». от 30/V, 1933 г. [あるはずの「史」を表す истории の語が欠落している]。
- (13) Волков. Указ. статья в примечании 5. С. 153.
- (14) Там же, С. 154: ヴォルコフはミローノフのこの発言を、やはり新聞『技術』の1933年5月30日号(«Техника»). от 30/V, 1933 г.) から採っている。
- (15) Волков. Указ. статья в примечании 5. С. 154.
- (16) Там же: とはいえ、イヴァニツキーは化学技術をまったく軽視していたわけではない。たとえば、「化学の成功 [クロード=ルイ・ベルトレ] のおかげで、漂白と捺染の分野に根本的な変化が起こった」(Иваницкий. «Введение в историю техники». Указ. соч. в примечании 13. С. 61) と近代化学工業勃興の意義を強調してもいる。
- (17) Н. Волков. “[Критика и библиография] В. В. Данилевский. «Очерки истории техники XVIII-XIX вв.». М. Л.; Соцэкгиз. Стр. 356. 1934 г.” «Под знаменем марксизма». No. 4, 1935. С. 197-201.
- (18) В. В. Данилевский. «Очерки истории техники XVIII-XIX вв.». М.-Л., Соцэкгиз, 1934.
- (19) Волков. Указ. статья в примечании 17. С. 197.
- (20) Там же, С. 198.
- (21) Там же, С. 199.
- (22) Там же, С. 200.
- (23) Там же, С. 200, 201.
- (24) Волков. Указ. статья в примечании 5. С. 155.
- (25) Волков и Ильинский. Указ. рецензия в примечании 4. С. 162.
- (26) Волков. Указ. статья в примечании 5. С. 155.
- (27) Там же, С. 154.
- (28) Там же, С. 156: この箇所には典拠が示されておらず、また、ヴォルコフがミュンヘンを訪ねた記録もない。いくつかの技術博物館の開設を決めた党中央委員会の1933年3月25日付決定だけが引用されている。ここにミュンヘン技術博物館に関する記述があったのかもしれないが、確認できなかった。
- (29) Фридрих Даннеман. «История естествознания: Естественные науки в их развитии и взаимодействии» [под ред. М. Л. Левина и О. Ю. Шмидта]. Москва: Медгиз. 1932-1938.
- (30) Волков. Указ. статья в примечании 5. С. 154: ヴォルコフは、天文学を占星術としても発展したと主張するダンネマンにたいして、それが数学の発達、生産の発達に条件付けられていることを明らかにしたエンゲルスの主張を対置して

いる(Там же, С. 157)。また,(ダンネマンが)「労働者の相対的な高賃金が……機械の発明と生産過程の改良に前進させた」としている点を「産業革命の本質を何ら理解していない」(Там же, С. 158)と批判している。ただ,ヴォルコフは,アメリカで労働者の高賃金が技術進歩につながった例を認めている(Там же.)。さらに,ヴォルコフはダンネマンに特徴的な方法論が彼のナショナリズムに根ざしていることを指摘している(Там же)。

- (31) АРАН, Ф. 154, Оп. 1, Д21, лл. 59, 60.
- (32) ミローノフは官吏の子どもとしてニージニー=ノヴゴロドに生まれ,1912年にロシア社会民主労働党(ボリシェヴィキ)に入党,革命運動の故を以て在学中だったモスクワ大学法学部から除籍された。革命後,サマラを拠点に活動していたが,1921年にモスクワに移り,その頃から教育,および教育行政分野で活躍する。V. V. キービシエフ名称モスクワ土木技術専門学校の技術史教室主任を1932年から37年まで勤めた。しかし,そのトロツキー批判(後述,注75参照)にもかかわらず,トロツキストとして1938年に逮捕され,金鉱山開発・採掘における囚人労働で有名なコルィマの収容所に送られたが,幸い銃殺を免れ,10年の刑期を終えて1948年に釈放された。しかし,なお10年近くコルィマ周辺に留まり(金鉱山の経営要員になっていたと言われている),1957年になってようやくモスクワに帰り,翌年には年金生活に入ったが,科学アカデミーのS.I. ヴァヴィーロフ名称自然科学史=技術史研究所に協力し,技術史研究に勤しんだ(https://ru.wikipedia.org/wiki//Милонов,_Юрий_Константинович 2024年4月22日閲覧)。なお,彼の技術史の仕事の一端は,日本語でも読むことができる(ユ・カ・ミローノフ「第15章第4節 土木建設技術の発達」,ソ連科学アカデミー編/金光不二夫他訳『世界技術史—太古から産業革命まで—』大月書店,1986年,349~363頁)。
- (33) クズネツォフは専門学校で電気技術をまなんだのち,ドニエプロペトロフスク大学で歴史学を学んだ。1930年代には全連邦エネルギー・電化科学研究所に勤務するかたわら,1930年から39年までモスクワ・エネルギー専門学校で教えた。戦後は物理学史の研究に取り組み,科学アカデミーのS. I. ヴァヴィーロフ名称自然科学史=技術史研究所を舞台に活発な著述活動を展開した(https://ru.wikipedia.org/wiki//Кузнецов,_Борис_Григорьевич 2024年4月25日閲覧)。
- (34) Ленинградский индустриальный институт. «Конспект курса “Марксистской истории техники.”». Часть I: Докапиталистические формации. Составлен Институтом истории науки и техники АН СССР под руководством М. А. Гуковского.
- (35) ミシューリンは,サマラ大学を卒業した世界古代史の専門家。1934年からはモスクワ国立大学の教授を努めた。1930年から,当時レニングラードに所在した「国立物質文化史アカデミー(Государственная академия истории материальной культуры: ГАИМК)^{ガイムク}」でも研究に従事していた。ガンのため早逝(https://ru.wikipedia.org/wiki//Мишулин,_Александр_Васильевич 2024年4月25日閲覧)。

- (36) Ю. К. Милонов. «Марксистская история техники: как предмет преподавания. Стенограмма доклада в Коммунистической Академии, 2 октября 1930г.». Государственное социально-экономическое издательство. 1931г.: なお、同書巻末 (С. 54-71) には計27の単元からなる授業プラン案が収められている。
- (37) Там же, С. 4.
- (38) Там же, С. 32.
- (39) Там же, С. 31.
- (40) Там же, С. 18. ミローノフ自身は技術史における時代区分の方法を特段示してはいないが、該書巻末の授業プラン案では、実際の授業をこの順番に展開しようとしていたと思われる (Там же, С. 54-71)。また、ミローノフは、時計においては「均等運動を生み出すすべての理論が発展している」(Там же, С. 10) とし、製粉水車の歴史を「伝動機構の歴史をみごとに学ぶことのできる」(Там же, С. 21) 素材と位置づけている。
- (41) Там же, С. 11.
- (42) Там же, С. 33.
- (43) イヴァニツキーは、1914年、当時ロシア領内であったワルシャワ大学を卒業後、ギムナジウムなどで教育活動に従事、1923年からいくつかの高等教育機関で教え、1936年からは名門のА.І. Гелтцен名称師範学校で教壇に立った。本来の専門は中近世社会運動史で、1941年レニングラード国立大学から「1768年ウクライナ右岸地域における農民叛乱」のテーマで博士の学位を得ている (<https://bioslovhist.spbu.ru/hist-pg-ld/1034-ivanitskiy-sergey-fedorovich.html> 2024年4月25日閲覧)。その後、ドイツ軍による包囲下のレニングラードから辛くも脱出したものの、疎開する途中の1942年1月に亡くなった。死因は不明である (イヴァニツキーの勤務校の後身、А.І. Гелтцен名称ロシア国立教育大学記念館のエカチェリーナ・コーロソヴァ館長の2020年11月9日付け筆者宛電子メール)。
- (44) С. Ф. Иваницкий. «Введение в историю техники». Л. Л.: Учеб. комбинат гражд. воздуш. флота, 1933.
- (45) 4回にわたるセミナーの記録は2回分ずつに分けて、セミナーを聞くことができなかつたひと向けに通信教育講座の小冊子として出版された。С. Ф. Иваницкий. «Марксистская история техники. Методоразработка к руководству Иваницкого С. Ф.». задание 1-2 и задание 3-4. Л.; Ленинградский дом технической учебы. 1933.
- (46) Там же, Задание 1-2, С. 13.
- (47) Иваницкий. «Введение в историю техники». Указ. соч. в примечании 19. С. 15-34.
- (48) Там же, С. 19.
- (49) Иваницкий. «Марксистская история техники. ……». Указ. в примечании 20. С. 9.
- (50) Там же, С. 12.

- (51) マルクス自身は、「道具機[ここでの作業機のこと — 引用者]は、適当な運動が伝えられると、自分の道具で、以前に労働者が類似の道具でおこなっていたのと同じ作業をおこなう一機構である。原動力が人間から出てくるか、それ自身また一機械から出てくるかは、事態の本質をなにも変えない。本来的な道具が人間から一つの機構に移されるのに応じて、単なる道具に代わって機械が現れる」(カール・マルクス／日本共産党中央委員会社会科学研究所監修『新版 資本論』第1巻第3分冊、新日本出版社、2020年、656、657頁)と述べ、産業革命期の発達した機械における作業機の規定性、その社会経済史的意義を強調している。わが国の、いわゆる「労働手段体系説」に立つ技術論でもこの見方は踏襲されている(例えば、中村静治『技術論入門』有斐閣、1977年、91～96頁)。原動機の発達に革命的な意義を見るガルベルのユニークな技術論については、本書第3章を参照のこと。
- (52) АРАН, Ф.154, Оп. 4, Д. 26, лл. 1-83 : なお、この講義レジュメの“付録部分”とも言える71～83頁は航空機の発達に充てられている。
- (53) Там же, С. 36.
- (54) Там же, С. 45.
- (55) Зворыкин. Указ. Статья в примечании 2. С. 5 : 言うまでもなく、その前年の10月、ドンバス地方で発生した“ブルジョア専門家”による“反革命サボタージュ事件”, いわゆる「シャフトイ事件」を指す。「シャフトイ事件」とその政治的文脈については、中嶋毅『テクノクラートと革命権力—ソヴィエト技術政策史 1917～1929—』(岩波書店、1999年)参照。
- (56) Там же, С. 11.
- (57) Там же, С. 18.
- (58) ブハーリンの哲学を研究しているロシア科学アカデミー・哲学研究所の研究員オレグ・ウスチーフ氏に尋ねたところ、ブハーリンの著書には、“隘路”(узкое место) という語そのものは見当たらないそうである。この時代、スターリンの側に立つ論者たちには、論敵が言ってもいないこと、あるいは片言隻語を以て“レッテル”として利用する悪習があり、そうした事例のひとつとして理解するのが妥当であろう、とのことであつた(ウスチーフ氏の2020年11月12日付筆者宛私信)。
- (59) Зворыкин. Указ. статья в примечании 2. С. 19 : ブハーリンの「均衡理論」は、彼なりの弁証法の理解に基づく、曲がりなりにも哲学的な概念である(さしあたり、岩崎允胤「均衡論について」日本哲学会『哲学』1958年第8号、58～69頁参照)。それに対し、レーニンの「環」(звено) 論は、鎖が最も弱い環から破れることから、まず何よりも、革命勢力が攻勢を集中すべきポイントを探る政治戦術上の概念である。レーニンは、「それぞれの特定の時機に、鎖の特殊な一環を、すなわち全力をあげてそれをつかめば、鎖全体をおさえることができ、しかも

つぎの環への移行をしっかりと準備できるような、特殊な一環を見つけだすことができなければならない」と述べている(ヴェ・イー・レーニン／邦訳「ソヴェト権力の当面の任務」、『レーニン全集』第27巻、大月書店、1958年、227頁)。両者はそもそも同列に論じられるものではないはずである。

- (60) Там же, С. 20. ズヴォルィキンはミシューリンのどの著作から引用したのか、典拠を明らかにしていない。また、ロシア語版 Wikipedia (https://ru.wikipedia.org/wiki/Мишулин,_Александр_Васильевич 2024年4月25日閲覧)にはミシューリンの著作で技術史に関係したものは挙げられていない。
- (61) Там же, С. 20.
- (62) *Зворыкин*. Указ. статья в примечании 2. С. 20 : ズヴォルィキンはここでもミシューリンのどの著作から引用したのか、典拠を明らかにしていない。
- (63) Там же.
- (64) Там же, С. 24 : この点ではイヴァニツキーも、「残念ながら、この関係での仕事の多くが、あれこれの技術的現象を弁証法に“押し込める”表面的で形式的な試みを超えてはいない。電動機の発達との関係では、たとえば、単相電流がテーゼ、2相電流がアンチテーゼ、3相電流がジンテーゼといったことが示されている。……鉄筋コンクリートは”対立物の統一”の輝かしい現れである、と。……ステツキー [革命家。党理論誌『ポリシェヴィク』編集長、党中央委員会宣伝扇動部長など歴任。1938年に逮捕・銃殺された。一引用者]同志が、『何人かの同志は唯物弁証法の宣伝、その適用をめざす闘争に弁証法的な、あるいはマルクス=レーニン主義的な単純なレッテルを貼って、それらを知識のあれこれの分野に持ち込んでいる』と言っているのは正しい」と述べている (*Иваницкий*. «Введение в историю техники». Указ. соч. в примечании 19. С. 14)。
- (65) *Зворыкин*. Указ. статья в примечании 2) . С. 25.
- (66) Там же, С. 27.
- (67) 第6巻で廃刊となったのは、直接には、発行元の上部機関、高等技術教育委員会が、1936年5月1日付で人民委員会議 [内閣に相当 一引用者] 附属全連邦高等教育事業委員会に吸収されたためであると考えられる (https://ru.wikipedia.org/wiki/Всесоюзный_комитет_по_высшему_техническому_образованию_при_СНК_СССР 2020年12月22日閲覧)。
- (68) «История техники». Выпуск шестой. Москва - Ленинград : Объединенное научно-техническое изд.-во НКТП СССР. 1936. Обратная сторона титула.
- (69) Тот же сборник. Выпуск четвертый. 1936. Обратная сторона титула.
- (70) この論集のほか、哲学者・美学者・文献学者のヴァレンチン・アスムスがまとめた資料集『マルクス・エンゲルスの技術論』(B. Ф. Асмус [Сост.]. «Маркс и Энгельс о технике: Сборник материалов с предисловием Н. И. Бухарина». М.-Л., 1933)もこのような工業専門学校教員にとって良い参考書となったことであろう。

- (71) ズヴォルィキンの論文に見られる表現 (*Зворыкин. Указ. статья в примечании 2. С. 18*).
- (72) この点、ズヴォルィキンの“独創”に当たるかどうかは精査が必要であるが、ズヴォルィキンが当該論文で“科学主導説”と捉えかねないまでに科学の役割を重視していることが関心を惹く。「どのようにして結果的に厳密な科学の基礎が歴史的に発見された形態に転化するか、この科学の基礎がどのようにして技術学的受容を一層改善することを可能としているか、無数の例を挙げることができる。[例として選鉱法の発展を取り上げている。—引用者]……技術史は、もっとも詳細に、事例を研究しなければならない。というのは、新しい条件のもとでは、生産力と技術発展の新しい段階では、こうした例はまったく合理的に扱われなければならないからである」(*Там же, С. 14*)。この点では、この当時ソ連ですでにマルクスの、いわゆる『機械論草稿』が研究されていたことに留意しなければならない。イヴァニツキーは、「マルクスはその技術に関するノートで、一方で『資本主義的生産様式は自然科学を生産過程に直接奉仕するものに変え』、他方で『生産の発達を自然を理論的に征服する手段を与える』ことを示している」(*Иваницкий. «Введение в историю техники». Указ. соч. в примечании 13. С. 62*)と述べている。また、ズヴォルィキンは“内的な技術の矛盾”に言及している。すなわち、「技術進歩を単にその社会的被規定性において把握するのみならず、内的な技術的矛盾の論理で解するという、まさに輝かしい智恵は、技術発達の弁証法的分析を並ぶものがないかたちで(示した)マルクスの技術に関する学説が行ったものであり、現在のもののみならず、未来社会の技術発達の方向性を理解するのを助ける」(*Зворыкин. Указ. статья в примечании 2. С. 18*)と述べている。ズヴォルィキンのこれらの議論はあまりに短く、未展開であるが、“科学技術革命論”など、その後のソ連における技術論の展開との関連ではたいへん興味深く思われる。
- (73) 八巻俊憲「内山弘正(1915～95)の実践活動と技術思想—武谷技術論との関連において—」, 日本産業技術史学会『技術と文明』別号(電子版)第21巻, 2017年, 1～11頁参照。
- (74) *Н. Волков и И. Ильинский. “Первый опыт: Рецензия на кн.: «Архив истории науки и техники. Труды Института истории науки и техники АН СССР». Вып. 1. Л.: 1933.” «Под знаменем марксизма». 1933. No. 5. С. 237.*
- (75) ここで取り上げた文献についていえば、ミローノフはわずか一か所で「右翼, トロツキストはブルードンやラダイト運動の時代と相変わらず, 機械とその社会的充用を混同している」(*Милонов. Указ. соч. в примечании 36. С. 27*)とトロツキーの技術理解を批判した。また、ヴォルコフは、「(トロツキーが)『人間はまったく怠惰な動物で, 人間の進歩もこの本質に根ざしていて, そのため人間は自分の力の支出を節約しようとしたので, 技術の発達があったのである』,

続けて、『強制は大きな役割をはたしているし、今後も果たすであろう』と述べた(Волков. Указ. статья в примечании 5. С. 152)として、トロツキーの“俗流”技術論を嘲笑した。

- (76) ブハーリンは、それでもまだ、この当時は一学究として敬意を以て扱われていた。ズヴォルィキンはその論文で「労働者階級への攻撃とブルジョアジーの地位の強化に技術進歩を活用することについて」書かれた有益な文献のひとつに、ブハーリンの『現代資本主義の技術と経済』(Н. И. Бухарин. «Техника и экономика современного капитализма». Ленинград: Изд-во АН СССР, 1932 год)を挙げていた(Зворыкин. Указ. статья в примечании 2. С. 9)。
- (77) 第1巻については、『科学史=技術史アーカイヴ』にとって、全体として特徴的なのは、まだら状のイデオロギー的混交である。メンシェヴィキ化する観念論(меньшевистствующий идеализм)、および機械論の代表者たちの所産に混じって、明らかに観念論的な理論が混じる余地が見いだされた(Волков и Ильинский. “Первый опыт……” Указ. рецензия в примечании 74, С. 237)と指弾し、第2巻についても、「第1巻に比べ、いくつかの成果を挙げている[スタニスラフ・ストルミーリンとエフゲニー・ツェイトリンの論文は「編集部はこのような方向性を継続することが望ましい(С. 196)」と高く評価している一引用者]にもかかわらず、『科学史=技術史アーカイヴ』第2巻は「あらゆる種類の欠陥に苛まれている」(Н. Волков и И. Ильинский. “Рецензия на кн.: «Архив истории науки и техники. Труды Института истории науки и техники АН СССР». Вып. 2. Л.: 1934.” «Под знаменем марксизма». 1934. No. 3. С. 197)として、とくに「内容の雑多性」(Там же)、「技術史の全般的問題の哲学的・方法論的分析の欠如」(Там же)を取り上げている。
- (78) イヴァニツキーのブハーリン批判を取り上げてみよう。彼は、「わが国機械論派は、ブハーリンを長として、間断なく、生産力を技術に矮小化している。……/……機械論派は生産関係を生産力発展の受動的な結果だと理解している。……ブハーリンの意見では、あらゆる人類社会においては、労働支出の配分における一定の均衡が実現しなければならないことになる」(Иваницкий. «Введение в историю техники». Указ. соч. в примечании 44, С. 12, 13)と述べている。また、「わが国機械論者は、第一に、生産力と技術を同一視し、技術はそれ自身みずからの経済を生むと仮定して、経済の技術発達にたいする逆の作用の可能性を認めずに技術と経済の相互関係を歪曲する。……この「[均衡理論]の一引用者]見方によれば、技術発達は『隘路』に応じて生じ、不可避免的に発達的全般的なテンポを低減することになる」(Иваницкий. «Марксистская история техники. ……». Указ. в примечании 45, С. 5)としている。しかし問題は、オレグ・ウスチーノフ氏が言う(注33参照)ように、ブハーリンの議論をこのようにとらえてしまうことが、果たして妥当かどうかということであろう。第一、

ブハーリンを単純に「機械論派」に分類することには慎重にならざるをえない（この点では、藤岡毅『リュセンコ主義はなぜ出現したか—生物学の弁証法化の成果と課題—』（学術出版会、2010年）の、たとえば、94頁参照）。ミローノフはその講演のなかで多くの時間をブハーリン批判に充て、技術を「自然に対する社会の積極的適応」（Милонов. Указ. соч. в примечании 36, С. 27）と見なす立場から、ブハーリンの「技術への不介入、いわば技術の諸問題における無党派性、という貧しい理念（Там же, С.30）」が生じ、技術革命における階級闘争の視点を欠如させていると批判している。この時代、“ブルジョア専門家”による“反革命サボタージュ事件”，いわゆる「シャフトイ事件」以降，“新しいプロレタリア専門家”の養成が国家的課題となっていたことを考慮すれば、この論点こそブハーリン批判の核心であったのかもしれない。

- (79) 相川春喜『技術論』三笠書房、1935年、90、93頁。相川が引用しているのは、本章でも重視した、ヴォルコフが技術史の時代区分を論じた箇所であるが、技術を「それ[生産力]の一要素たる特定の労働手段又はその体系そのもの（同書93頁）」とする自己の概念規定を確認するためにもヴォルコフの議論を援用している。
- (80) 中村静治は、「概念規定をめぐる唯研内部の論争は、以上の相川『技術論』をもって、一段落したとしてよからう」と述べている（中村静治『技術論論争史 上』青木書店、1975年、46頁）。なお、附言すれば、本書著者は、「唯物論研究会」内部で技術の概念規定が丹念に追究されたこと、および（より重要な点として）、戦後、技術の本質を“客観的法則性の意識的適用”に見る、いわゆる「適用説」の登場と普及によって、わが国では技術の定義がいささか過剰に論じられる傾向にあるのではないかと考えている。ソ連での諸議論には、多くの場合、この面では大きな懸隔もなく、いわば一様に「労働手段体系説」に立っているためか、あえて技術の定義に多くの頁を割くことが少なかったように思われる。

第2章 ソ連邦科学アカデミー・科学史 =技術史研究所(1932~1938年)

では、この当時、“マルクス主義的技術史”を探究していたのはニコライ・ヴォルコフら高等工業教育機関関係者たちだけであったのであろうか。この当時のソ連の言論界を見てみると、“マルクス主義的技術史”を、よりアカデミックに追究しようとしていた、もうひとつの潮流があったことに気が付く。では、なぜこの潮流は歴史の闇に消えていったのであろうか。

本章、および次章ではソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所における探究とその研究員ハイム・ガルベル(1903~37)の思索に光を当てる。

1. 知られざる研究所

序章でも述べたように、ガルベルは「技術のマルクス主義的概念の修得にもっとも関連性が強い哲学的諸問題に取り組んだ」⁽¹⁾最初の人物であった。しかしながら、わが国のマルクス主義技術史・技術論に関連した同時代の文献のなかにハイム・ヨシフォヴィチ・ガルベルの名前を見いだすことはできない⁽²⁾。また、1930年代、量子力学や相対性理論の哲学的解釈に尽力したとされるセルゲイ・ヴァシーリエフの名前がわが国で論じられることもなかった⁽³⁾。ガルベルもヴァシーリエフらも、同じ研究機関、レニングラード(現、サンクト=ペテルブルク)に立地していたソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所(以下、研究所と略記)を舞台にそれぞれ活発な論述活動を展開していた。しかし、この研究所は1932年3月28日のソ連邦科学アカデミー総会で設立が承認されたものの、わずか6年後の1938年3月5日付科学アカデミー幹部会布告により閉鎖されている。しかも、1936年夏に研究所がモスクワに移転したあと、それはその規模を大幅に縮小した。ガルベルとヴァシーリエフはともにその少し前、4月に逮捕されている。この研究所は、事実上、1936年の夏、すわなち、設立からわずか4年数カ月で活動を停止していたことになる。

現在のロシア科学アカデミー・セルゲイ・ヴァヴィーロフ名称自然科学史=技術史研究所は1953年、本章が対象とする科学史=技術史研究所とは別の、まったく新しい研究所として設立されたものであるが、その雑誌、『自然科学史=技術史の諸問題』(«Вопросы истории естествознания и техники»)誌に戦前の科学史=技

術史研究所の設立70周年にあたり、アレクサンドル・ドミートリエフ⁽⁴⁾、ユーリー・クリヴォノソフ⁽⁵⁾両氏の論文が掲載され、ようやくこの研究所の全体像が可視化されるようになった。ドミートリエフはその詳細を極めた論稿において、この研究所の研究者、その周囲の人々、総計50名近い人物を（そのうちかなりの人数をフルネーム・生没年付きで）紹介し、この研究所がどのような集団に担われていたのかを明らかにした。また、クリヴォノソフ論文は、初代所長ニコライ・ブハーリン、副所長アブラム・デボーリンなど、この研究所に指導的立場でかかわった人物のソヴィエト政治史における過酷な運命を軸に、研究所の、いわば政治史を扱っている。これらのほか、オクサーナ・シモネンコは先に掲げた著書において、技術史のヒストリオグラフィー全般を扱った章でこの研究所の技術史分野における活動をごく簡単に紹介している⁽⁶⁾。コンスタンチン・トミーリンはソ連の大物理学者セルゲイ・ヴァヴィーロフの科学史研究との関わりを述べる文脈でこの研究所に言及している⁽⁷⁾。

ここでは主にドミートリエフ、クリヴォノソフ両氏の論文に学びつつ、研究所の初代学術書記（研究所の日常的運営に責任をもつ役職。事務部門を統轄する）であったマトヴェイ・グコーフスキーの手になる同時代における研究所活動報告や主要な会合や人物に関する文書館資料を活用して、この日本人にとってはほとんど知られていない、より正確に言えば歴史から抹殺された研究所の概要を提示することとしたい。その際、この研究所を構成した諸分野のなかでもっとも活発に活動し、本書で大きな論点となる科学史=技術史の“マルクス主義化”がもっとも鮮明に現れた技術史の分野に焦点をあててみたい。

2. 設立の経緯と最初期の活動

1929年、全連邦共産党（ポリシェヴィキ）政治局員ニコライ・ブハーリンは、ヨシフ・スターリンと対立し、失脚した⁽⁸⁾。その後は、その該博な知識と豊かな見識を基礎に、一学究（科学アカデミー会員。歴史学・経済学）、あるいはジャーナリスト（連邦政府機関紙、『イズヴェスチヤ』（«Известия»）の編集長など）として活動するはずであった。彼の科学史=技術史にたいする関心は広く知られていたため、ヴラジーミル・ヴェルナツキーが1921年に創設、しかし不活発だった「知識史委員会」を1930年10月3日付けで引き継ぐことになる⁽⁹⁾。

「知識史委員会」は1921年に設立されたものの、ヴェルナツキーの逮捕やその

一時的な海外移住のために、1926年によく活動を開始している⁽¹⁰⁾。しかし、その運営は無計画で、あれこれの報告を聞く会合をときおり開くものの、報告の多くが科学者の伝記的紹介にとどまっていた。しかし、出版事業は活発で、モノグラフのシリーズ出版物である『知識史委員会彙報』(«Труды Комиссии по истории знания»)と個別科学(者)をテーマとする『概要』(«Очерки»)シリーズがあった。『彙報』にはヴェルナツキーの『知識史の現代的意義に関する考察』(1927年)など11冊、『概要』シリーズは全部で8冊が刊行された。『アイザック・ニュートン』(1927年)、『ニコライ・カステリン』(1927年)、『マルセラン・ベルテロ』(1927年)、『ウィリアム・トムソン』(1928年)、『アレクサンドル・ブートレロフ』(1929年)、『アレクサンドル・ラッポ=ダニレフスキー』(1929年)、『レフ・シュテルンベルク』(1930年)、『アレクセイ・シャフマートフ』(1930年)の8冊(最後の3名は人文系の学者)がそれである。しかし、独自の定員、面積、図書室がなく、そのため、その活動の全面的な展開にはおのずと制約があった。



図4 ニコライ・ブハーリン

1930年末にブハーリンが議長に就任すると、彼はこの委員会の活動を次の5つの方向性に沿って、全面的に再編しようとした。すなわち、①マルクスとレーニンの方法論の基礎の上での全時代、全世界の国々の科学史の計画的な研究、②従来、委員会の活動のなかにまったく位置づけられていなかった技術史の枠組みと方法論に関する計画的な研究、③科学アカデミーの他の研究所、さらにはアカデミー外の研究所が実践的に取り組んでいる諸問題の歴史の研究、④委員会に附属した科学史=技術史博物館、すなわち、一方では委員会の学術活動のための研究室となり、他方ではその活動をポピュライズし、広範な大衆にその成果を示す博物館の創設、⑤委員会の科学活動の道具立てとなる図書館、図書=地図館の創設、である。

1931年中は、人員(全員兼業であるが)の選定とグルーピング、および図書館の整備に当てられた。図書館は、科学アカデミー中央図書館の所蔵文献を分割して図書館とし、これに加えてヴェルナツキーの個人蔵書を保管する特別のキャビネットを整備した。また、博物館用の記念品の収集のため、レニングラード・ソ

ヴィエトは工場などへ由緒ある物品の廃棄を禁じる措置を公布した⁽¹¹⁾。さらに、ブハーリンはソ連における科学史=技術史の研究活動を国際的な研究連絡網にリンクさせることにも腐心し、第2回科学史国際会議（ロンドン）にボリス・ゲッセンら計7名を引率している⁽¹²⁾。

そして、1932年3月28日、科学アカデミー定例総会で「知識史委員会」を基盤に、レニングラードにソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所を設立することが決まり、ブハーリンは所長に任命された⁽¹³⁾。

しかし、ブハーリンは『イズヴェスチヤ』の編集など、モスクワにも多くの仕事を有しており、研究所の指導にそれほど精力を傾注することはできなかった。のち、この研究所が“反革命=トロツキスト組織”の“巣窟”として指弾されたとき、党中央委員会の担当課長であったカルル・バウマンは、ブハーリン自身はこの研究所をコントロールできていなかったと申し立てて、ブハーリンを弁護しようとした⁽¹⁴⁾。

副所長デボーリンは、1929年12月、“首領”スターリンを“思想家”、“哲学者”として賛美することを拒否したことを契機に、その“メンシェヴィキ化する観念論”（меньшевистствующий идеализм）を党中央から糾弾されるようになった。彼はカール・マルクス=フリードリヒ・エンゲルス研究所長をはじめさまざまな要職を追われた。1931年12月には“自己批判”を表明したとはいえ、全面的な復活はならず、科学史=技術史研究所の副所長というポストはブハーリンの所長職ともども、左遷ポストにほかならなかった⁽¹⁵⁾。そのデボーリンもいくつかの出版・編集事業に携わるため、モスクワを拠点としており、日常的に研究所を指導することはできなかった⁽¹⁶⁾。

研究所発足最初期にあって、この研究員の人選にあたり、その陣容を固めるのにもっとも功績があったのは、「知識史委員会」最後の学術書記にして、研究所初代学術書記のグコーフスキーであった⁽¹⁷⁾。エンジニアの家に生まれ、ペトログラード（レニングラード）大学歴史学部で学んだ彼は、科学アカデミー附属図書館勤務を経て、この研究所に招聘された⁽¹⁸⁾。彼は、ペトログラード大学の中世文化史の大家イヴァン・グレヴスの門下生として、師グレヴスの人脈などを頼りに、古典古代哲学史の傑出した研究者ソロモン・ルーリエをはじめ、おもに伝統的な文化史分野の研究者をこの研究所に集めた。こうした集団に、ガルベル、ヴァシーリエフをはじめとする活動家上りの黨員研究者が加わる⁽¹⁹⁾。

さて、この研究所の“研究員”であるが、最後の段階まで、契約にもとづいて研究所の業務に参画する兼職者が多く、正規の所員と非常勤所員との区別はあいまいであった⁽²⁰⁾。1928年に発動され、帝政ロシアで養成された専門家の大量排除をともなった「文化革命」⁽²¹⁾、同年10月、ドンバス地方で発生した“ブルジョア専門家”による“反革命サボタージュ事件”，いわゆる「シャフトイ事件」⁽²²⁾、その翌年にはじまる科学アカデミー系研究機関で研究活動をおこなっていた研究者の大量逮捕(いわゆる「アカデミー事件」)の直後⁽²³⁾であったことを考えると、研究所の、上述のような構成はたいへん興味深い。

研究所は6つのセクションから成っていた。技術史セクションは高名な電気工学者ヴラジーミル・ミトケーヴィチを長に、研究所全体の設置に先立って1932年1月に発足、1932年には計15回もの全体集会を開催している。化学史セクションはあまり活発ではなく、全体集会は2回の開催にとどまっている。物理学=数学史セクションは、傑出した物理学者で科学のオーガナイザーとしても優れた手腕を持ち、のち科学アカデミー総裁となるセルゲイ・ヴァヴィーロフを長に1932年5月に発足、全体集会は4回開催している。生物学史セクションは高名な生物学者・植生学者で、ソヴィエト政権と良好な関係を築いていたボリス・ケレルを長に、やや遅れて1932年11月に発足し、全体集会を4回開催している。農業史セクションはソ連を代表する植物学者・遺伝学者で、のちサラトフ監獄において非業の死を遂げるニコライ・ヴァヴィーロフ⁽²⁴⁾を長に1932年3月発足、全体集会は8回開催されている。科学アカデミー史セクションは高名な東洋学者で帝政末期からの科学アカデミー終身書記、二月革命時には一時臨時政府国民教育相を努めたセルゲイ・オリデンプルクを長に1932年5月に発足し、全体集会は4回開催した。ヴァヴィーロフ兄弟を除くと、各セクションの長はいずれも高名ではあるが、すでに第一線を退いた老科学者であり、たぶんに名誉職的な人事配置であった⁽²⁵⁾。そのため、たとえば、技術史セクションでは、プハーリンその人がイニシァティヴを執り⁽²⁶⁾、のちガルベルがセクションの活動を差配することになる。

博物館のために、ペトロフスク・ギャラリー、軍事技術博物館、ヴァチェスラフ・モロトフ名称コンビナート、通信手段博物館などからコレクションを移動し、博物館立地地点が決まるまでの間、エネルギー学研究所に場所を借りて一時保管してもらうことにした。国際技術史委員会とコンタクトを回復したほか、ソ

連国内におけるゲーテ没後100周年(3月30日)、ダーウィン没後50周年(4月27日)、マルクス没後50周年(1933年3月14日)の各記念行事に参画している⁽²⁷⁾。

『研究所彙報』(«Труды Института»)はおのおの独立した冊子体で刊行された。技術史セクションからは、アレクサンドル・チェルヌイシヨフ『高压送電の歴史に寄せて』、アレクサンドル・ラーツィク『蒸気タービンの歴史』、同『ヴィクトル・キルピチヨフの業績に関する科学史=技術史資料』など15冊が刊行されている。化学史セクションは3冊、農業史セクションは9冊で、物理学=数学史セクションはザハール・ツェイトリン『ファラデーの物理学的・哲学的見解』など3冊、生物学史セクションはケレル『植物学の歴史研究の方法に寄せて』など2冊、科学アカデミー史セクションは3冊を刊行した。記念学術会議についていえば、ファラデー電磁誘導法則発見100周年記念学術会議、メンデレーエフ没後25周年記念学術会議などに参画した⁽²⁸⁾。

3. 研究活動の展開

この研究所が刊行していた『科学史=技術史アーカイヴ』にはほぼ各巻に研究所活動の年次報告のような記事(クロニクル)が掲載されていた。それらからこの研究所の活動を年次別に見てみよう。

(1) 1933年

1933年、財政上の制約から、物理学=数学史セクション、生物学史セクション、化学史セクションの3セクションが科学史セクションひとつに統合され、研究所は公式には、技術史、科学史、農業史、科学アカデミー史の諸セクションに図書=文献室と博物館の6つの部門から構成されることになったが、実際には科学史セクションの研究者は従来どおり3つの分野に分かれて活動を展開している。技術史セクションでは、引き続き、傘下研究者による単著の出版が相次いだ。グコーフスキー『14~17世紀イタリアにおける金属加工工作機械』、ヤーコヴ・ローカフ『メリヤス紡績の第一歩』、『ロシアにおける農業機械製作の形成に関する問題に寄せて』、エフゲニー・ツェイトリン『ロシアにおける麻機械紡績のはじまり』、『アレクサンドロフスコエ・マニユファクチュアとロシアにおける産業革命』など14編が出版されている⁽²⁹⁾。このセクションはその一大事業として『技術史全史』全10巻の編纂をこの年あたりから本格化しているが、これについてはあと

で述べる。

ほかに所内で頻繁に講演会が催されている。死後その“マルクス主義的”言語理論をスターリンその人によって批判されることになるが、当時はたいへん影響力のあった東洋学者・言語学者ニコライ・マル⁽³⁰⁾による「技術用語への研究アプローチ」、ミトケーヴィチの「技術用語の意義」、高名な機械工学者ミハイル・シャテレーンの「電気機械用語の分野における国際的な活動」、同「アレクサンドル・ロディギンの生涯と創造」、ラーツィク「ディーゼル製造の歴史」などの演題で、計19回開催された。1933年後半になると、講演会開催は下火になり、『技術史全史』編纂にむけた討議がこのセクションの主要な活動となった。

科学史セクションの物理学史=数学史分野では、セルゲイ・ヴァヴィーロフが指導力を発揮し、レフ・ポラックら若手の活躍もめざましかった。ヴァヴィーロフ『オイラーの光学』、アレクセイ・クリロフ『レオンハルト・オイラー』、同『月の動きに関するオイラーの理論』、グコーフスキー『レオナルド・ダ・ヴィンチの力学』、ルーリエ『カヴァリエッリにおける極小の算出』、同『オイラーにおける極小の算出』、マルク・ヴィゴツキー『ガリレオとその宗教裁判プロセス』、同『ケプラーの数学』、ザハール・ツェイトリン『ガリレオと力学の発展』、ポラック『デカルトの力学』など15篇の成果が出版されている。また、ここでは、より自由な活動として、新進気鋭の物理学者(湯川中間子理論導出につながる核力の計算に取り組んだ)ドミートリー・イヴァネンコを招いて、「量子力学の発展」と題する講演会を開催するなど、全部で講演会を4回開催している⁽³¹⁾。

農業史セクションでは、ナターリヤ・フリットネル『古代エジプトの農業』など、5篇の労作が刊行されている。その他、畜産に関する著作が3篇出版され、研究所メンバー以外の講師による講演会が4回開催されている。科学アカデミー史については、4篇の研究成果が出版されたほか、外国の文献からの研究も進んだ⁽³²⁾。

このほか、研究所全体として、レオンハルト・オイラー記念学術集会、カスパー・ヴォルフ記念集会が開催されている。また、国際的な連携について見れば、この年、この研究所は、パリの国際科学史委員会、ロンドン科学博物館附属ニューコメン協会、設立されたばかりのヴィーン技術史研究所、ミュンヘン・ドイツ博物館とコンタクトを執ることに成功している⁽³³⁾。

ここで注目すべきは、この段階から、科学史=技術史のいわば“マルクス主義化”が強く意識されるようになったことである。グコーフスキーは、「ここでの基本

的な強調点は、オリジナルなテキストの独自の深い研究、ブルジョワ科学史が与えるまったく虚偽の理解を破壊し、予備的なものであれ、研究対象となる歴史的な時期の社会=経済的な諸現象と科学的な諸現象との間の関連を明らかにし、最終的には当該科学の基本的な法則的発展の発現にいたる目的をもつ研究に置かれている⁽³⁴⁾と述べ、科学史=技術史研究の“マルクス主義化”を方向性として掲げているが、ドミートリエフによれば、ここでの“マルクス主義化”は圧迫や強制を伴うものではなく、視野を広げるものとして広範な非マルクス主義的研究者にもむしろ歓迎されていた⁽³⁵⁾。

(2) 1934年

ここでもグコーフスキーは、「ブルジョワ技術史、および、とりわけ科学史は、モノグラフでも、共著でも、かなりの多数の研究に満ちているが、しかしこれらの研究のすべては、例外なく、第1に、まったく欠陥のある、満足できない分析、すなわち、あれこれの科学と技術の分野の、それらを実現させ、それらの社会的環境を規定する諸関連の外におかれた、いわば“自己展開”の分析[であるか、一引用者]、第2に、通常、ソヴィエトの読者にとってまったく受け入れがたい、多くの場合、テクノクラートのな、あるいは逆にテクノフォビオ的な立場から書かれているのである⁽³⁶⁾と述べているが、この時期、“ブルジョア技術史”、“ブルジョア科学史”を含む外国文献が次々と翻訳・刊行されていることに注目したい。ヘルマン・ディールスの『古代技術』はザハール・ツェイトリンが翻訳し、出版された。フェルディナント・ローゼンベルガーの『物理学史』全3巻が1933年から1936年にかけて、レオナルド・オルシュキの3巻本『近代言語による科学文献の歴史』(1933年)、ポール・タナリーの『ヨーロッパにおける自然科学発達の歴史の概要—1300～1900年—』(1934年)、フリードリヒ・ダンネマン『自然科学史』全3巻(1932～38年)などが続々と出版されている⁽³⁷⁾。

技術史セクションでは、グコーフスキー『15～16世紀イタリアにおける金属加工』、エフゲニー・ツェイトリン『麻紡績における産業革命』など15篇を刊行したほか、研究所外部のものによる3篇の出版を進め、18世紀の発明家イヴァン・クリビンの業績に捧げられた論稿3篇などを出版した。こうした刊行事業と並んで、『技術史全史』の本格的な編纂がはじまった。

物理学史=数学史の分野では、ゲアハルト・ハーリク『ジェローラモ・カルダー

『ノの力学』など7篇を刊行するほか、国立技術=理論出版社による『ニュートン著作集』編集(セルゲイ・ヴァヴィーロフが責任者)に協力した。ほかに重要な仕事として、ハーリクの論文「ジェームズ・クラーク・マクダウェル」、同「レーニンと物理学」など4篇を挙げなければならない。生物学史ではエルンスト・ヘッケル生誕100周年を記念して、著名な植物学者で、ソ連邦科学アカデミー副総裁(1936~45年には総裁)であったヴラジーミル・コマロフの「ヘッケルと進化理論」など4篇が出版されたが、うち1篇は英語でハーマン・マラーが書いたもので、「ヘッケルと遺伝学」と題するものであった⁽³⁸⁾。

(3) 1935年

その前年までの年次報告のスタイルと違い、個々の研究者の業績は掲げられていない。研究所全体として、1935年中には、『科学史=技術史アーカイヴ』の第2巻、第3巻、第4巻が刊行された。また、『レオンハルト・オイラー記念論文=資料集』、ルーリエ『古代原子論者における極小の理論』、スタニスラフ・ストルミーリン『ロシアとソ連邦における鉄鋼業』、『原典で見る電動機の歴史』、ディールス『古代技術』、I. スモルゴンスキー『造船用語』を出版した⁽³⁹⁾。

ここで特筆されているのが、技術史の方法論に関するセミナーの役割である。グコーフスキーは、「……セミナーは研究員の関心を大いに惹き、セクションの全仕事の方法論的水準を少なからず高め、さらに、技術の理論に関する特別な研究テーマ、何よりマルクス主義の技術理論に関するテーマに向かわせた⁽⁴⁰⁾と評価しているが、その導き手となったものとしてガルベルの「2篇の論文」(題名の明示はない)を挙げていた。これについては後述しよう。

4. 技術史分野の活動

(1) “物質文化史”か“技術史”か?

『科学史=技術史アーカイヴ』第2巻には研究所クロニクルはないが、当時活発だった“物質文化史”グループとの交流について述べられていて興味深い。

当時、レニングラードでは「国立物質文化史アカデミー(Государственная академия истории материальной культуры: ГАИМК)^{ガイムク}」を名乗る研究者集団が活発に活動していた。この「アカデミー」は、もともと考古学分野の研究機関であったため、非文字人工遺物の研究に精通しており、非文字人工遺物の視点から、原始から現代

までの人類の歩みにアプローチしようとする壮大な構想をもっていた⁽⁴¹⁾。

グコーフスキーは「技術史は社会的人間の生産器官の形成史を研究し、そうして人間の自然に対する積極的な態度を明らかにする」⁽⁴²⁾と言う。そのような技術史は、“物質文化史”を代表することができるのであろうか。あるいは逆に技術史は“物質文化史”に解消できるものなのであろうか。

ともかくも両者の研究対象の近似性(ただし、古代史にはほぼ限られているが)から、科学史=技術史研究所と「国立物質文化史アカデミー」の“協働”が話題にのぼった。1933年5月22日に研究所とこのアカデミーは、デボーリンを議長とする合同の委員会を立ち上げ、共同の事業について協議している⁽⁴³⁾。しかし、“物質文化史”の潮流はさしたる展開、成果を見せることなく、やがて、もとの考古学に落ち着いていった。この点については、本書第4章で詳述する。

(2)『技術史全史』全10巻編纂事業

ブハーリンが「知識史委員会」を研究所に改組するにあたって打ち出した5つの方向性のうち、「従来、委員会の活動のなかにまったく位置づけられなかった技術史の枠組みと方法論に関する計画的研究」⁽⁴⁴⁾は研究所発足当初からの相対的重点であった。そのため、彼は研究所、および周囲の研究者の総力を結集した『技術史全史』全10巻(«Всеобщая история техники» в 10 тт. 原語のいささか仰々しいニュアンスを失わないよう、『技術史全史』と訳した)編纂事業を提起する。

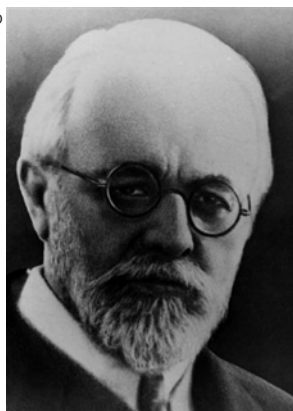


図5 アレクサンドル・ラーツィク

では、この当時のソ連(帝政ロシア末期も含め)にはどのような技術史が叙述されていたのであろうか。ラーツィクは、スイスからロシアに移住した商人の祖父を持ち、その父はモスクワ大学を卒業し、カールスルーエに留学した当時第一級の鉄道技師で、本人もサンクト=ペテルブルクの総合技術専門学校を出たのち、ベルリン大学などに留学し、ペテルブルク(ペトログラード)大学の教授を努める高名な熱機関工学者であり、典型的な“旧専門家”, ないし“ブルジョア専門家”である。技術史にも強い関心を持ち、生涯数冊の書物を著すが、その

『ジェームズ・ワットと蒸気機関の発明』⁽⁴⁵⁾(1924年)は代表作のひとつである。この著書は人気を集めたようであるが、ワットの天才ぶりを強調する、いわゆる“天才史観”が目立つ。

研究所発足早々、所長プハーリンはこうした“天才史観”のほか、さまざまな技術史観が混在している状況に不満を表明する。1932年5月11日の所内「技術史編纂委員会」の会合で、プハーリンは「資本主義に関する諸章の計画のいくつかは、いくぶんか違った、技術が生産からではなく、科学の逆方向の影響から発達するといった見方に立っている。……ルィニンの論文は、……一方では、宗教はじめ、まったくさまざまな異種の、一元化されていない原因を擁護して、……、他方では気球飛行への階級闘争の影響を異様なほど単純化して提起している。ラーツィク教授、その他は、水平的な切り口か、垂直的な切り口かが何よりもわれわれを悩ましている、と問題を提起している。[が]……純粋な技術、および純粋に技術的なものの内在的論理を明らかにしようとする偏向は垂直な形の遊牧民の仮小屋の歴史を与えるだろう。歴史家は水平的な切り口にこだわってきた」⁽⁴⁶⁾と述べ、首尾一貫した“水平的な切り口”による技術観、すなわち、社会発展と技術進歩を関連付けるマルクス主義的技術観にもとづく歴史の集大成の必要を強調する。

しかしながら、『技術史全史』全10巻編纂のために編成された“執筆者部隊”はラーツィクそのひとやセルゲイ・オリデンブルクなど、非マルクス主義的な旧専門家を含んでいた。彼らはほぼ月に2回というペースで頻繁に会合をもち『技術史全史』の構想を練り上げていった⁽⁴⁷⁾。1933年の段階で、早くも、第1~4巻までの構想を固めている。それによると、第1巻は序と階級以前の社会を扱い、プハーリン(序)と高名な歴史家=考古学者ボリス・ボガエフスキーを中心に人類学=民俗学研究所の研究員などが執筆を担当し、第2巻は古代東方と古典古代を扱い、ルーリエや国立エルミタージュの学芸員3名などが執筆を請け負った。第3巻は西ヨーロッパとロシアにおける封建時代を対象に、モスクワでは高名な農業史の専門家エフゲニー・コスミンスキーが、レニングラードでは文化史家のパーヴェル・シチョーゴレフが“執筆者部隊”を率い、第4巻は東方における封建時代を対象に国立エルミタージュの学芸員などが執筆にあたることになっていた。この段階ですでに最初の2巻分の仕事は完了しており、つづく2巻の作業は進行中であった⁽⁴⁸⁾。個々の執筆者のポリシェヴィキ政権への態度はともかく、

ボガエフスキーやコスミンスキーなどは帝政期に養成された“旧専門家”であり、『技術史全史』のこうした“執筆者部隊”の編成は興味深い。

雑多な技術観、技術史の方法が混在するなかで、新しい技術史の方法論を提起したのは、ガルベルであった。

1934年2月11日、研究所会合における「ガルベル教授の報告」⁽⁴⁹⁾、それにはじまる一連のセミナーを通じてマルクス主義技術史の方法が示された。また、1935年の『科学史=技術史アーカイヴ』第5巻には彼の論文「マルクスにおけるMaschinerieの問題」⁽⁵⁰⁾が掲載された。

1935年4月15日の技術史セッションの会議で、ガルベルはマルクスの、いわゆる「機械論草稿」を紹介し、このコピーをブハーリンから手渡されたと言言している⁽⁵¹⁾が、ガルベルの、この論文はさらに精緻に技術史のマルクス主義にもとづく哲学的解釈を述べたものであった。グコーフスキーがこれらガルベルの業績をマルクス主義的技術史が切り開かれるうえで、画期となる業績と評価していたことは、すでに述べた。

5. 終焉

1936～37年にかけてピークを迎えた「粛清」の嵐（「大テロル」）は、まちがいなくスターリンその人、およびその周辺の権力者が発動したものであるが、急速に彼らのそもそもの思惑を超え、社会全体の巨大な混乱、あるいはマス・ヒステリアの様相を帯び、暴走していった⁽⁵²⁾。

この「大テロル」の波は、1936年4月、所長ブハーリンがフランスに出張しているタイミングでこの研究所にも押し寄せてきた。ガルベル、ヴァシーリエフ、ヤーコヴ・ウラノフスキーが逮捕された。ブハーリンは、高名な電気工学者、「レーニンの戦友」で、当時科学アカデミー副総裁であったグレブ・クルジジャンフスキーと終身書記ニコライ・ゴルブノーフに問い合わせと抗議の書簡を送るが、ゴルブノーフは研究所を“反革命=トロツキスト組織”の“巣窟」とする断定を繰り返すのみであった⁽⁵³⁾。ゴルブノーフはレニングラードに駆けつけ、5月23日に研究所の所員たちを集め、研究所の閉鎖を宣告するが、翌日にはその方針を撤回、研究所のモスクワへの移転を命じる⁽⁵⁴⁾。

モスクワ移転は「以前の集団の完全な廃止を意味した」⁽⁵⁵⁾。1936年9月19日付の党機関紙『プラウダ』に、この研究所の定期刊行物、『科学史=技術史アーカイ

ヴ』について、「統一された目的も計画もなく、多くが非実践的で、必然性がない、似非科学的な論文で、マルクス主義・レーニン主義の精神での問題提起や解決を無視し、科学史、技術史の戦線におけるファシズムとの闘争をぼかすか、まったく無視しており、理論的な過ちがいっぱいある」との批判が掲載された⁽⁵⁶⁾。規模は大幅に縮小され、すでに決まっていた計画は過大なものとされ、再検討に附された⁽⁵⁷⁾。研究所は『技術史全史』全10巻編纂事業をはじめとする事業計画の大幅縮減を決め、研究所が属していた科学アカデミー・社会科学部の1937年2月1日の部会も、従来の計画を“誇大で非現実的な研究計画からなる”ものとして斥け、大幅に縮減された新しい計画を認めた⁽⁵⁸⁾。

技術史についてみれば、この研究所とは別のもうひとつの技術史のグループが生まれていた。このグループについてはすでに論じたが、ここでも必要なかぎり言及しておこう。

ブハーリンを政治局から解任した1929年11月の党中央委員会総会は、同時に高等工業教育機関への“マルクス主義的技術史”の導入を決議していた⁽⁵⁹⁾。「シャフトイ事件」以降、党は“ブルジョア専門家”への警戒をさらに強め、自前の“ソヴィエト的な”技術者の養成を急務と考えたのである。「文化革命」が進行している時期でもあり、高等教育にも“突撃隊方式”⁽⁶⁰⁾が適用されようとしていた時期でもあった。ややのち、クルジジャンフスキーが議長を務めていた人民委員会議附属高等技術教育委員会に「マルクス主義的技術史委員会」が附置され⁽⁶¹⁾、クルジジャンフスキーが「わたしの代理(мой заместитель)」⁽⁶²⁾と呼んだアナトーリー・ズヴォルィキンが急速に台頭してくる。彼らは、高等技術教育委員会とともに両属関係にあった共産主義アカデミー(共産主義アカデミーでは、彼らは「幹部会附属技術史セクション」を名乗ったが、メンバーはほぼ同一である)の閉鎖=科学アカデミーへの吸収を機に、ズヴォルィキンを長として科学史=技術史研究所「モスクワ技術史部」を名乗り⁽⁶³⁾、研究所のモスクワ移転を俟って、技術史分野におけるその奪権を完了している。

ガルベルは、1936年4月30日、内務人民委員部レニングラード州管理部により逮捕。同年12月23日、最高裁判所軍事参事会で禁固10年(公民権剥奪5年、および財産没収)の判決を受けたが、1937年10月10日付内務人民委員部レニングラード州管理部“特別三役”の決定により、裁判を経ずに「刑罰の高度な措置(Высшая мера наказания: ВМН)」となり、11月4日に銃殺が執行された⁽⁶⁴⁾。ヴァ

シーリエフも同じ日に銃殺されている⁽⁶⁵⁾。

グコーフスキーは「かなりの程度、疑わしい人物で、非ソヴィエト的な気分の持ち主」とされていた⁽⁶⁶⁾が、伯父が財政人民委員を努めた革命家イシドール・グコーフスキーであったことも幸いして、逮捕や糾弾を免れ、戦後も国立エルミターージュの上級学芸員やレニングラード国立大学教授として活躍し、天寿を全うしている⁽⁶⁷⁾。

1936年9月にはブハーリン本人が訴追されることとなり、1937年2月27日に逮捕、1938年3月15日銃殺された⁽⁶⁸⁾。第2代所長となった経済学者、経済分野の政府高官にして科学アカデミー会員のヴァレンチン・オシンスキー（本姓はオボレンスキー）も逮捕され、1938年に殺害されている⁽⁶⁹⁾。両所長逮捕後の1938年1月20日、ミトケーヴィチ、ヴェルナツキーなども列席して「科学史=技術史研究所に関する会合」が開催され、次の所長の人選について協議されたものの、だれも引き受け手が現れず、研究所は閉鎖のやむなきに至り、3月5日付科学アカデミー幹部会布告をもって正式に閉鎖された⁽⁷⁰⁾。

物理学史の分野で健筆を振るった亡命ドイツ人物理学者ハーリクは1934年3月以来働いていたこの研究所から1936年6月7日付で解雇された。彼は研究所員の眼から見た研究所移転=閉鎖の混乱ぶりを次のように証言している。解雇の時点で受けた説明から、7月1日には研究所の再編が完了し、新しい職をモスクワに移った研究所でえられることを期待していたが、7月が過ぎても、さらに研究所指導部に向けあっても埒があかない。彼はグコーフスキーを頼って、再雇用を働きかけてもらってもいるが、首尾よくはゆかない。レニングラード時代にすでに完了した出来高払いの仕事に対する未払い分の支払いを粘り強く請求し、ようやく1,300ルーブリを手にしただけであった⁽⁷¹⁾。

6. 科学史=技術史研究所が残したもの

過酷なソ連の政治史の渦中であって、本章の検討対象となったソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所はわずか6年間、実質4年と3か月ほどでその姿を消した。本章では、この研究所の設立の経緯、事業計画とその進展、そして不幸なその終焉の過程を辿ってみた。しかし、この4年数カ月でこの研究所とその研究者たちはじつに実り多い研究活動を展開した。個々のページ数はともかく、単著を100冊は刊行しているであろうし、分厚い定期刊行物『科学史=技術史アー

カイヴ』は計9冊刊行されている⁽⁷²⁾。

ここで簡単に研究所がもっていた方向性を外形的にだけでも特徴付けておこう。この研究所最大の事業計画は、なにより、『技術史全史』全10巻の編纂事業であった。所長ブハーリン、技術史分野の実質的なリーダーであったガルベルらは、非マルクス主義に立つ先行研究、旧専門家、“ブルジョア専門家”をも尊重し、それらとの協働により包括的な出版事業をめざしていた。そのため、会議を重ね、粘り強く合意を形成しようとしていた。ここでは、マルクス主義の側からする批判は(しばしばソ連史に見られるような)“打倒”を意味しなかった。1933年3月20日、研究所で開かれた、オリデンブルクを議長とする技術史委員会の会議において、この研究所で研究者として養成されたローカフは「わたしは本日の会議の主要な意義は、ここでわたしたちが何か共通のことばを作り上げたことにあります⁽⁷³⁾」と述べたことはたいへん印象的である。

では、この研究所において、“マルクス主義的”とはどのようなものを想定していたのであろうか。科学史の分野については統一した視角にもとづく方法論上の道標は特定できないが、技術史については、幸い、マルクス主義技術論の道標となったとされるガルベルの講演録・論稿は今日でも参照が可能である。これらの検討は次章の課題としたい。

注

- (1) *О.Д. Симоненко*. «История техники и технических наук: Философско-методологический анализ эволюции дисциплины». Москва: Институт истории естествознания и техники РАН, 2005. С. 23; (O. Д. シモネンコ/市川浩訳『技術史と工学史—学術発展の哲学的・方法論的分析—』, ロシア科学アカデミー・エス・イー・ヴァヴィーローフ名称自然科学史=技術史研究所, 2005年, から「まえがき」と第1章「技術史の歴史」, 日本科学史学会『技術史』第8号, 2011年, 36頁(ただし, 表現を一部変えている)。
- (2) 1930年代, 日本でマルクス主義技術論の形成・発展に圧倒的な影響力をもっていた「唯物論研究会」の機関誌『唯物論研究』にはソ連における技術史・技術論の紹介はほとんど見られない。1935年2月刊行の『唯物論研究』第28号掲載の戸坂・岡・岸「技術に関する文献」—横組1~16頁—では, 政治文献・マルクス主義の解説を除くと, その「B. 技術の歴史」にヴォルコフのものが挙げられている(横組9頁)くらいである。この点は序章でも確認している。
- (3) ここでのヴァシーリエフにたいする評価はアレクサンドル・ドミートリエフ

によっている (A. H. Дмитриев. “Институт истории науки и техники в 1932-1936 гг.” «Вопросы истории естествознания и техники». 2002. No. 1. С. 21)。ヴァシーリエフは、科学史=技術史研究所が発行していた学術誌『科学史=技術史アーカイヴ』(«Архив истории науки и техники»)誌に「エミール・マイエルソンの科学理論」(Вып. V. С. 57-100), 「原則的被観測性原理の問題に寄せて」(Вып. VI. С. 1-32), 「カントにおける物質の理論と古典力学の根拠」(Вып. VII. С. 1-66), 「科学理論発展の若干の特徴—エンゲルス没後40周年に寄せて—」(Вып. VIII. С. 1-28)を發表している。しかしながら、この時期のソ連における新しい物理学とマルクス主義哲学との複雑で、緊張に満ちた交差を扱った金山浩司の労作『神なき国の科学思想—ソヴィエト連邦における物理学哲学論争—』(東海大学出版部, 2018年)にも彼の名前は登場しない(同書233頁の注12に登場するヴァシーリエフなる人物は別人である。ただし、この研究所の研究者であったザハール・ツェイトリンは同書に頻出している—114, 115頁など—)。なお、ツェイトリンについて、ドミートリエフは機械論的傾向と新しい物理学への反感を指摘している(Дмитриев. Указ. статья в примечании 3, С. 18)。

- (4) Дмитриев. Указ. статья в примечании 3, С. 3-36.
- (5) Ю. И. Кривоносов. “Институт истории естествознания и техники: тридцатые—громовые, роковые.” «Вопросы истории естествознания и техники». 2002. No. 1. С. 42-75.
- (6) シモネンコ, 前掲邦訳(注1参照), 35, 36頁.
- (7) コンスタンチン・アレクサンドロヴィチ・トミーリン/金山浩司訳「第三部第三章 セルゲイ・ヴァヴィーロフと1930年代ソ連科学アカデミーの組織的転換」, 市川浩編『科学の参謀本部—ロシア/ソ連邦科学アカデミーに関する国際共同研究—』北海道大学出版会, 2016年, 193~195頁.
- (8) 後年の「大テロル」期と違い、この時期、スターリンの政敵打倒はそれなりにプロセスを踏んでいた。“右翼反対派”ブハーリンはまず1929年4月の党中央委員会・中央統制委員会合同総会, 第16回党協議会において、政治局内には留まったものの、責任ある部署(詳細不明)から解任され、つづいて11月の中央委員会総会で政治局から解任された(ソ連邦共産党史翻訳委員会訳『ソ連邦共産党史 2』大月書店, 1972年, 609, 610頁)。
- (9) Архив Российской Академии наук (далее-РАН), “Историческая справка” к Фонду No. 154.” (Институт истории науки и техники Академии наук СССР). С. 2.
- (10) Там же.
- (11) М. А. Гужовский. “Хроника: Институт истории науки и техники Академии наук (на 1 января 1933 г.).” «Архив истории науки и техники». Вып. I, С. 226, 227.
- (12) 広く知られていることであるが、第2回科学史国際会議(ロンドン)におけるソ連からの参加者たちの発表はさまざまな国からの参加者に衝撃を与えた。彼

- らの発表は英語で出版され(Nikolai Bukharin ed., *Science at the Crossroads: Papers from The Second International Congress of the History of Science and Technology*. 1931), 日本語にも翻訳された(唯物論研究会訳編『岐路に立つ自然科学』大畑書店, 1934年)。とりわけ, ボリス・ゲッセンによる報告「ニュートン『プリンシピア』の社会的経済的根源」(B. Hessen, “The Social and Economic Roots of Newton's «Pricipia»”)はマルクス主義の科学史, あるいはより広く“エクスターナルな”科学史のもっとも重要な古典となっている(これには新しい邦訳がある。ペー・エム・ゲッセン/秋間実他訳『ニュートン力学の形成—「プリンシピア」の社会的経済的根源—』法政大学出版局, 1986年)。
- (13) *М. А. Гуковский*. Указ. в примечании 11, С. 227.
- (14) *Кривоносов*. Указ. статья в примечании 5, С. 59.
- (15) *С. Н. Корсаков*. “Краткий очерк научной, научно-организационной и общественно-политической деятельности.” Российская Академия наук. «Абрам Моисеевич Деборин: Библиография ученых, Философия вып. 6» (составитель – С. Н. Корсаков). Москва: Наука, 2013. С. 22-25: セルゲイ・コルサコフ・市川浩訳「“メンショヴィキ化する観念論”——アブラム・デボーリン」, 金山浩司編『ソヴィエト科学の裏庭——イデオロギーをめぐる葛藤と共存』水声社, 2023年, 83~120頁。
- (16) *Кривоносов*. Указ. статья в примечании 5, С. 52.
- (17) *Дмитриев*. Указ. статья в примечании 3, С. 6, 7.
- (18) АРАН, Фонд (далее–Ф.) 154, Опись (далее–Оп.) 2, Дело (далее–Д.) 14, л. 1.
- (19) *Дмитриев*. Указ. статья в примечании 3, С. 5.
- (20) *Кривоносов*. Указ. статья в примечании 5, С. 56.
- (21) 哲学, および生物学の分野をおもな対象とするものではあるが, 藤岡毅の『ルイセンコ主義はなぜ出現したか—生物学の弁証法化の成果と課題—』(学術出版会, 2010年)はその80~150頁で「文化革命」の経緯, その影響と破綻を活写している。
- (22) 「シャフトイ事件」とその政治的文脈については, 中嶋毅の研究がある(中嶋毅『テクノクラートと革命権力—ソヴィエト技術政策史 1917~1929—』岩波書店, 1999年)。
- (23) *Дмитриев*. Указ. статья в примечании 3, С. 8.
- (24) ニコライ・ヴァヴィーロフの研究上の業績, ルイセンコ主義との格闘の帰趨については, さしあたり, 藤岡, 前掲書(注21参照)の46, 47, 130, 162, 163, 168, 169, 182頁など参照。
- (25) *Гуковский*. Указ. в примечании 11, С. 228: なお, “旧専門家”ながら, 電化事業を通じてソヴィエト政権と良好な関係を築いたミトケーヴィチは, 20世紀の新しい物理学の潮流に反対してさかんに発言した(さしあたり, 金山, 前掲書, 102~104頁参照)。また, ケレルは機械論的偏向をもつラマルキストとして, 遺

伝学に反対した(藤岡, 前掲書(注21), 168頁)。

- (26) Там же, С. 231.
- (27) Там же, С. 228.
- (28) Там же, С. 229.
- (29) М. А. Гукковский. “Хроника: Институт истории науки и техники Академии наук в 1933 г.” «Архив истории науки и техники». Вып. III, С. 337, 338.
- (30) 「言語は上部構造」と規定し、西欧言語学=印欧祖語派を激しく批判したマルは、その死後、スターリン自身が執筆し、党機関紙『プラウダ』紙上に発表された論文「言語学におけるマルクス主義について」(И. В. Сталин. “Относительно марксизма в языкознании.” «Правда». 20 июня 1950)で、その“ドグマティズム”が激しく批判された。この、いわゆる「言語学論争」は、スターリンその人が大論文を執筆して介入したという点で異色のものであった。ルネ・ザパタは、言語学論争へのスターリンの介入を、スターリン、およびその政権のサイバネティクスや情報科学を擁護する姿勢に求めている(ルネ・ザパタ/原田彦彦訳『ロシア・ソヴィエト哲学史』白水社、1997年、136頁。一フランス語原書は1988年出版—)が、この解釈には無理がある。スターリン生前には「サイバネティクス」や「情報科学」が政権指導部に知られることはほぼなかった。「サイバネティクス」普及は、言語学論争のあと、脱スターリン化期に社会の合理的改革をめざす科学者たちによって(下から)の社会運動として展開され、やがて政権要路の支持をえて、党・国家の政策に取り入れられていった。権力による「サイバネティクス」受容は、今度は逆に科学者たちの失望を招き、彼らの心は体制から離れていった。この過程については、スラーヴァ・ゲローヴィッチの名著(Slava Gerovitch, *From Newspeak to Cyberspeak: A History of Soviet Cybernetics*. The MIT Press, 2002: スラーヴァ・ゲローヴィッチ/大黒岳彦訳・金山浩司校閲+解説『ニュースピークからサイバースピークへ—ソ連における科学・政治・言語—』名古屋大学出版会、2023年)に詳しい。さらに、「言語学論争」へのスターリンの介入について述べれば、ジョージア人言語学者アルノリト・チコバーヴァという“黒子”の果たした役割を看過することはできないものの、スターリン自身が哲学問題では相当の主体性を持ち、いわゆる“ゴースト・ライター”も、特定の“助言者”や“顧問”もたず、原稿をみずから草稿から練り上げていたことは今日広く知られている。帝政ロシアに奪われた高等教育就学機会へのルサンチマン、みずから後継を自負した“先達”レーニンが放つ輝かしい“知の権威”にたいする強烈なコンプレックス、こうしたものがスターリンをみずからに替わりうる“知の権威”狩りに追い込んでゆく。ポロックの労作(Ethan Pollock, *Stalin and the Soviet Science Wars*. Princeton University Press, 2006)は後期スターリン期における彼の“知の権威”追求を描いていて、興味深い。
- (31) Гукковский. Указ. в примечании 29 (Вып. III), С. 339, 340.

- (32) Там же, С. 340, 341.
- (33) Там же, С. 342.
- (34) Там же, С. 2339, 340.
- (35) *Дмитриев*. Указ. статья в примечании 3, С. 17.
- (36) *М. А. Гуковский*. “Хроника: Институт истории науки и техники Академии наук в 1934 г.” «Архив истории науки и техники». Вып. V. С. 611.
- (37) *Дмитриев*. Указ. статья в примечании 3, С. 13.
- (38) マラーは、シヨウジヨウバエにエックス線を照射して突然変異をおこさせる実験で、遺伝子の可変性と放射線の遺伝への影響を証明した研究で有名(1946年、ノーベル生理学・医学賞で受賞)である。彼は共産主義に共鳴していたこともあって、1933年にソ連に移り遺伝学研究を行っていた。しかし、ルイセンコ主義の台頭と遺伝学者への迫害の前にソ連に失望し、1937年にソ連を去った(藤岡, 前掲書(注21参照), 74頁)。
- (39) *М. А. Гуковский*. “Хроника: Институт истории науки и техники Академии наук СССР в 1935 г.” «Архив истории науки и техники». Вып. VIII. С. 477.
- (40) Там же, С. 474.
- (41) Институт истории материальной культуры Российской Академии наук のホーム・ページ (<https://www.archeo.ru> 2019年11月28日閲覧)。
- (42) *М. А. Гуковский*. “Хроника: История техники в научных учреждениях Ленинграда.” «Архив истории науки и техники». Вып. II, С. 337.
- (43) *Дмитриев*. Указ. статья в примечании 3, С. 14.
- (44) *М. А. Гуковский*. Указ. в примечании 11, С. 226, 227.
- (45) *А. А. Радциг*. «Джемс Уатт и изобретение паровой машины». Пг. НХТИ, 1924, 106 сс.
- (46) АРАН, Ф. 154, Оп. 4, Д. 2, лл. 6, 7. なお, “垂直的な切り口”, “水平的な切り口”が意味するものは, 前後の文脈から, 前者が技術に内在する発展方向を謂うのに対して, 後者が社会などの技術そのものにとって外在的な要因との関係に根拠づけられた発展方向を指していると考えられる。ここで, ブハーリンは, 技術そのものの内在的な論理から導き出される技術進歩は, “遊牧民の仮小屋”の発展史程度の, ごく些細なことであろうとして, その意義を否定的に評価し, “水平的な切り口”, すなわち社会と技術の相互作用を重視する見方の重要性を示しているのである。なお, ニコライ・ルイニンは航空分野の専門家であるが, 宇宙旅行に関するポピュラーな読物の作者でもあり, 当時人気を博していた (<https://ru.wikipedia.org/wiki/Рынин, НиколайАлексеевич> 2024年3月6日閲覧)。
- (47) АРАН, Ф. 154, Оп. 4, Д. 2, лл. 96-139.
- (48) *Гуковский*. Указ. в примечании 29 (Вып. III), С. 338.
- (49) АРАН, Ф. 154, Оп. 4, Д. 27, лл. 1-26. なお, ガルベルは1934年3月からこの研究

所と並行してレニングラード工業専門学校 (Ленинградский индустриальный институт) に哲学担当の教授として勤務している (АРАН, Ф. 411, Оп. 6, Д. 621, лл. 3, 7)。

- (50) *Х. И. Гарбер*. “Проблема Maschinerie у Маркса.” «Архив истории науки и техники». Вып. V. С. 1-56.
- (51) АРАН, Ф. 154, Оп. 1, Д. 1, л. 60.
- (52) 現代の歴史研究の到達点に立てば、「大テロル」の要因はいささかも単純化を赦さない。ウェンディ・ゴールドマンは「一部の歴史家はテロルを、国家が厳重に統制し、個別のカテゴリの犠牲者を対象とした『切除の暴力』の一形態と概念化する。しかし、テロルをより混乱させ、制御不能の事態としたのは、大衆参加や非難、権威への攻撃であった」と述べている (ウェンディ・ゴールドマン・立石洋子訳『5 テロルと民主主義』, 松井康浩・中嶋毅編『ロシア革命とソ連の世紀 2 スターリニズムという文明』岩波書店, 2017年, 163頁)。あたかもわが国の「普通選挙法」と「治安維持法」が“抱き合わせ”であったように、元貴族、白軍、元富農にも平等に投票権を与え、直接・秘密投票を約束した、“民主的な”1936年の「スターリン憲法」の本格施行を前に、スターリン権力は農業集団化、社会主義工業化の強行のなかで蓄積された一般住民の不満に対して“屈折した”捌け口を準備しなければならなかった。しかし、一般民衆の不満はあまりに大きく、権力の側でも制御不能になってゆく (同書147~174頁)。他方、権力への民衆の手紙を緒にソヴィエト国家の本質に迫ろうとしたアレクサンドル・リフシン、イーゴリ・オルロフらは、国際環境の悪化がもたらす住民の心理の変化にも着目する (*А. Я. Лившин, И. Б. Орлов и О. В. Хлевнюк*. «Письма во власть. 1928-1939. Заявления, жалобы, доносы, письма в государственные структуры и советским вождям». М.: РОССПЭН, 2002)。ナチス=ドイツの軍備大拡張と東方への衝動 (1936年にはラインラントに進駐)、帝国日本の中国大陸進出 (蘆溝橋事件は1937年) が進み、日独「防共協定」が締結され (1936年)、スペイン内戦において左派が敗北した (1937年)。こうしたソ連を取り巻く国際環境の悪化を背景とするゼノフォビアの拡大と、それにソ連国家の複雑な多民族性が絡み合い、住民のなかに相互に対する疑心暗鬼が高まり、一種のマス・ヒステリア状態が醸成されたと考えられる。もはや古典に属するジュゼッペ・ボッファの『ソ連邦史』もこうした“外圧”の影響を重視している (*G. ボッファ/坂井信義・大久保昭男訳『ソ連邦史 2—1927~1941—』*大月書店, 1980年, 175~194頁)。また、1937年に内務人民委員に就任したニコライ・エジョフを典型とする、内務官僚らのスターリンへの忠誠心に発する過度の付度、さらに広い範囲における、上位のものの排除をみずからの出世の機会ととらえる傾向が被害を極大化したとも言えよう (ゴールドマン, 前掲, 151~153, 167~169頁)。
- (53) *Кривонос*. Указ. статья в примечании 5, С. 56.

- (54) Там же, С. 59: ゴルブノーフのこのような無思慮, 短絡, 粗暴が科学者の反感を呼び、彼自身の墓穴を掘る結果となっていったとも考えられる(金山浩司「第三部第4章 大テロルはソ連邦科学アカデミーをどう変えたか—常任書記の解任を手がかりに」, 市川編, 前掲書(注7参照), 199~214頁)。ゴルブノーフは1938年2月19日に逮捕され, 9月7日に銃殺されている(同, 208頁)。
- (55) АРАН, “Историческая справка” к Фонду, 154, С. 4.
- (56) АРАН, Ф. 154, Оп. 4, Д. 55, л. 9.
- (57) АРАН, Ф. 154, Оп. 4, Д. 52, л. 7.
- (58) АРАН, Ф. 154, Оп. 4, Д. 55, лл. 1, 2.
- (59) АРАН, Ф. 154, Оп. 1, Д. 21, л. 25.
- (60) 1929年11月, 全連邦共産党(ボ)中央委員会は、「文化革命」の一環として, 大学から数学といくつかの自然科学の分科を除いた他の学部を切り離し, 独立の高等専門学校に切り替える方針を採択した。社会主義建設に必要な専門家速成の方法として導入された“突撃隊方式”が, 勤労者学部から大学院にいたるまで, すべての大学教育の段階で学習時間を減らし, アカデミック・スタンダードの引き下げと卒業生の質の低下をもたらしていた。このため, ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国教育人民委員部は, 人民委員アンドレイ・ブーブノフのもと, 早くも1931年7月には是正に乗り出す(Народный комиссариат просвещения РСФСР. «Государственные университеты». Москва, Огиз-изогиз. 1934. С. 18; 市川浩「第V部第1章 科学アカデミーの戦時疎開—格差と確執」, 市川編, 前掲書(注7参照) 359, 360頁参照)。
- (61) АРАН, Ф. 154, Оп. 1, Д. 34, л. 8.
- (62) АРАН, Ф. 154, Оп. 4, Д. 21, л. 121.
- (63) АРАН, Ф. 154, Оп. 1, Д. 99, л. 11.
- (64) [https://ru.openlist.wiki/Гарбер_Хаим_Иосифович_\(1903\)](https://ru.openlist.wiki/Гарбер_Хаим_Иосифович_(1903)) 2019年11月28日閲覧。ガルベルの党员としての調書はロシア国立社会=政治史文書館(ヨシカル=オラ保管庫)に保管されている(Российский государственный архив социально-политической истории—РГАСПИ—), Ф. 17, Оп. 100, Дело 133559)。
- (65) [https://ru.openlist.wiki/Васильев_Сергей_Федорович_\(1898\)](https://ru.openlist.wiki/Васильев_Сергей_Федорович_(1898)) 2019年11月28日閲覧。
- (66) *Кривоносов*. Указ. статья в примечании 5, С. 56.
- (67) https://ru.wikipedia.org/wiki/Гуковский,_Матвей_Александрович 2019年11月28日閲覧。
- (68) https://ru.wikipedia.org/wiki/Бухарин,_Николай_Иванович 2019年11月28日閲覧。
- (69) *Кривоносов*. Указ. статья в примечании 5, С. 64. なお, オシンスキーの逮捕は1937年10月14日, 銃殺は翌年の9月1日であった(<https://naukaprava.ru/catalog/435/1381/4257> 2019年11月28日閲覧)。

- (70) Там же, С. 65, 66.
- (71) 彼の1937年2月9日付, ゴルブノーフ宛上申書が残されている (АРАН, Ф. 411, Оп. 6, Д. 621, лл. 17, 18)。
- (72) «Архив истории науки и техники». Вып. I-IX は回収・廃棄の措置がとられたため, 目にすることはそれほど容易ではない。全巻はロシア国立図書館 (Российская государственная библиотека: РГБ: もとのレーニン図書館) に所蔵 (非電子化カタログにより) されているが, ほかにわが国の東北大学図書館が第5巻と第9巻を除く7冊を所蔵している。
- (73) АРАН, Ф. 154, Оп. 4, Д. 2, л. 91.

第3章 ハイム・ガルベルの技術論

先にも述べたように、ロシア科学アカデミー・セルゲイ・ヴァヴィーロフ名称自然科学史=技術史研究所の技術史部副部長であったオクサーナ・シモネンコは「技術のマルクス主義的概念の修得にもっとも関連性が高い哲学的諸問題に取り組んだのは、Kh.I. ガルベルであった」⁽¹⁾と評している。しかしながら、ハイム・ガルベルの技術のとらえ方が検討されることはなかった。彼はどのような人物で、どのような技術論を展開していたのであろうか。

1. ハイム・ガルベルとはどのような人物であったのだろうか



図6 ハイム・ガルベル

ガルベルは、ドイツ語版原書にまで遡って原著者の用語例を確認するなど、カール・マルクスの『資本論』に精通していたほか、エルンスト・カップ、ルートヴィヒ・ノワレ、フランツ・ルーロー、オズヴァルト・シュペングレーなど「技術の哲学」の領域における古典的な著作を含む、非マルクス主義的な見方に立つ論稿も詳細に検討しており、当該分野における該博な知識を基礎に、新しいマルクス主義的な技術論を構想していた。しかしながら、ガルベルは若くして悲劇的な形で生を中断させられ、その

独創的な技術論も未展開に終わった。

ガルベルとはどのような人物であったのだろうか。ガルベルは、1903年1月16日（じつは1902年3月生まれとも本人は申告してもいる）、ヴィリニウス生まれのユダヤ人である。父は軍服仕立て業の職人で、家は貧しかったものの、「困窮ユダヤ人子弟援助委員会」、および「兵士子弟援助制度」（父は第1次世界大戦に従軍）の援助により、当時の貧しいユダヤ人子弟としては例外的にギムナジウムに進学できた。

1918年、ギムナジウムを卒業するとともに革命運動に奔走、1918年末から1921年1月までカザンでヴラジミール・レーニン名称共産主義青年同盟（コムソモール）を舞台に活躍し、抜擢されて、1921年1月から1923年6月まで、ソ連の党・政権を支える人材の育成をめざした高等教育機関、ヤーコヴ・スヴェルド

ロフ名称共産主義大学に学んだ。卒業後、トゥーラでの党活動や赤軍従軍等をはじめ、1926年10月から、ソ連の党・政権を支える高等教育要員・研究要員を育成する大学院レベルの高等教育機関「赤色教授学院」に学び、1930年7月に修了した後、バクー等で高等教育に従事しつつ、当地における科学アカデミー支部の設立にも関与した。

1934年3月、レニングラード工業専門学校に哲学担当の教授として招かれ、ほぼ同時に、科学史=技術史研究所に勤務し⁽²⁾、3月24日の所長室会議において、『技術史全史』（«Всеобщая история техники»）全10巻編纂の“事務主任”役を任された⁽³⁾。短い生涯に5篇の公刊論文を残している⁽⁴⁾。

のちに独裁者となるヨシフ・スターリンと対立して共産党を追われこととなったレフ（レオン）・トロツキーらに同調して、1923年に一時、党内民主主義をもとめる演説もしているが、すぐにこの立場を撤回し、トロツキーらを批判する演説を活発におこなっている。また、1930年の、いわゆる「哲学論争」では機械論派を支持し、しばらくその立場に固執したが、1931年には自己批判を明らかにしている⁽⁵⁾。

2. ガルベルによる技術の把握

技術のとらえ方という問題領域では、ガルベルは2篇の論文、すなわち、科学アカデミーのレーニン没後10周年記念論集『科学アカデミー——レーニンに寄す』（1934年）に寄せた論文「認識論と技術」⁽⁶⁾、および科学史=技術史研究所が発行していた論集『科学史=技術史アーカイヴ』第5巻（1935年）に掲載された論文「マルクスにおける Maschinerie の問題」⁽⁷⁾を残している。しかし、その技術論のユニークさがもっとも鮮明に現れたのは、1934年2月11日、研究所会合における講演「ガルベル教授の報告」であろう。速記録がロシア科学アカデミー文書館に残されている⁽⁸⁾。アナトーリー・ズヴォルキンは、ガルベルらの逮捕ののち、科学史=技術史研究所が断罪される過程〔これについては後述〕で、この研究所が「方法論的・哲学的問題の研究に招かれたトロツキスト=ガルベルの助けで、マルクス主義の創始者たちの遺産を基礎として“研究”を行いはじめ」、 「研究所指導者〔ニコライ・ブハーリンを意味する — 引用者〕への“敬意”の涵養、アカデミーの若い人材の“育成”はガルベルが指導する特別の理論セミナーでおこなわれた」⁽⁹⁾と述べており、ガルベルが所内でセミナーなどを活発に主催していたこ

とが推測される。しかし、科学アカデミー文書館にも、ソ連共産党中央委員会の文書類を保管するロシア国立社会=政治史文書館にもこの「ガルベル教授の報告」以外にそうしたセミナーなどの記録は所蔵がない。痛みが激しく解読に労苦を要するものの、この速記録が後世に伝えられた、おそらく唯一の、ガルベルの口頭報告の記録であろう。

ここで特徴的なのは、彼が技術を「労働手段(の体系)」とは単純にはみなしていないこと、および、彼が発達した機械における原動機の役割に主導性を看していることであろう。以下、このふたつの論点を中心にガルベルの主張をみてゆこう。

(1) 「人間の自然に対する能動的な態度」—技術の定義をめぐって—

ズヴォルキンは、「技術を社会的生産体系における労働手段とするマルクス主義的な定義は、技術を労働手段(技術の主要な内容を構成しているとはいえ、それに限られるわけではない)、生産手段、テクノロジー、生産力などとする類似した定義とは鮮やかな一線を画し、学術領域としての技術史の対象に関する問題に明瞭さをもたらす」⁽¹⁰⁾として、社会的生産体系から切り離されていないという意味において労働手段をもって技術と定義する。しかし、ガルベルは、「マルクス主義は一般にモノ(вещь)を研究しない」、「マルクスは経済学者として商品物神を明るみに出したように、技術者としての彼は技術物神を明るみに出した」⁽¹¹⁾として、労働手段(およびその体系)をもって技術の定義とすることを拒否する。ドイツ語に堪能な彼は、ロシア語には完全な意味での同義語がないマルクスの *Technologie* という語に注目し、「マルクスは『資本論』で *Technologie* の批判的な歴史の問題を提起した。……マルクスは、*Technologie* は人間の自然にたいする能動的な態度を明らかにしていると言う」⁽¹²⁾と述べている。ここで、「*Technologie* の批判的な歴史」の「批判的」という語であるが、ガルベルにとってはその語はそれほど意味をなすものではない。なぜなら、「あらゆるマルクス主義的な探究は批判的である。そこにはなんら特殊性はない。……課題は、さまざまな発展段階における人間の自然にたいする能動的態度とは何を意味しているのかを思索し、認識することにある」からである⁽¹³⁾。

それでは、「批判的」という語を抜いた「*Technologie* の歴史」こそ、彼が言う「われわれの学術領域」固有の対象なのであるか。そもそも、*Technologie* が問題とされるのは、生産力の研究においてである。ガルベルの言葉を借りるなら、「生

産力を社会史の動因と見るマルクスの学説から出発して、社会生活のすべての諸形態（生活、意識、経済およびイデオロギー）との具体的な相互関係の視点から生産力を研究すること。ここにわたしは自然科学の知識を加える。……つまり、生産力全体がわれわれの学術領域の対象なのであろうか、それとも機械—労働手段—がその対象なのであろうか。われわれの文献では、技術のマルクス主義的な歴史は単に労働手段の歴史に自己を限定してはならないと教えている。わたしには、労働手段の研究に限定することはわれわれの学術領域にとって正しくない限定であると思われる⁽¹⁴⁾ということになる。

では、「そもそも『労働手段』とは何か⁽¹⁵⁾。それは、「労働対象、および労働するひとと直接境界を接している。……自然とその力の獲得、その力の変容と人間への奉仕、この技術の基本的な内容をわれわれは労働から、自然から抽出している。もし、われわれが労働手段だけを対象として取り扱う[技術史の—引用者]授業を構想すれば、われわれのテーマは、自然の問題、人間の問題を看過することになる。Technologieが人間の自然にたいする能動的な態度を明らかにするものであれば、すべての状態全体に注意を振り向けなければならない。ここには全部で3つの契機がある。人間、自然、人間の自然にたいする能動的な態度、である。本質的に、マルクスがこの3つの契機を与えているのである。どこにアクセントを置くべきであらうか。もちろん、『能動的な態度』に、である。しかしながら、われわれは労働手段はモノとして分析できるであらう。ここに、多くのマルクス主義者たちの過ちがある⁽¹⁶⁾ということである。それゆえ、「もしわれわれが方法論的科学[技術史方法論としての—引用者]を正確に名付けるとするならば、かつ新しい言葉を案出しないのであれば、マルクスの古い用語、人間の自然に対する態度を解明する学術領域としてTechnologieという語を再利用することができよう⁽¹⁷⁾。ここにおいて、ガルベルはTechnologieという用語に、単なる労働手段(の体系)を超えた、「人間の自然にたいする能動的な態度」を見ようとする。

論文「認識論と技術」は、その題名が示唆しているように、そもそも哲学の一領域としての認識論(Gnoseology / Epistemology)の範疇に属する仕事として執筆されたものであるが、ガルベルはマルクス主義哲学における認識の理解が「人間の実践」、なにかんずく、その「第一義的、決定的形態」である技術(労働手段のものではない)に規定されていることを論証しようとする。この文脈において、彼はどのように技術を位置づけるのであろうか。「技術は人間の実践の第一義

的、決定的形態である。自然科学において自然にたいする理論的な関係が与えられるとするなら、技術においては自然にたいする実践的關係が与えられるのである。……機械学 (машиноведение) は、道具そのものだけではまだ技術を形成しているわけではないということに認識することなく、技術のなかにただ道具だけを想定している。技術、それは自然に対立する人間そのものである。道具はこの事実の物質的表現である。機械における社会的契機は無視のゆえに、力学 (механика) は技術的フェティシズムに囚われていることが明らかとなる。マルクスの無数の貢献のひとつは、この技術的フェティシズムの暴露、機械の社会的本質の発見にある。……技術は自己運動のプロセスとして発達するのではない。これは明らかだが、ひとびとは相互に關係を取り結ぶことで、自然に立ち向かうことができる。自然 (技術) にたいする能動的な關係は、ただ、ひとびとの間の一定の生産諸關係 (経済) のなかでのみ可能となる。技術的实践は常に経済経営活動の形態でおこなわれる。全体的な社会の法則性とは無縁に、特有の法則に従って発達する、自律したプロセスとしての技術など存在しない⁽¹⁸⁾。つまり、「労働手段は人間の自然にたいする作用の“伝動者”である⁽¹⁹⁾」としつつも、ガルベルは、技術を労働手段 (のみ) と定義することにここでも抵抗する。

(2) 発達した Maschinerie における原動機の主導性

マルクス自身は『資本論』のなかで、「道具機 [本稿での作業機と同じもの一引用者] は、適当な運動が伝えられると、自分の道具で、以前に労働者が類似の道具でおこなっていたのと同じ作業をおこなう一機構である。原動力が人間から出てくるか、それ自身また一機械から出てくるかは、事態の本質をなにも変えない。本来的な道具が人間から一つの機構に移されるのに応じて、単なる道具に代わって機械が現れる」⁽²⁰⁾ と述べ、産業革命期の発達した機械における作業機の規定性、その社会経済史的意義を強調している。ズヴォルィキンは、「マルクスは、18世紀後半における技術の発達を分析して、産業革命の出発点となる作業機が最初に創造された繊維工業の技術発達にとくに注目している」⁽²¹⁾ 点を確認しているが、さらに敷衍して、「まさに、技術発達の現段階にいたるまで、マルクスが『いまやさまざまな種類の個々の作業機およびそれらのグループからなる一つの編制された体系は、その総過程が連続的であればあるほど、すなわち、その原料がその最初の局面から最後の局面まで移行するのに中断が少なければ少ない

ほど、したがって人間の手ではなく機構そのものが、原料を一つの生産局面から次の生産局面へ押し進めていくようになればなるほど、それだけますます完全となる』と述べたことが該当する⁽²²⁾として、機械、あるいは筋骨系労働手段の発達を、自動機械体系（オートメーション）への発展を視野に入れつつ、作業機の進歩を軸に見る見方を展開している。

しかし、ガルベルはこうしたとらえ方に反対する。その講演のなかで、彼は「幾人かの著者、とりわけベッソノフによって、ある発展段階において、他に抜きでた主導的な役割が作業機に与えられている。わたしにはこれは正しくない問題設定だとわかった。勇気をもって言いたい。産業革命期に作業機は主導的な役割を果たしていない。産業革命期に主導的な役割を果たしたのは、原動機である。あらゆる場合において、蒸気機関、あるいは新しい原動機と結びついたコンプレックス複合機構なしに産業革命を理解することはできない⁽²³⁾」と述べた。

こうしたガルベルの見方がなにゆえ成り立つのか、この講演ではこれ以上はほとんど展開されていないが、翌年発表された論文「マルクスにおける *Maschinerie* の問題」では、この問題がマルクスの用語例に立ち返って詳細に検討される。ガルベルは、ロシア語に（そしてフランス語にも）対応する言葉が存在しない *Maschinerie* という語に注目し、*Maschine* と *Maschinerie* の差異のなかに、上述の理解の根拠を求める。ここで悩ましいのは、「マルクス自身がいくつかの場合、*Maschinerie* と *Maschine* を同一視していることである⁽²⁴⁾」。

まず、*Maschine* であるが、「機械は、われわれが知っているように、ずっと以前、手工業の時代に存在している。しかし、以下確認することがとても重要である。大工業の時代になってはじめて、それらが機械であることがわかるようになった。このように、機械は、その言葉の固有の意味において、発達した資本主義的諸関係の時代になってはじめて登場したのである⁽²⁵⁾」とその歴史的被規定性を確認したのち、「機械が原動機の性質に左右されないことを強調しておくべきであろう⁽²⁶⁾」として、「作業機は労働者の道具の役割をはたすメカニズムである。……機械一般についていえば、言葉の固有の意味において、機械はまず作業機の形態で大工業の時代に登場したことを確認した。……作業機、それは照応する運動を受け取るとみずからの道具によって、以前は労働者が同様の道具でおこなってきたことをおこなう機構である⁽²⁷⁾」と、マルクスに倣って作業機の歴史的意義を確認している。彼にとってこの場合の作業機の社会経済的意義とは、「この転換

からそれに続く、手工業道具につきものであった制限から作業機が解放されたという基本的な事実が生まれてくる」⁽²⁸⁾と述べていることからわかるように、人間の身体器官の自然的制約からの解放、つまり生産力の飛躍的發展に他ならない。

ガルベルは、ここで「マルクスが道具の機械への転化の過程を説明するとき、彼は *Maschinerie* ではなく、“機械”の語を使っている」、「マルクスにあっては、機械一般の登場についてではなく、作業機の登場、正確に言えば、労働者の道具から機械の道具への転換について言及があるが、この過程の研究では、マルクスは *Maschinerie* という用語を必要とはしなかった」⁽²⁹⁾と確認した。そして、「『機械制生産の単純な要素としての』機械」というマルクスの用語法に着目して、「このことは、機械の領域から出て、*Maschinerie* の領域へとわれわれが移ることを意味している」⁽³⁰⁾としている。

では、機械と区別される *Maschinerie* とはどのように定義されるのか。ガルベルは、次のように述べ、「今や、*Maschinerie* の概念が機械のそれと違うことはまったく明らかである」⁽³¹⁾と結論する。

「実際、マルクスには、機械ではなく、*Maschinerie* の3つの部分についての学説が内包されている。ドイツ語テキストからは鮮明に、それ [*Maschinerie* 一引用者] が原動機、伝動機構、作業機からなる複合機械であることが明らかになる。機械が歴史的に労働用具の複合体として登場したのと同様、発達した *Maschinerie* は多様な機械の複合体として登場する。……このようにマルクスは、まずは、多様な、お互いに補完しあうような種類の、つづいて、同種の、同時に作動する種類の機械の複合体を *Maschinerie* 概念に結びつけている……分散的に、独立して存在した手工業時代、マニュファクチュア時代の機械とは違って、産業革命期の作業機は、*Maschinerie* と有機的に結びついたかたちで登場する。……方法論的にのみ作業機を他から分離したものとして検討することはできるが、しかし、現実には大きな全体としての *Maschinerie* から切り離すことのできない部分である。……*Maschinerie* においては、ひとつの原動機からエネルギーをえて多くの作業機が動いている。」⁽³²⁾

ガルベルによれば、この *Maschinerie* の社会経済的影響は極めて大きい。彼は次のように述べている。

「*Maschinerie* は歴史的には蒸気機関のかたちで登場するような強力な原動機

を前提とする。『作業機の規模と、同時に作業する道具の数との増大は、いっそう大規模な原動力機構を必要とし、……人間の原動力よりも……いっそう強力な原動力を必要とする』。……マニュファクチュアの技術につきものの主観性（個々の労働者の組み合わせ）は機械制生産の客観性（生産への自然科学の原理の導入）に取って替わる。……マルクスは *Maschinerie* と自然科学との結びつきも示している⁽³³⁾。

また、次のようにも述べている。

「マルクスが明らかにしているように、*Maschinerie* の形態において、労働手段は、みずからの補助者、つまり人間をその明確な自然的限界に追い込まない限り、たえず生産を続ける工業的な“永久運動機関” (*Perpetuum mobile*) として登場する。手工業、マニュファクチュアが一扫された問題を研究する際に、マルクスは *Maschinerie* というタームを使う⁽³⁴⁾。

さらに、*Maschinerie* は労働日の延長や婦人・少年労働の導入をもたらし、「彼[資本]は *Maschinerie* の助けを借りて、マニュファクチュアにおいて成人男子労働者が資本の専制にたいして示していたような対峙を弱体化させ」、そうすることで、「*Maschinerie* はこのようにプロレタリアートの階級的自覚に作用する⁽³⁵⁾」とする。

ガルベルは、このような *Maschinerie* もその登場はきわめて早いとして、その「ゲネシスは水力製粉機として登場する。つまり、最初の根源は奴隷制期にある⁽³⁶⁾」と見る。その上で、彼は『資本論』においては、製粉機は機械としてではなく、体系的に *Maschinerie* を代表するものとして登場していることを考慮しなければならない⁽³⁷⁾ と言う。そして、大工業の時代、*Maschinerie* は、「機械的な原動機に運転される、諸作業機の自動的に動く、分解されたシステムこそが本質的⁽³⁸⁾」となり、さらに発達して、「*Maschinerie* の歴史において、原動機は巨大な役割を果たしはじめる。その後、伝動機構、および、いわゆる物質的生産の一般的条件[原料、燃料、補助材料、建物、自然的諸条件、その他—引用者]が続く⁽³⁹⁾」ことになる。

以上で明らかかなように、ガルベルは、マルクスの用語法に立ち返って、*Maschine* と *Maschinerie* を区別し、前者では作業機が（ただし、生産量の飛躍という次元において）、後者においては原動機が社会経済史的に主導的や役割を果たすとすることで、先述の問題を解決しようとするのである。

3. ガルベル技術論への批判—ズヴォルィキン—

ブハーリンを政治局員から解任した1929年11月の全連邦共産党(ボリシェヴィキ)中央委員会総会は高等工業教育機関へのマルクス主義的技術史の導入を決議した⁽⁴⁰⁾。この決議を出発点に、レニングラードの科学史=技術史研究所とは別の、工学教育の便に供するための技術史の潮流が形成されていった。“レーニンの戦友”であり、人民委員会議[内閣に相当 — 引用者]附属高等技術教育委員会議長となったグレブ・クルジジャンフスキーの寵をえたズヴォルィキン⁽⁴¹⁾は、高等技術教育委員会内の「マルクス主義的技術史委員会」、あるいは(メンバーのかなりが重複した)「共産主義アカデミー」幹部会附属“技術史セクション”を舞台に急速に台頭してくる。おもに社会科学の諸分野におけるマルクス主義に基づく学術研究・教育機関として1918年に設立された「共産主義アカデミー」(当初は「社会主義アカデミー」)は、科学アカデミーと一体化すべく、1936年に廃止される。これに伴い、1936年4月、ズヴォルィキンをリーダーとする「共産主義アカデミー」幹部会附属“技術史セクション”はほぼそのまま横滑りして、ソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所「モスクワ技術史部」となる⁽⁴²⁾。直後の科学史=技術史研究所のモスクワ移転はその規模の大幅縮小と要員の入れ替えを意味したが、「モスクワ技術史部」は移転によってほとんどそのまま研究所の「技術史セクション」となった。

「大テロル」⁽⁴³⁾は社会の多くの活動を支えていた要員の大量喪失を意味したが、野心的な若い層にとってはしばしば上位の役職者の不在による異例の出世をもたらした。ズヴォルィキンは、まさにこうした「大テロル」特昇組のひとりであり、事情は、“ソ連を代表する技術史家”となる非党員ヴィクトル・ダニレフスキーについても同じであった。

ズヴォルィキンは「科学史=技術史戦線におけるトロツキー=ブハーリン派の妨害の影響をその最後にいたるまで払拭する」⁽⁴⁴⁾という、勇ましい題をもつ論文を執筆し、ガルベルら科学史=技術史研究所の前指導部を激しく断罪した。彼は、このなかで、ガルベルら「ファシズムのエージェントたちの虚偽の活動」として以下の諸点を挙げている⁽⁴⁵⁾。

- ①科学史=技術史に関するマルクス主義の創始者たちの作品についての沈黙
- ②表向きマルクス主義・レーニン主義の真実性にたいして誓いを立てながら

のマルクス主義の偽造

- ③反動的な理論のプロパガンダ，マルクス主義に敵対的なブルジョアの仕事のマルクス主義の名による隠蔽
- ④科学的客観性の旗のもとに科学史=技術史を，死んだ，形式的な，技術史的事実の分類に随し，科学史=技術史の研究における戦闘的で革命的な原則を冷却しようとする努力
- ⑤わが国の偉大な科学者をマルクス・レーニンの遺産の継承から切り離さんとする努力
- ⑥ブルジョア科学とファシストの「啓示」の前にひれふす奴隷の育成
- ⑦科学史=技術史分野における実践的で戦闘的なテーマの，二義的で，くだらない，笑い話のようなテーマへのすり替え
- ⑧ソ連邦諸民族，住民の科学史=技術史研究の拒否
- ⑨象牙の塔，秘密性，自己宣伝，「みずから」の持ち上げ，『科学史=技術史』アーカイヴ誌のプハーリニスト=トロツキスト的活動を暴露しようとした同志への信用失墜工作

ガルベルについては，特に「マルクスにおける Maschinerie の問題」論文を取り上げ，「著者は，ひとを疲れさせる，長大な言語学的な演習問題に，マルクスの仕事の革新的内容を溶解してしまう」⁽⁴⁶⁾と全体的な印象を述べたあと，「マルクスの仕事のなかでもっとも重要で，価値あるものである，技術発達の法則と人類社会のさまざまな発達段階ごとの技術のふるまいの特殊性をテーマにした部分のもっとも深淵な内容ではなく，マルクスの著作のなかで出会う，個別の言葉（『マシネリ』）だとされている」⁽⁴⁷⁾とその問題設定の“的外れぶり”を論う。

『資本論』[を読んだひと — 引用者]は『マシネリ』[Машинериとキリル文字で表記されている — 引用者]という言葉がわからない。この言葉の理解は極めて難しく，複雑であるが，その難しく，複雑な問題をガルベルがはじめて『解決した』[というのである — 引用者]。……これはうんざりするようなスコラ主義である。……『マシネリ』と対峙されている『機械』という言葉は単に個々の機械と理解しなければならず，[『マシネリ』は，— 引用者]多くの場合，より広く，機械の体系，機械制生産と理解しなければならない，ということがわかるためには，マルクス，レーニンのテキストに親しむだけで

充分である。スコラ主義を隠蔽しつつ、ガルベルは、実在する、あるいは実在しうるいくつかの機械の定義について、『さらにそのそれぞれがある領域でのみ正当なのである』と無駄口をたたき、かくしてマルクスの機械の本質についてのもっとも明確な学説を歪め、狭量な技術主義と観念論にたいする批判を歪め、マルクス主義のあからさまな歪曲を進めてゆく⁽⁴⁸⁾。

4. 消し去られたもうひとつの技術論

以上、ガルベルの技術論の特徴的な議論を検討してきた。ガルベルの講演録や論文を読んでみると、TechnologieやMaschinerieなど、『資本論』ドイツ語版原書におけるマルクスの用語例にまで立ち帰った詳細な検討が目立つほか、カップ、ノワレ、シュペングラーなどの非マルクス主義的な見方に立つ著作に関する言及が非常に多いことに気づかされる。学術研究の発展という立脚点に立って新しい技術史を構想しようとしていたガルベル（そして科学史=技術史研究所の彼の同僚たち）はどのような立場のものであれ先行研究を尊重し、それらとの格闘を通じてマルクス主義的な学術研究の方法論を練り上げようとしていた。彼の真摯な姿勢は、研究者として正当なものであり、いささかも“スコラ的”などと蔑まれるべきものではなかった。この点、イデオロギー的な工業教育の必要から出発し、それゆえ先行研究からなどではなく、いきなりマルクス主義の原典（の当て嵌め）から出発することもできたズヴォルィキンらとでは、そもその立脚点に大きな違いがあったと思われる。

ガルベルにとって、ズヴォルィキンらの、技術を「社会的生産システムにおける労働手段」と単純明解に規定する定義は、“技術的フェティシズム”に陥った、誤った定義にほかならなかつたであろうし、ガルベルによるMaschineとMaschinerieの区別とそれによる原動機の生産力発展の推進力としての位置づけは、水力、風力、畜力、そして蒸気から電力への原動力の転換といった、技術史のダイナミックな歴史叙述を予感させるものではあつた。

しかしながら、彼の独創的なマルクス主義的技術論には、重大な点で未展開のところがある。彼は、技術を「労働手段（の体系）」とは単純にはみならず、こうした把握の背後にある“技術的フェティシズム”を乗り越えて、マルクスがTechnologieの語で示そうとした、労働過程で使用される労働手段に限定されな

い「人間の自然にたいする能動的な態度」を以て技術の定義としていた。こうした定義に依拠した場合、どのように技術の歴史を描くことができるであろうか。たとえ“技術的フェティシズム”に陥っているにしても、ズヴォルキン流の、技術を「社会的生産システムにおける労働手段」と明解に規定する定義によって、道具や機械や装置など、技術史の対象が具体的に措定されるようになり、技術史が一個の歴史科学として発展を遂げる具体的な基礎となりえた。そして、その実証的な成果が、そのイデオロギー過多の言説にもかかわらず、ソ連流のマルクス主義的技術史に、いわば“生命力”を賦与することになったともいえよう⁽⁴⁹⁾。

では、ガルベルの定義からはどのような技術史が構想できたであろうか。当然、こうした質問はガルベルに向けられるはずであった。ところが、彼がこうした質問に応えることはできなかった。残された資料から最小限言えることは、彼が、いわゆる器官射影説を採らず⁽⁵⁰⁾、また発明史としての技術史を構想しはしなかったであろう⁽⁵¹⁾ということぐらいである。

さらに、ガルベルが発達した機械における原動機の役割に主導性を看していることについても検討してみよう。作業機の社会経済的意義については、マルクスは『資本論』のさきほど引用した箇所が続いて、「ジェニー紡績機は、最初から12～18錘の紡錘でつむぎ、靴下編み機は、同時に何千本もの針で編む。同じ道具機が同時に働かせる道具の総数は、最初から、一人の労働者の手工業道具を制約する器官的制限から解放されている⁽⁵²⁾と、生産量の飛躍を挙げているが、彼は「道具の操作が機械の役目になれば、労働力の使用価値とともに労働力の交換価値も消滅する⁽⁵³⁾とも述べており、機械（この場合、作業機）の登場による労働者（すでに分業によって局所的熟練だけを助長され、部分労働者化されている）の資本に対する地位の変化、すなわち直接生産者としての権限と権威、それらに基づく抵抗力の喪失と資本への従属、いわば、“労働過程の主客転倒”をも論理的に内包している⁽⁵⁴⁾。ガルベルの作業機の把握には、このような賃労働の資本への実質的従属の物質的契機との位置づけは、この限りでは看られないのである。ガルベルにあっては、作業機ではなく、発達した *Maschinerie* 導入の結果としての婦人・少年労働の近代工業への吸引による成年男子労働力の対資本抵抗力の弱体化という文脈で「賃労働の資本への実質的従属」が語られているのみである⁽⁵⁵⁾。

生産力の飛躍という視点でとらえる限りにおいて、ガルベルによる *Maschine* と *Maschinerie* の区別、原動機が生産力発展の推進力としての位置づけは、一面

説得的であるが、それでは、それによってどのような技術史が構想されえるであろうか。

産業革命以前、水力、畜力、人力は併存しており、いずれかが特別の時代を画するという事もなく、産業革命における原動機としての（復動式）蒸気機関の登場・普及は生産力の発展に大きく貢献した。しかし、蒸気の時代のあと、歴史を画するのは電動機の登場・普及による工場電化であろうが、20世紀の初頭・前半における工場電化の進展以降は工場のMaschinerieの原動機に原理的な変化はなく、人類は産業革命のあと、蒸気の時代と電気の時代、わずかにふたつの時代を通過しただけとなる。

デーヴィッド・ランデスは工場電化の意義について、それまで独自の動力基盤をもたなかった分散した家内工業や零細工業が発電所からの豊富・低廉な電力の供給を受けて電動機を装備することによって、「新たな生命と展望を賦与」され、大工業との間に補完関係を形成することが可能となったとしている⁽⁵⁶⁾。確かに工場電化の意義はきわめて大きいといえるが、原動機に注目する見方で一貫させた場合、トータルな技術史が書けるかどうか、ここでも疑問が残る。

しかし、ズヴォルィキンに代表される、高等工業教育の必要から生じた“マルクス主義的技術史”の潮流と何ら生産的な議論を闘わせることもなく、ガルベル技術論の展開は突然中断される。

ガルベルは、1936年4月30日、内務人民委員部レニングラード州管理部により「反革命テロリスト」として逮捕され、同年12月23日、最高裁判所軍事参事会で禁固10年（公民権剥奪5年、財産没収を伴う）の判決を受けたが、1937年10月10日付内務人民委員部レニングラード州管理部“特別三役”の決定により裁判を経ずに「刑罰の高度な措置（Высшая мера наказания：ВМН）」となり、11月4日銃殺が執行された⁽⁵⁷⁾。

注

- (1) О. Д. Симоненко. «История техники и технических наук: Философско-методологический анализ эволюции дисциплины». Москва: Институт истории естествознания и техники РАН. 2005. С. 23: О. Д. Симоненко / 市川浩訳『技術史と工学史—学術発展の哲学的・方法論的分析—』ロシア科学アカデミー・エス・イー・ヴァヴィーロフ名称自然科学史=技術史研究所, 2005年, から「まえがき」と第1章「技術史の歴史」, 日本科学史学会『技術史』第8号, 2011年, 36頁（ただし、ここでは表現

を一部変えている)。

- (2) Архив Российской Академии наук (далее-АРАН), Фонд (далее-Ф.) 411, Опись (далее-Оп.) 6, Дело (далее-Д.) 691. лл. 3-9; Российский государственный архив социально-политической истории—РГАСПИ—), Ф. 17, Оп. 100, Д. 133559. なお、後者はガルベルの黨員調査であるが、そのなかに彼本人による本当の誕生年に関する自己申告がある(л.11)。
- (3) «Всеобщая история техники»を原語のいささか仰々しいニュアンスを失わないように『技術史全史』と訳した。この時点で「ガルベル同志に、文章化された契約をもとに、執筆者と原稿提出時期に関する交渉をおこなうことを委任する」(Санкт-Петербургский филиал Архива Российской Академии наук, Ф. 154, Оп. 1, No. 80, л. 12) ことが決まり、以降ガルベルは、頻繁に開かれた『技術史全史』執筆者集団の会議を事実上主宰してゆく。
- (4) 本書で取り上げる2篇以外にガルベルの論文は以下の3篇がある(Ф. 154, Оп. 2 личных дел. No. 12. 22/ П. 1934-31/1-365. л. 9)。①「マックス・アドラーの解釈におけるマルクス主義哲学」(X. И. Гарбер. “Философия марксизма в интерпретации Макса Адлера.” в Сборнике статей, «Против новейшей критики марксизма». М.-Л.: Государственное Издательство РСФСР. 1929г.) ②「現代ロシアの観念論」(X. И. Гарбер. “Современный русский идеализм.” «Бюллетень Института красной профессуры». No. 5-6, 1930). ③「アレクセイ・ローセフの戦闘的神秘主義に抗して」(X. И. Гарбер. “Против воинствующего мистицизма А. Ф. Лосева.” «Вестник Коммунистической Академии». No. 37-38. С. 124-144)。
- (5) АРАН, Ф. 411, Оп. 6, Д. 691, лл. 5, 6.
- (6) X. И. Гарбер. “Гносеология и техника.” Академия наук СССР. «Академия наук – В. И. Ленину». 1934 г. С. 97-146.
- (7) X. И. Гарбер. “Проблема Maschinerie у Маркса.” «Архив истории науки и техники». Вып. V, С. 1-56.
- (8) АРАН, Ф. 154, Оп. 4, Д. 27, лл. 1-26 (“Доклад Проф. Гарбера”).
- (9) А. А. Зворыкин. “Ликвидировать до конца последствия Троцкистско-Бухаринского вредительства на фронте истории науки и техники.” «Вестник Коммунистической Академии». 1937, No. 4-5. С. 16, 18.
- (10) А. А. Зворыкин. “О некоторых вопросах истории техники.” «Вопросы философии». 1953 No. 6, С. 34.
- (11) АРАН, Ф. 154, Оп. 4, Д. 27, лл. 10, 11.
- (12) Там же, л. 5.
- (13) Там же, л. 7.
- (14) Там же, л. 9.
- (15) Там же, л. 9.

- (16) Там же, л. 11.
- (17) Там же, л. 25.
- (18) *Гарбер*. “Гносеология и техника.” Указ. статья в примечании 6. С. 107.
- (19) Там же, С. 124.
- (20) カール・マルクス／日本共産党中央委員会社会科学研究所監修『新版 資本論』第1巻第3分冊, 新日本出版社, 2020年, 656, 657頁。
- (21) *Зворыкин*. “О некоторых вопросах...” Указ. статья в примечании 10. С. 37.
- (22) Там же, С. 40 : 『資本論』からの引用部分の日本語訳は前掲邦訳『資本論』(注20)のものを使った(邦訳668頁)。
- (23) АРАН, Ф. 154, Оп. 4, Д. 27, л. 17 : なお, ベツゾーノフとは, 経済官僚, 外交官でもあったセルゲイ・ベツゾーノフのことである。1925年, ウラル総合技術専門学校校長に任命され, 1927年まで在職していたが, その時期に『機械の発達』(С. А. Бессонов. «Развитие машин». Издательство “Московский рабочий.” 1926)と題する本を執筆・出版している (<https://biography.idealix.ru/index806d.html> 2024年5月17日閲覧)。
- (24) *Гарбер*. “Проблема Maschinerie у Маркса.” Указ. статья в примечании 7. С. 4.
- (25) Там же, С. 16.
- (26) Там же, С. 17.
- (27) Там же, С. 18, 19.
- (28) Там же, С. 19.
- (29) Там же, С. 25, 26.
- (30) Там же, С. 25.
- (31) Там же, С. 33.
- (32) Там же, С. 27, 28.
- (33) Там же, С. 32. : 『資本論』からの引用部分の日本語訳は前掲邦訳『資本論』(注20)のものを使った(661頁)。ただし, ガルベルは明示することなく, かなりの省略を行っている。
- (34) Там же, С. 41.
- (35) Там же, С. 43, 44.
- (36) Там же, С. 35.
- (37) Там же, С. 37.
- (38) Там же, С. 50.
- (39) Там же,
- (40) АРАН, Ф. 154, Оп. 1, Д. 21, л. 25.
- (41) クルジジャンフスキーはズヴォルィキンを「わたしの代理 (мой заместитель)」と呼び, 第三者に対し, 自身の留守中の連絡先として指定している (АРАН, Ф. 154, Оп. 1, Д. 21, л. 121)。

- (42) АРАН, Ф. 154, Оп. 1, Д. 99, лл. 10–12.
- (43) 1936～37年にかけてピークを迎えた「大テロル」（肅清）の嵐については、ウェンディ・ゴールドマン／立石洋子訳「5 テロルと民主主義」（松井康浩・中嶋毅編『ロシア革命とソ連の世紀2 スターリニズムという文明』岩波書店、2017年、147～174頁）を参照されたい。
- (44) Зворыкин. “Ликвидировать……” Указ. статья в примечании 9. С. 15-37: ЗвюльиКинは、「個々の同志からの警告や抗議を呼んだとはいえ、この研究所で働く共産黨員やモスクワの全連邦高等技術教育委員会技術史委員会や共産主義アカデミー・技術史セクションでグループを形成していた働き手を含む科学史家、技術史家[そのなかにはズヴォルィキン本人も含まれる — 引用者]によって[ガルベルらの“反革命活動”が一引用者]明らかにされたわけではない」（Там же, С. 16）と述べて、トロツキスト=ブハーリニスト告発にみずから加わらなければ、自分たち自身が弾劾の対象ともなりえたであろう恐怖を暗々裏に仄めかしている。しかし、ドンバス炭田の経営管理要員としてそのキャリアをスタートさせた彼は学徒としては経済学を専攻しており、この段階で技術史プロパーの研究業績はほとんどなかった（АРАН, Ф. 154, Оп. 2а, Д. 17, лл. 2-14）。そのため、彼は、さかんに技術史分野で著述活動をおこなっていたダニレスフスキーに声をかけ、その協力を仰いだ（АРАН, Ф. 154, Оп. 1, Д. 21, лл. 225, 226）。
- (45) Зворыкин. “Ликвидировать……” Указ. статья в примечании 9. С. 16–18 : たとえば、「くだらない、笑い話のようなテーマ」の例として、この研究所で研究された孵卵器の歴史を取り上げ、「もし、以前に、こうした事実のすべて、テーマの選択、研究活動の方向性が単純な偶然とみなされていたならば、トロツキスト=ブハーリニストの反革命活動のトーンの上にこの方向性の真正正銘の内容が明らかになるであろう」（Там же, С. 23）としている。なお、ズヴォルィキンが言う“孵卵器の歴史”の研究が誰のどのような研究を指すのか、『科学史=技術史アーカイヴ』全巻の目次はじめ手持ちの資料をすべて探したが特定できなかった。さらに、この研究所における科学史研究の例として、セルゲイ・ヴァシーリエフの論文を取り上げ、「マルクス主義の創始者の仕事に関する沈黙路線からあからさまな偽造という方針に転じた『[科学史=技術史 — 引用者]アーカイヴ』第5巻には、ヴァシーリエフの長大な論文『エミール・マイヤーソン』が掲載された。……ヴァシーリエフは、言葉の覆いの煙幕のもとに、(典型的な観念論者=折衷派で反動家の)マイヤーソンの仕事が『いくつかの唯物論の要素を』有していると述べている」（Там же, С. 20）と批判している。また、高名な熱機関工学者で技術史家のアレクサンドル・ラーツィクの仕事については、「例として、ラーツィクのカルノーに関する『[科学史=技術史 — 引用者]アーカイヴ』第3巻所載の論文を取り上げる。この論文は、典型的なブルジョア的な伝記と違いがなく、カルノーの生涯と仕事の歴史を社会的条件から切り離し、カ

ルノーの仕事の本質に関するエンゲルスの素晴らしい教示を無視している」(Там же, С. 21) と評している。確かに、ラーツィクはスイスからロシアに移住した商人の祖父、ロシア帝国でも第一級の鉄道技師だった父を持ち、自身ベルリン大学などに留学し、ペテルブルク(ペトログラード)大学の教授を勤めた典型的な“旧専門家”, ないし“ブルジョア専門家”であり、技術史にも強い関心を持ち、生涯数冊の関連著作を著すが、その労作『ジェームズ・ワットと蒸気機関の発明』(А. А. Радциг. «Джемс Уатт и изобретение паровой машины». Пг., НХТИ, 1924, 106 cc.) はワットの天才ぶりを強調する、いわゆる“天才史観”が目立つ。しかし、第2章で明らかにされたように、『技術史全史』全10巻編纂のために編成された“執筆者部隊”はラーツィクその人をはじめ非マルクス主義的な旧専門家を含んでいた。ガルベルらは、非マルクス主義に立つ先行研究, “ブルジョア”専門家, 旧専門家をも尊重し、それらとの協働により包括的な出版事業をめざしていた。そのため、会議を重ね、粘り強く合意を形成しようとしていた。ここでは、マルクス主義の側からする批判は(しばしばソ連史に見られるような)“打倒”を意味しなかった。

- (46) Зворыкин. “Ликвидировать……” Указ. статья в примечании 9. С. 18.
- (47) Там же, С. 18, 19.
- (48) Там же, С. 19. ズヴォルィキンが引用しているガルベルの文章がどこから引用されたものであるか、本書著者は確認できなかった。なお、ズヴォルィキンはガルベル批判につづけて、この研究所初代の学術書記マドヴェイ・クコーフスキーのイタリア・ルネサンス期の技術に関する仕事を取り上げ、『機械』概念の偽造に、18世紀産業革命に関するマルクスの学説の偽造が続く。……ブハリンとK⁰[不明。誰かの人名が抹消され、その上にこの記号が附されているように見える — 引用者]によってレニングラードの研究所で育成された狂暴な修正主義者、偽造家たちは15世紀、16世紀の『産業革命の特有の特徴をもったそのリハーサル』について語る事ができるのである」(Там же, С. 19) と論難を加えている。
- (49) 言うまでもないことであるが、技術史の包括的な大著、『技術の歴史』(А. А. Зворыкин, Н. Н. Осьмова, В. И. Чернышев и С. В. Шухардин. «История техники». Москва: Соцэкгиз, 1962), その後、いわゆる「科学技術革命論」の諸議論を取り入れて新たに編纂された共著、『歴史的発展の中の技術』(С. В. Шухардин, Н. К. Ламан и А. С. Федоров (ред.). «Техника в ее историческом развитии». Москва: Наука, 1979) という、記念碑的ともいうべき浩瀚な大著が生み出されることになった。上記2作は邦訳され、わが国でも大きな影響力を発揮した(ソ連科学アカデミー編(アー・アー・ズヴォルィキンら) / 山崎俊雄他訳『技術の歴史1, 2』東京図書, 1966年。および、ソ連科学アカデミー編 / 金光不二夫訳『世界技術史』大月書店, 1986年)。そして、旧ソ連では、科学アカデミーのセルゲイ・ヴァ

ヴィーロフ名称自然科学史=技術史研究所を拠点として、労働手段(の体系)の発達を対象とする技術史研究が積み重ねられていった。

- (50) ガルベルはここで紹介した論文2篇、および講演録1件のいずれでも“器官射影”説に言及しているが、いずれの場合も否定的である。「機械は人間器官の有機的可能性から生じる制約から解放されている。……“器官射影”説は認識論的に成り立たない。論理的な結末にまで行き着くと、この学説は技術の発達に境界を設け、知識すら制約することになる。……技術はその本性上、境界を知らない」(Гарбер. “Гносеология и техника.” Указ. статья в примечании 6. С. 126, 127) と、技術発達の理解を狭めるものとして批判している。
- (51) 発明についてガルベルは、その研究所内での講演のなかで「われわれの課題は技術的発明の問題をマルクス主義の歴史における個人の役割に関する学説の視点から研究することにある。……技術的発明の問題はまったく明確に階級という軌道に置く必要がある。発明家の階級社会における社会的・政治的悲劇、それは全体的な問題である。……われわれにとって導きとなるのは、技術の主導的な役割、技術的発明の事業における実践的な要求、実践的な必要に関する教示である」(АРАН, Ф. 154, Оп. 4, Д. 27, л. 22) として、発明そのものやその背後にある天才を対象とする立場はとっていない。また、ガルベルが『資本論』解釈でたびたび言及している「自然科学」の語も、それを生産力上昇の一契機とするマルクス自身の用例からそれほど逸脱しているわけではない。マルクスは、「大工業が、巨大な自然諸力と自然科学とを生産過程に合体することによって労働生産性を高めるに違いないことは一見して明らかである……」(『資本論』(注20), 678頁) と述べているのである。この点、わが国戦後社会思想史の文脈において技術の本質の定義をめぐり少なからぬ影響力を発揮した、いわゆる「意識的適用説」とは共通するところは少ない。
- (52) 『資本論』(注20), 657頁。
- (53) 同, 757頁。
- (54) 海道勝稔「第4章 相対的剰余価値の生産」, 同「[補論8] 資本のもとへの労働の形式的小および実質的包摂」(島恭彦他編『新マルクス経済学講座』第1巻, 有斐閣, 1971年, 97~104, 117~118頁) 参照。
- (55) Гарбер. “Проблема Машинерии у Маркса.” Указ. статья в примечании 7. С. 43.
- (56) D. S. Landes, *The Unbound Prometheus: Technological Change and Industrial Development in Western Europe from 1750 to the Present*. Cambridge University Press, 1970. p.288.
- (57) [https://ru.openlist.wiki/Хаим_Иосифович_Гарбер\(1903\)](https://ru.openlist.wiki/Хаим_Иосифович_Гарбер(1903)) 2019年11月28日閲覧。

第4章 “物質文化史”か“技術史”か？

—1930年代初頭のソヴィエト国立物質文化史アカデミーにおける論争—

“マルクス主義的技術史”を探究したグループには、第1章で扱った人民委員会議（内閣）附属高等技術教育委員会「マルクス主義的技術史委員会」、第2章、第3章で扱ったソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所とは別の、第3の潮流があった。レニングラードに本拠を置いていた国立物質文化史アカデミー（Государственная академия истории материальной культуры: ГАИМК. 以下ガイムク）においてほんの一時登場した構想であった。

1. 国立物質文化史アカデミーとニコライ・マル

ガイムクは1859年に設立された帝室考古学委員会を母体に、革命後の1919年、「ロシア物質文化史アカデミー」として再編されたものである（1926年に「国立物質文化史アカデミー」と改称）⁽¹⁾。もともと考古学分野の研究機関であったため、非文字人工遺物の研究に精通しておりその視点から、原始から現代までの人類の歩みにアプローチしようとする壮大な構想をもつに至る。のちに“ソ連を代表する技術史家”とも見なされたヴィクトル・ダニレフスキーも初期にはこうした歴史構想に共感し、指導者ニコライ・マルの知遇を得てその紹介でレニングラードに移住し、ガイムクに属して活動した⁽²⁾。しかし、オクサーナ・シモネンコによるロシア・ソ連における技術史研究を扱ったヒストリオグラフィーの中にガイムク、ないしその研究者が取り上げられることはなかった⁽³⁾。

ガイムクの研究活動は早川次郎らによってほぼ同時代的に日本に紹介され⁽⁴⁾、戦前日本の歴史学へのマルクス主義の導入、なかんずく、封建制期に先行する社会構成体の理解に大きな影響を与えた（「アジア的共同体論」など）⁽⁵⁾が、こうした影響はもっぱら考古学、ないし古代史の分野に限定されており、技術史、あるいはより一般的に近現代史を含む世界史への貢献が語られることはなかった。

本章では、従来ほとんど知られていなかったガイムクにおける、技術史を包含しつつ、それを超える“物質文化史”の提唱とそれに関して闘わされた論争を、“ソヴィエト・マルクス主義”にも多様な発展がまだ選択可能であった、ソ連史のこの段階における“マルクス主義的技術史”創造という課題の受けとられ方の

一端として紹介したい。

ガイムクの研究者集団は、1920年代から1930年代前半にかけて、大きな影響



図7 ロシア科学アカデミー・物質文化史研究所

力を持った言語学者・東洋学者であったマルの強い影響下にあった。彼は一時、言語学のマルクス主義化に大きく貢献したとされていた。村山七郎によれば、彼の“言語学”は、言語を“上部構造”に属するものと見なし、階級的性格を帯びているとしている点、言語の接触・混交によって新しい言語が生まれるとして、言語史における諸言語の“収斂”(Convergentz)を重視し、「インド=ヨーロッパ祖語」の“分化”(Divergenz)の過程として言語史を研究する当時主流の印欧語比較言語学に反対した点、人類単一の言語生成過程の究明を言語研究の目的とした点に特徴がある⁽⁶⁾。



図8 ニコライ・マル

“マル言語学”は、1950年、独裁者で、かつ、最高の“知的権威”をも誇っていたスターリンからじきじきに批判⁽⁷⁾されるまで、「すべての社会現象を階級的立場という色眼鏡で眺めることに慣れてきたソ連のすべての人文科学者に」⁽⁸⁾受け入れられ、「弁証法的唯物論の具体的科学への模範的な適用例のひとつとして、科学の“再建=ポリシェヴィキ化”の最良の実例=模範のひとつとして擁護」⁽⁹⁾されてきた。

もともとコーカサス諸国の歴史研究から出発し

たマルはまた、考古学や古代史に対しても“偏愛”（田中克彦の表現）を示した。田中によれば、「失われてしまった原始の意味世界に分け入るためには、現代の意味感覚をこえて、別世界の意味の連関を復元しなければならず、マルはトータムのシンボリックな意味を言語の意味解釈と結びつけたりした」⁽¹⁰⁾とされる。そこから、非文字人工遺物を言語史探究のための研究対象とする“言葉の古生物学（Paleontology of speech）”も構想した。ガイムクは“マル崇拜者”の拠点となっていた。ダニレフスキーもそのひとりで、いくつかの論文をその紀要に執筆した。そのひとつのなかで、彼は彼なりに“言葉の古生物学”にも挑戦している⁽¹¹⁾。

この時期、マルやその支持者たちの活発な論述活動と並行して、帝政ロシアで養成された専門家の大量排除を進め、要員の速成教育をねらった高等教育改革をともなった“文化革命”（1929～32年）、および、機械論者と弁証法家との間の論争から、後者のリーダーであったアブラム・デボーリンとそのグループにたいする激しい批判へと目まぐるしく転回した“哲学論争”が進行していた⁽¹²⁾。したがって、こうしたイデオロギー情勢の転変が、以下紹介するガイムクにおける論争に大きく影響していたことは論を俟たない。

2. ヴラジスラフ・ラヴドニカスによる“物質文化史”の提唱と受容

ヴラジスラフ・ラヴドニカスはユニークな経歴を有している。彼はレニングラード州東部のチフヴィンに、医療助手の、おそらく裕福ではなかった家庭に生まれ、私立の実科学校に2年間通っただけで、独学で考古学・郷土誌資料の発掘と研究に取り組んだ。その後、1918年にペトログラード大学に入学したものの、十月革命後の内戦のため赤軍に召集され、砲兵（1916年にはミハイロフスク砲術学校を修了していた）として、また政治部員として北西戦線で従軍した。共産党（ボリシェヴィキ）への入党はかなり早かったようで、1919年にはチフヴィン郡委員=兼=チェレポヴェッツ州委員に選ばれている。1921年からチフヴィン技術師範学校に勤務しつつ、地方紙『赤旗』（«Красное знамя»）と郷土誌論文集『チフヴィン地方』（«Тихвинский край»）



図9 ヴラジスラフ・ラヴドニカス

の責任編集者を務めた。

1927年、ガイムクの院生（ソ連では研究機関に大学院が置かれた。院生は有給で、最下層ながら研究スタッフとみなされた）となり、マルの指導の下で研鑽を積んだ。民俗学=人類学博物館（通称、クンストカーメラ—Кунсткамера—）などでの勤務を経て、1934年にガイムクの正規の研究員となり、ガイムクの科学アカデミー・物質文化史研究所への改組ののち、1937年には上級研究員、戦後の1946年から52年までその副所長を務めた。また、1935年から1945年までレニングラード国立大学の教授を兼務した。1946年12月にはソ連邦科学アカデミー通信会員に選出されている⁽¹³⁾。

ラヴドニカスは、1930年、ガイムクの紀要『国立物質文化史アカデミー報知』に長文の論文「マルクス主義的物質文化史のために」を発表した⁽¹⁴⁾。ラヴドニカスは論文の目的について、「この著作で、……わたしは考古学と物質文化史の分野に新しい自己批判を加えたい、つまり、われわれの時代の学術的成果のうち一連の具体的な事例を引き、それらを分析したい。それらにおいては、わたしが思うに、われわれにとって階級的に異質なイデオロギー的・方法論的潮流や志向のさまざまな残存物が、いかなる程度であれ、いかなる形態であれ、意識的に、あるいは無意識に、故意に、あるいは不意に、現出しているのである」⁽¹⁵⁾と述べ、論文の目的をブルジョア考古学の徹底的批判とそのマルクス主義的な刷新に置いている。その際、「古いモノを対象とする考古学の狭さ、不満はソヴィエトの時代になって、“物質文化史”という別の名称をもつことを余儀なくさせた」とする。このことから、彼が言う“物質文化史”がマルクス主義的に再編された考古学に附されるべき新しい名称であり、この論文が「今に至るまで、その対象も、内容も明らかにされることなく、古い内容、古い研究形態が新しい名称のもとで公然と花開いて」⁽¹⁶⁾いるソヴィエト考古学の現状への批判（古い“ブルジョア考古学”の要素が広範に残っているとして）であることがわかる。すなわち、この論文の基本的なテーマは、あくまでソヴィエト考古学の刷新にあった。

行論のなかでは、多くの箇所では、“ブルジョア考古学”の“分類=類型学”の方法が俎上に上げられる。論文は、非文字人口遺物の収集と類型分類から、たとえば、“東方諸民族の保守性”を析出し、“西方諸民族の革新性”を結論するような態度に典型的に見られる、民族的性格、民族精神や民族の心を強調する“ブルジョア考古学”の形而上学的性格、形式主義、フェティシズム、ナショナリスト的観念

論に対する激しい批判に貫かれている⁽¹⁷⁾。論文は(1) 考古学、物質文化史におけるマルクス主義の方法論、(2) 階級的視点からの革命以前のロシアの考古学の概観、(3) 考古学の遺産の今日的残存⁽¹⁸⁾の3つの部分から成っているが、上述のように主要な検討対象は考古学であり、このうち技術史に触れた部分は最初の部分だけで、全体の3分の1程度にすぎない。後述するように、このような、そもそもの技術史に対する副次的な扱いが、次節で扱う論争を、著しく中途半端なものにするのだが、それでもラヴドニカスは技術史の“狭さ”を論い、技術史に取って代わるべきものとして、“物質文化史”を位置づける⁽¹⁹⁾。

刊行の前年の党中央委員会総会による高等工業教育への“マルクス主義的技術史”導入決定(これは同時にこの科目を担当する教員ポストの大幅増加を意味した)を相当に意識し、マルクス『資本論』第1巻第13章注89の、“批判的なテヒノロジーの歴史”の必要性・重要性を強調した有名な章句⁽²⁰⁾を引用しつつも、ラヴドニカスは自身の“物質文化史”の技術史に対する優位性を次のように主張する。

「批判的なテヒノロジーの歴史はいまだ存在していない。このような科学を物質文化史においても創造するというきわめて実践的な課題はその最重要な部分であり、最大限の力を動員して、第一の研究成果とならざるをえないのがテヒノロジーの歴史である。しかしながら、テヒノロジーの歴史は物質文化史を包含するものなのであろうかという疑問が生じる。前者に含まれるものとして生産手段と生産過程の歴史を含めて、生産の社会的技術の歴史を理解しようとする、物質文化、社会の物的世界には、生産手段の範疇には直接は入らないものではあるが、きわめて本質的な残片が残ることになる。上述した生活手段、すなわち、住居、衣服など。こうして取り残されたもの、つまり、後者の範疇の対象物は、まずわかるように、生産手段とは違った論理的性格、認識上の価値を有している。それらは生産力には入らないが、労働の主体として、もっとも重要な生産力である人間の不可欠な実現条件である。装飾、イデオロギー的認識を反映したもの、魔術的な表現、トーテンポールの野獣の人形等々は、単純にテヒノロジーの歴史の観点からだけで検討されえるのであろうか」。⁽²¹⁾

彼はこのように技術史の限界について疑問を提示する。さらに、「あるモノが生まれるためにはある時と場所における社会的諸条件の総体によって実現され

た物質的生産の一定の過程が実現していなければならない。……モノの生産過程を研究しつつ、われわれは常にその社会的な意味を考慮に加えなければならない。そうすれば、^{テフニツィズム}テヒノロジーの歴史は狭い技術(偏重)主義、あるいは単なる生産手段の歴史に陥らず、実際に人々の社会的物質文化の歴史となる」⁽²²⁾とし、「物質文化現象の所与のカテゴリーは広い意味でのテヒノロジーの歴史に全面的に含まれると思われる」と技術史の意義を評価している。しかし、他方で、「生産手段に入らないものが、著しく明瞭に社会発展のプロセスを反映し、体现していることは珍しくない」として、「労働手段とすべての生産技術は複合体のもっとも本質的な部分として、一般的な要求に従って、生産力から社会分析へと進む。……[生産力は一引用者]まず研究されなければならない。[しかし、一引用者]それと協調するかたちで、物質文化の残りのすべての要素も研究される」⁽²³⁾と結論付けている。

ラヴドニカスのこの論文は、党中央が工業教育への導入を図っていた技術史に“物質文化史”を対置するマニフェストとなった。

1932年2月1日、ガイムク幹部会で確認され、公布されることになった「国立物質文化史アカデミー規約」では、第2条で、「アカデミーの科学研究活動のなかには、もっとも初期の発展段階から、ソ連の社会主義的生産を含む現代にいたるまでの、様々な発展段階にある社会経済構成体の技術と物的生産の社会的諸形態の全面的な研究が含まれる」とされた。また、第14条では、「アカデミーは、弁証法的唯物論と科学の諸課題に関するマルクス=レーニンの諸概念を基礎とする物的生産の歴史の研究をもみずからの基本的な研究課題としている」⁽²⁴⁾とされた。

さらに、同年5月7～11日に開催された全ロシア考古学=民族学会議は、まだブルジョア考古学(分類学、類型論など)の影響が強く、そこから脱するためのさまざまな試みも成功していない混沌状態にあるソヴィエト考古学⁽²⁵⁾の現状を打破すべく、「マルクス=レーニン主義的方法の科学的歴史研究への適用と先述の諸条件[資本主義の全般的危機、ファシズムの勃興、ソ連内部での階級闘争の継続・激化のなかでの無階級社会を目指すための科学研究のラジカルな再編一引用者]の出現は歴史科学のブルジョア的分類の再検討を要請している」⁽²⁶⁾、「ブルジョア的な科学の分類にマルクス=レーニン主義的分類を対置しなければならない。……もっとも重要な歴史科学の分科のひとつが物質的生産の歴史として理解される物質文化史である」⁽²⁷⁾として、従来の考古学に代わる新しい学問

領域“物質文化史”を提唱した。その際、「ブルジョアの科学の対象である考古学的記念物は、人類社会の歴史研究の源泉のひとつにすぎず、文字に書かれた歴史資料、言語資料、現在生きている諸民族の社会生活に対する直接の観察の資料と並んで、ある種の歴史研究の源泉のひとつ（記念物）である」⁽²⁸⁾にすぎないとして、“物質文化史”を考古学に比べてより包括的な性格をもつ歴史科学と位置づけた。そのうえで、それは、「物的生産の歴史の独自の対象は、それが生産力と生産関係の総体を包含していないがゆえに課題が狭くなってしまった技術史の対象とは異なっており、[また]それぞれの時代の社会の物質的生産の発展の研究を自身の社会的課題としている点で政治経済学とも違っている」⁽²⁹⁾とする。考古学=民族学会議は、結論として、“物質文化史”は、「物質的生産の発展を研究するものであるが、『社会的人間の生産器官の形成史を研究し』、そうして『人間の自然に対する能動的な態度、その生活の直接的な生産過程を明らかにする』（マルクス『資本論』第1巻第13章）技術史とは違っている。技術史は物質文化史の一部を構成するにすぎず、物質文化史の内容は生産力と生産関係をすべてにわたって包含する」⁽³⁰⁾として、“物質文化史”の技術史（および政治経済学）に対する差異・優位性を確認したのである。

同時期、高名な考古学者で、ガイムクに所属していたマリア・チーホノヴァは「ガイムクは技術史の諸問題に関する膨大な考古学的資料、文書資料を所有しており、完全に当然、かつ合法的に、物質文化史の一部としての技術史を受け入れる指導的な立場に立ち、その科学研究活動計画と雑誌のページで、技術史の方法論的問題についても、個々の分野の部分的な問題についても、すべての社会的・歴史的過程全体にわたって、また個々の社会的経済構成体の内部についても大きな関心を払っている」⁽³¹⁾とガイムクの研究蓄積を誇った。

こうした考古学者の“熱狂”とは別に、技術史家ダニレフスキーはどのように“物質文化史”を受容したのであろうか。彼の「資本主義的社会構成体、および社会主義的社会構成体の物質文化史研究のために」と題する論文⁽³²⁾には彼の“物質文化史”に対する理解が窺える。その内容は次の彼自身の記述に見ることができる。

「西欧では……資本主義期の施設をそこ[物質文化 一引用者]に含ませようとする大きな仕事がなされた。もっとも発達した資本主義国では一連の大きな技術博物館が創設され、技術史の諸学派がすべて登場した(マッコス、ドイツ技術者協会、ダルムシュタット、リップマンなど)。ロシアでも、いく

つか技術史研究がなされたが、愛好家の所業としての性格を反映して、それほど本格的な意義を持つてはいなかった(……)。記念施設も遠い過去の時代のものしかない。……革命前ロシアにおける物質文化史研究の基本的な対象は、いわば、資本主義社会の階級的関心に左右された特殊な形式で研究される考古学的な記念物か、エスノグラフィックな対象だけであった」⁽³³⁾。

のちに愛国読物の作家に転身するダニレフスキー⁽³⁴⁾にとって、世界大恐慌の影響で、西欧諸国が「歴史の疾駆を一時止めている」⁽³⁵⁾ときこそ、ソ連の世界最先進の技術大国への発展が期待されるのであり、「わがソ連の物質文化の成長は不可避免的に物質文化史研究、および物質文化史の一部となった資本主義物質文化と、今日ようやく生み出されつつある社会主義物質文化に関する学術的事業に特別の注意を振り向ける必要を明るみに出した」⁽³⁶⁾とする。しかし、この事業は大幅に立ち遅れている。それは、ガイムクには資本主義物質文化と社会主義物質文化の研究を扱うセクターがなかったからであった。このことについて、「1932年11月1日付けでようやく資本主義セクターが設置された。[しかし、]たとえば、高等工業教育にマルクス主義的技術史を導入することに関する全連邦共産党(ポリシェヴィキ)の[1929年]11月総会布告の実施がまったく不十分なマルクス主義的技術史の場合にも[見られる]きわめて重苦しい状況が[あることは]事実である。資本主義的社会構成体と社会主義的社会構成体とを包含する物質文化に責任をもつ部門における立ち遅れはこの部門への最大限の注意、要員と研究手段を強化しつつ、この部門において広範な研究活動を展開するための緊張した闘いを求めている。……十月革命15周年は物質文化史そのものにおける資本主義的、および社会主義的社會構成体に関心を振り向ける契機とならなければならぬ」⁽³⁷⁾と指摘している。

以上から分かるように、彼にとっては、“物質文化史”と技術史との間の概念的相違はほぼなく、前者は技術的記念物、いわば産業遺産を包含していると理解されるくらいである。後段になるとさらに区別は曖昧になり、もはや“物質文化”の語は、それなしでも文意が通じる、単なる装飾に化しているとも言えなくもない。“物質文化”の概念は、そもそも多義的で、受け止める側に自己の関心に沿った、柔軟な解釈を許容する曖昧さを伴っていたとも言えよう。

3. イヴァン・スミルノフのラヴドニカス批判



図10 イヴァン・スミルノフ

このラヴドニカスの“物質文化史”論に猛然と批判の雄叫びをあげたのが、ガイムクの院生で、当時まだ23歳だったイヴァン・スミルノフである。彼はイヴァノヴォ総合技術学校農芸学部、さらにヴィヤトカ師範学校を卒業後、1930年から1934年にかけてガイムクの院生となった。1936年から1941年までレニングラード国立大学の准教授（ドツェントДоцент）、1938年からその死まで、科学アカデミー・歴史学研究所の研究員として勤務し、1948年から1956年までレニングラード国立大学の教授を兼任した。1936

年、トロツキー派との関連が疑われ、一時全連邦共産主義青年同盟（コムソモール）から除名されるが、すぐに復権を果たし、1940年には共産党（ボリシェヴィキ）に入党を許されている。学位論文となった「ボロトニコフ蜂起」に関する研究でスターリン賞を授与されている。56歳で亡くなった⁽³⁸⁾。

彼は、ラヴドニカス批判を展開する以前に史的唯物論の最重要概念＝「経済的社会構成体」概念の“誤った理解”を糾す論文を執筆している。そこで彼は、「経済的社会構成体」を階級対立に主眼を置いて、原始共同体社会、および共産主義社会では「経済的社会構成体」概念は成立しないとするガイムク内部の“謬論”に反対する。レーニンを援用しつつ、具体的な「経済的社会構成体」は階級社会か無階級社会かに応じて変わってくるが、それは「階級、階級社会の概念なしでも充分具体的である」として、ラヴドニカスらの狭い史的唯物論理解を批判している⁽³⁹⁾。このように、当時、彼はマルクス主義に立つ歴史家として「経済的社会構成体」概念の明確化に腐心しており、その立場からラヴドニカス批判を展開することになる。

スミルノフはまず、ラヴドニカスの“物質文化史”概念定立の粗雑さを以下のように論う。

「ラヴドニカスは物質文化を人間の社会的労働の成果、物質化した人間労働の総体と定義したが、そこには何も新しいものはなく、ブルジョア考古学

……の主張をより一般化し、マルクス主義のタームを用いているにすぎない。ラヴドニカスは“物質文化”に雑多な社会構造の諸現象を折衷的に入れ込んでいる。彼は、物質文化史のカテゴリーを正当化し、客観的にはマルクス主義社会学の基礎カテゴリー、すなわち、経済的社会構成体のカテゴリーと対立させている。……ラヴドニカスにあっては、経済的社会構成体のカテゴリーは空虚、内容のない形式、“社会の物質世界”が内在的に発展する雰囲気⁽⁴⁰⁾に転化している」。

ここで彼もマルクス『資本論』第1巻第13章注89を引用し、ラヴドニカスの“物質文化史”とマルクスの「批判的なテクノロジー史」が課題において共通していることを認めつつも、「物質文化史は上部構造の諸現象も包含している」⁽⁴¹⁾……「ラヴドニカスは掘り出されるもの一切を“物質文化”に入れ込んでいる。……イデオロギー現象をもモノとして研究し、モノに転化させてしまっている」⁽⁴²⁾とラヴドニカスの解釈の恣意性、転倒性を指摘する。

スミルノフはラヴドニカスとその“物質文化史”導出に用いた“複合的方法”を批判的に分析し、「彼の議論は……典型的な機械論者の見方」⁽⁴³⁾と、少し以前に結着していた機械論者と弁証法派との間の“哲学論争”における敗者のレッテルを論争相手に貼り付けて激しく非難する。彼は「ラヴドニカスの複合的方法の本質は、研究に供される歴史資料のすべてを文化=歴史複合体、つまり“物質文化”複合体に区分し、しかるのちに社会学的に研究する、ということにある」⁽⁴⁴⁾と捉えて、いくつか疑問点を挙げる。まず、“物質文化”は文化複合体に分解できるか、ということ、続いて、ラヴドニカスの言う“文化=歴史複合体”と「経済的社会構成体」との関係、第3に、ラヴドニカスが“社会学的方法”という語で何を言おうとしているのか、ということ、最後に、彼の“複合的方法”と弁証法的唯物論との関係についてである。ラヴドニカスも「マルクス=レーニン主義における歴史研究の単位は経済的社会構成体である」と述べているにもかかわらず、「経済的社会構成体を“文化複合体”と混同し、[少なくとも一引用者]矛盾するとは考えていない」⁽⁴⁵⁾。それゆえ、「ラヴドニカスの“文化複合体”とは、特定の領域、特定の時期[……]に属するモノの純粋に形式的な徴候(層位学、類型学)の基礎の上での偶然の結び付きにすぎない」⁽⁴⁶⁾として、次のようにその限界を指摘する。

「われわれはラヴドニカスがブルジョア考古学の形式的・観念論的方法を用

いて、文化複合体を“創造”した過程を検討し、告発したが、彼はいまや物的文化複合体の社会学的研究に取り組んでいる。……ブルジョア考古学者は類型学を、ブルジョア社会学者は歴史比較研究を好む。ラヴドニカスは“文化的遺物”の内在的解釈[をおこなっていると言うが一引用者]、文化的複合体は“モノの機械的連結”にすぎず、社会的法則性を明らかにできるものではない⁽⁴⁷⁾。

こうして、スミルノフは「マルクス主義的物質文化史は内容不分明のまま、要素の真理にとどまっている」⁽⁴⁸⁾と結論付け、それに代わるものとして“マルクス主義的技術史”創造を提唱する。そもそも「ラヴドニカスの“物質文化”には生産力や技術も含まれるが、こちらこそが社会の基礎である」⁽⁴⁹⁾として、次のように述べる。

「ラヴドニカスにあっては、社会や文化についてのブルジョア科学の概念が基礎にある。マルクス主義の基本概念である経済的社会構成体カテゴリーと矛盾している。“マルクス主義的物質文化史”創造の試みを拒絶すべきではないか。ラヴドニカスはブルジョア考古学とマルクス主義という結びつかないものを結合しようとした。……折衷にしかならない。……“マルクス主義的物質文化史”の創造から手を引くとすれば、[どのように一引用者]社会科学体系のなかで形成されつつある“断裂”を埋めなければならなくなるであろうか。マルクス主義の歴史家は、“物質文化史”ではなく、マルクス主義的技術史の創造に取り組まなければならない。……“技術をわがものとせよ”というスローガンに照らして、実践的意義もある」⁽⁵⁰⁾。

しかし、ラヴドニカスとスミルノフとの論争は公正に行われたわけではなかった。甚だ異例の扱いと言うべきであるが、スミルノフの論文には「編集部注」が附され、紀要編集者がスミルノフ論文を歓迎しない態度を明らかにしていた。編集部は、その際、はじめたばかりのデボーリン批判に便乗して、「スミルノフのラヴドニカス批判には左翼日和見主義的偏向があり、“メンシェヴィキ化する観念論”を共有している」⁽⁵¹⁾と根拠の怪しいレッテルを貼った。これは先鋭化しつつあったデボーリン派に対する批判に便乗した論難であった。この論文の刊行とほぼ同時期(1932年5月)に、全ロシア考古学=民族学会議で、従来の考古学に代わる新しい学問領域“物質文化史”が提唱され、権力により重視されつつあ

た技術史に“物質文化史”を対置しようとしていた考古学者たちは異論派に“デボーリン派”とのレッテル貼りで対抗したのである。

さらに、スミルノフの議論を正確に捉えているとは言い難い章句が並び、あまつさえスミルノフがラヴドニカス批判に用いたフレーズを逆にスミルノフ批判に宛てているように思える箇所もあった。編集部は、スミルノフが「文化複合体はある機械的連結の具体的な現れである」⁽⁵²⁾と述べた箇所を取り上げて、彼が「物的記念物（遺物）の総体を経済的社会構成体と同一視している。……研究対象（社会）と研究手段（物的記念物）とを区別していない」⁽⁵³⁾とまるで攻守を真逆にしたような批判を展開する。その際、編集部は「言葉の古生物学」は言語学的資料を過去の社会の歴史的典拠のひとつとして利用することを受け入れる仕方のひとつである⁽⁵⁴⁾とマルの学説を擁護しつつ、「スミルノフはこれを否定する。言語学的資料にもとづく社会発展の研究の諸問題を言語学的現象の解釈と混同している」⁽⁵⁵⁾としている。結論として、「スミルノフは物質文化史のマルクス主義的概念を拒否し、技術史の概念に置き換えようとしている」⁽⁵⁶⁾とする。そして、「技術史のような分野別の歴史科学は必要で有益である。マルクス主義者が技術史研究に特別な注意を払わなければならない点ではスミルノフは完全に正しい」としつつも、「スミルノフの意見と違い、技術史は“社会科学の体系のなかで形成されてきた断裂”を埋めるものではない。物質的生産は物質文化史の一分野である」⁽⁵⁷⁾と技術史に対する“物質文化史”の優位を説く。ガイムク指導部（編集部）は“物質文化史”構想を前提としていたのである。しかし、その“物質文化史”構想は十分な展開を見せてはいなかった。そのため、異論にたいして、時流に乗ったレッテル貼りと片言隻語により対処しようとしたのであろう。

4. 袋小路に陥る“物質文化史”

結論から言えば、ラヴドニカスとスミルノフとの論争は発展させられることはなかった。スミルノフの批判は、デボーリン派批判の声にかき消され、ラヴドニカス流の“物質文化史”構想はその限りで生き残ったが、やがて、“マルクス主義的技術史”の流れがガイムクを迂回することが確実視されるようになると、そもそも十分な準備のなかったこの構想は一種の自壊作用により消滅してゆく。

1933年、ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国教育人民委員部（連邦には教育関係の省庁は置かれなかった）参事会（省庁の最高幹部会議）は1933年1月4

日付で次官モイセイ・エプシュテインの署名を添えて布告を発し、ガイムクの活動全般について厳しい批判を展開した。そのなかでは、「アカデミー [ガイムクのこと — 引用者] は、いくつかの最重要な対象、さらに、一連の資本主義以前の社会の歴史に関する大きな、基幹的仕事に集中する代わりに、その研究活動は著しく多数の細分化されたテーマに分散されている。……歴史的諸問題の積極的な検討には不十分にか注意が向けられていない。」⁽⁵⁸⁾と述べられていた。

この批判に対してガイムクがどのように反応したのであろうか。ガイムクの後継機関＝ロシア科学アカデミー・物質文化史研究所の学術文書館には、管見の限り、この批判に直接言及した文書記録類は見当たらない（しばしば責任者への批判・処分を伴う、公式の路線転換表明は避けられのかもしれない）。しかし、本章の課題としている、“技術史”に替わるものとしての“物質文化史”の構想については、その後発展させられることはなかったことは事実である。

同年、ガイムクの精神的指導者マルは、“言語と物質文化史を結びつけるのを急いではいけない”という慎重さを求める声（誰のものかは明示されていない）に抗して、長大な論文「物質文化史は袋小路に陥っているのか？」⁽⁵⁹⁾で応えた。マルは翌1934年12月20日に亡くなるため、この論文は彼の最後のまとまった仕事となった。ガイムクの定期刊行物まるまる1巻分を占める149頁に及ぶこの大論文は、口述筆記によるものなのか、いたるところで文法的な破格が見られ、一文一文が異様に長く、たいへん読みにくい。彼は「社会科学のリストには物質文化史がない。……リストには民族学も考古学もない。それらは、歴史科学ではなく、副次的な史料学としてのみ認識されている」⁽⁶⁰⁾と述べ、“物質文化史”が当時のソ連で未だにひとつの学問分野として認められていない現状を憂いながらも、紙数の多くを多数の事例による彼独自の言語発達観の例証に費やして、“物質文化史”に関する言及はごく少ない。そのなかで、彼にとっての“物質文化史”研究の意義を端的に示しているのは、以下の言及であろう。

「思惟は物質文化と結びついている。思惟とその技術、それゆえ、言語とその技術、および物質文化とその技術に関する諸問題は絶えずお互いに結びついており、歴史を見ると、三位一体をなしている。それぞれ、およびそれぞれの技術の発展の歴史的段階における言語、思惟、物質文化に関する問題はひとつの問題であり、研究者はみずからの研究にあたって正しい軌道のために高みにたち、思惟の高みからのみ、他を指導するのである。しかしな

がら、この思惟はそれ自身、ひとつの抽象として孤立したものではなく、言語とその技術に表されたもの、物質文化史の技術とともに明らかにされたものであるが、にもかかわらず、思惟そのものは、歴史が時間の深淵からわれわれを、獲得された高み、そこから、われわれが到達した新しい水平線ながら、遠くて見失われがちな展望がある高みへと導くのである」⁽⁶¹⁾。

もちろん、彼はマルクス主義の流儀に従って、「包括できる範囲についていえどくわずかだが、結果として、物的基盤における根本的な進歩に続いて、言語と思惟における進歩が起こるという動きの過程の複雑さについての理解を与えることができる」⁽⁶²⁾と、(社会的)物的生産の言語や思惟に対する規定性を承認してはいる。しかし、上記引用が物語るように、彼にとっては、あくまで言語と思惟、とりわけ後者の発達史、その発達様式こそが彼の主要な学術的関心であり、“物質文化史”はその解明の前提条件、いわば従属的要素に過ぎず、独自の学術的対象としての定立、方法論の確立は主たる関心の外にあったと言わざるをえない。“物質文化史”は、この場合、マル独自の言語理論、それにもとづく独特の歴史観、そのマルクス主義的“再解釈”(ないし、“粉飾”)の結果生み出された概念であり、工業教育機関への“マルクス主義的技術史”導入を契機としたラヴドニカスらの野心の支柱とはなりえても、それ以上のものではなかった。彼の“画期的な”論文から2年を経てもその内容と方法に深化は見られず、ガイムクはこの分野から静かに撤退していった。

“物質文化史”が陥ることになったもうひとつの“袋小路”は、ガイムクによる研究者養成の不首尾である。A.スヴェトロフは「ソ連で資本主義以前の技術史の諸問題を研究する大きな可能性をもった研究機関などほかのどこにあるであろうか」⁽⁶³⁾とガイムクの豊かな考古学資料、文献資料という研究条件を誇りながらも、「物質文化史の歴史家=院生の方法論面での養成を強化することに注意を払わなければならない。というのは、今年、われわれのところでは、方法論的原理がほとんど挫折しているからである。技術史に関わる院生については問題がするどく問われている」⁽⁶⁴⁾とガイムクにおける若手研究者養成の方法論の欠如を指摘した。それと関連して、「わが国の院生は資本主義下の技術史に特化して」おり、「物質文化史アカデミーの研究者は、一見すると、わがアカデミー[ガイムクのこと—引用者]内部で仕事をすることを望まず、科学アカデミーの諸機関で技術史の諸問題に関する研究をおこなっている」⁽⁶⁵⁾という若手の志向を取り上げ

ている。工業教育機関への“マルクス主義的技術史”の導入は、院生や若手研究者、それに若手党イデオログに新たな教育職を提供するものであったが、強みが無文字社会や古代にあるガイムクは、“マルクス主義的技術史”，ないしその代替物に求められるものに答えられなかったと見るべきであろう。

そもそもラヴドニカスらが従来からの考古学の守備範囲以外では“物質文化史”の具体的な研究方法を示しえなかったこと、論争を通じてその学術的な内容と方法が具体的に深められなかったこと、デボーリン派の凋落を以て“哲学論争”が目まぐるしく“終結”したこと、そして、強烈な指導力を発揮したマルが亡くなったことにより、“物質文化史”の構想はあとには続かなかった。ガイムクの紀要掲載論文一覧を見ても、“物質文化史”を扱ったものはその後現れていない。ガイムクはさっさと技術史や近現代史から手を引くことになる。

チーホノヴァはその近現代史、技術史からの慌ただしい撤退ぶりを淡々と書いている。

「資本主義的構成体セクターは1932年にガイムクに設置されたばかりであるが、広範な活動計画、主要には技術史の諸問題に関する計画を決めていたにもかかわらず、活動を展開することに成功せず、現在では廃止されている。……活動と大学院生養成は縮小された」⁽⁶⁶⁾。

その後ガイムクは次第に以前の考古学研究機関としての性格を取り戻してゆき、多くの所員を失った「大テロル」の途上、1937年に独立したアカデミーから、科学アカデミー傘下の研究所に再編され、1943年には「レニングラード900日の封鎖」を避けてモスクワに本拠を移し、1959年には考古学研究所に改名する。1991年、そのレニングラード支部が独立し、ふたたび物質文化史研究所を名乗り、今日に至っている⁽⁶⁷⁾。

注

- (1) Институт истории материальной культуры Российской Академии наук のホーム・ページ (<http://www.archeo.ru/> 2024年4月21日閲覧)。
- (2) Архив Российской Академии наук (АРАН), Фонд 154, Опись 2а, Дело 10а. лл. 1-13: 彼の経歴などについては、本書補論 [2] 参照。
- (3) О.Д. Симоненко. «История техники и технических наук: Философско-методологический анализ эволюции дисциплины». Москва: Институт истории естествознания и техники

РАН. 2005. С. 16-36. この著書の当該部分については、邦訳がある（O. Д. シモネンコ／市川浩訳『技術史と工学史—学術発展の哲学的・方法論的分析—』、ロシア科学アカデミー・エス・イー・ヴァヴィーロフ名称自然科学史=技術史研究所、2005年、から「まえがき」と第1章「技術史の歴史」、日本科学史学会『技術史』第8号、2011年、23～45頁）。

- (4) ソヴェート同盟国立物質文化史アカデミー編纂／早川次郎訳『考古学概論——N.Y. マル氏の四十五周年記念論叢に據る』（白揚社、1935年）；ソヴェート同盟国立物質文化史アカデミー編／橋本弘毅・早川次郎訳『唯物史観日本歴史』（白揚社、1936年）など。前者は『資本主義以前の社会構成体の歴史から—ニコライ・マル学術活動四五周年記念論集—』（ГАИМК. «Из истории докапиталистических формаций: Сборник статей к сорока-пятилетию научной деятельности Н. Я. Марра»). Москва-Ленинград: Государственное социально-экономическое издательство, 1933) から訳者早川が計5本の論稿を選び取り、『ソヴィエト大百科事典』（«Большая Советская Энциклопедия»）所載の「ヤペテ [ヤフェット] 言語学」の項（執筆者は、マルの最良の後継者イヴァン・メシチャニーノフ）の訳を加えて、「我々の歴史研究においてつねに方法論を、ソヴェート同盟等々における先学諸家が世界史の研究に採用したもから採」（同書、訳者序、2頁）り入れるために1冊の論集として編集したものである。田中克彦はメシチャニーノフについて、「マルより19歳若く、ハイデルベルクでヴィンデルバントのもとでも学んだことがあり、奔放なマルの発想に、冷静なやり方で事実上の肉付けを行った」（田中克彦『「スターリン言語学」精読』岩波現代文庫、2000年、125頁）としている。その他の原著者には、フォードル・キパリーソフ、セルゲイ・ブイコフスキー、ミハイル・ジャーコフ、ヴェーラ・ゴリムステン、パーヴェル・リュコフ、ゲオルギー・ソスノフスキー、アレクサンドル・ミレル、タチヤーナ・パセク、エヴゲニー・クリチェフスキーがいた。このうち、キパリーソフ、ジャーコフとブイコフスキーは1936年、「大テロル」の最中にそれぞれ短い生涯を終えている（当年にとって43歳と40歳）。ソスノフスキーは1941年に42歳で、リュコフとクリチェフスキーは1942年、それぞれ48歳と32歳で、「レニングラード900日の包囲」のなかで亡くなっている。なお、『唯物史観日本歴史』には、戦前戦後を通じてソ連における日本研究の第一人者であったニコライ・コンラード、早世した、才能ある日本研究者オレグ・プレトネル、ソ連を代表する東洋学者のひとり、エヴゲニー・ジューコフらの原稿（および遺稿）が集められていた。
- (5) たとえば、田中聡「転機としての『日本歴史教程』——早川次郎のアジア的共同体論」、磯前順一・ハリイ・D. ハルトゥーニアン編『マルクス主義という経験——1930～40年代日本の歴史学』（青木書店、2008年、61～90頁）参照。
- (6) 村山七郎「スターリン後のソ連言語学の変容」、『ソ連東欧学会年報』1972年、

第1号, 63頁。「20世紀言語学の原点はソシュール」という「ソシュール礼賛は言語学界の常識である」(下宮忠雄「訳者解説」, エウジェニオ・コセリウ/下宮忠雄訳『一般言語学』第2版, 三修社, 2003年, v頁)が, フェルディナン・ド・ソシュールの構造主義言語学が影響力を発揮するのはほぼ20世紀に入ってからである。それまでの言語学は「歴史主義」(Historicismo)にもとづく言語史研究(歴史言語学/比較言語学)に集中していた(コセリウ, 前掲『一般言語学』, 7頁)。ヨーロッパ諸語の歴史を, 「インド=ヨーロッパ祖語」の分化過程と捉える印欧語比較言語学は言語学全般の主流となっていた。マルによれば, 口腔はもともと食物咀嚼の器官であり, それを訓練で言語音声の発生器官にした(亀井秀雄『日本人の「翻訳」——言語資本の形成をめぐる』岩波書店, 2014年, viii頁)ために, SAL, RER, JON, ROSHの4要素が世界の言語のあらゆる単語の基本をなしているとする。この「神がかった主張」(村山)は, 『旧約聖書』に登場するノアの3人の息子(セム, ハム, ヤフェット)の末子の名前に因んで「ヤフェット学説」と呼ばれた(村山七郎「スターリン後のソ連言語学の変容」, 64頁)。

- (7) И. В. Сталин. “Относительно марксизма в языкознании.” «Правда». 20 июня 1950 (I. V. スターリン/スターリン全集刊行会訳・田中克彦補訳「マルクス主義と言語学の諸問題」, 田中克彦『「スターリン言語学」精読』所収, 183~230頁)。スターリンはこの中で, 言語は“上部構造”ではなく, “全人民的”(общенародный)であること(同書, 前掲邦訳, 184~200頁)を示し, 諸言語の接触によって“新言語”が生まれることなどありえず, 「それらの言語の一つが, 通常, 勝利者となり, ……もう一つの言語は徐々にその特質をうしない, 徐々に死滅していく」(同, 214頁)としてマル言語学を厳しく批判した。村山は「スターリンの説には純学術的にみて独創性はなかったとしても, 間違いはなく, 言語学的常識から外れてはいなかった」(村山七郎「スターリン後のソ連言語学の変容」, 70頁)と評価している。
- (8) 村山, 「スターリン後のソ連言語学の変容」, 71頁。
- (9) ルネ・ザパタ/原田佳彦訳『文庫クセジュ』ロシア・ソヴィエト哲学史』白水社, 1997年, 136頁。
- (10) 田中克彦, 前掲書, 166頁。なお, マルがマルクス主義を学習し, すでにほぼ固め終わっていた自己の学説との接合に取り組みはじめたのは, ようやく1928年になってから, とされる(1930年, 共産党に入党。https://ru.wikipedia.org/wiki/Март, Николай Яковлевич 2024年4月21日閲覧)。
- (11) ダニレフスキーは, マルが「階級社会における思考は階級的なものとなりうることを強調しつつ, 言語が単なる音ではなく, “思惟”であると述べた」ことを手がかりとして(ダニレフスキーはマルの名著『言語と現代(Н. Я. Марр. «Язык и современность». Ленинград: СОЦЭКГИЗ, 1932. С. 8)』を引用している), ロシア語の単語“тяга”^{チャーガ}(原義は「引くこと」)の科学史における意味の変遷

を跡付けてみせた。ローマーノ=アメディオ・アボガドロが1812年、ガス流に“тяга”（に相当するイタリア語）を適用したこと、また、ヴラジミール・グルム=グルジマーイロの研究から、それがブレーズ・パスカルやミハイル・ロモノーソフを経て、流体力学のコンセプトになっていったことを示した。こうして、かなり我流ながら、“言葉の古生物学”を実践した。そして、この視角から、「反射炉のエピソードは、物質文化史と言語学説が新しい社会主義的技術の創造そのものに直接、積極的に関与することができるし、しなければならないことの明瞭な証拠である。このエピソードは16～17世紀、資本主義的生産様式確立期において、個々の研究者の思考が……より多様で、深化したことを明瞭に明らかにしている」（*В. В. Данилевский. “К вопросу о взаимосвязи учения об языке Н. Я. Марра и путей развития социалистической техники.” «Проблемы истории материальной культуры»*. Вып. 5-6 (1933). С. 74）との結論に飛躍している。

- (12) “文化革命”と“哲学論争”については、藤岡毅「第1章 ソヴィエトにおける『マルクス主義』公式化の始まり——1920年—1930年代はじめの哲学・科学論争」（金山浩司編『ソヴィエト科学の裏庭——イデオロギーをめぐる葛藤と共存』水声社、2023年、29～82頁）を参照されたい。
- (13) “Предисловие” к Фонду No. 1049 (Владислав Иосифович Равдоникас) / Санкт-Петербургский филиал АРАН. Ф. 1049, Оп. 1, No. 1049/ лл. 1-2.
- (14) *В. И. Равдоникас. “За марксистскую историю материальной культуры.” «Известия Государственной Академии истории материальной культуры»*. Том VII, Выпуск III-IV, Ленинград. 1930. С. 5-94.
- (15) Там же, С. 13.
- (16) Там же. なお、ラヴドニカスによれば、“物質文化史”の対象には、古いモノのみならず、次のようなものも加えられる。すなわち、「物質文化の残存物以外にわれわれには伝わっていない古代社会にあった同時代のもの、言語、民話、さまざまなかたちの振る舞い方、無音の、後続の時代の積み重なりにはしばしば覆われた、詳細な分析によってのみ到達される名残など」（*Там же*, С. 20）である。
- (17) Там же, С. 25- 26.
- (18) Там же, С. 12.
- (19) Там же, С. 21.
- (20) カール・マルクス／日本共産党中央委員会社会科学研究所監修『新版 資本論』第1巻第3分冊、新日本出版社、2020年、654～655頁。ガイムクではじめてマルクスのこの注89における“批判的なテヒノロジーの歴史”と“物質文化史”の近似性を指摘したのは、ラヴドニカスではなく、ガイムクに所属していた文献学者=考古学者のキパリーソフであったと考えられる。ラヴドニカスは「F.V. キパリーソフは……共産主義アカデミー・レニングラード支部において1930年3月26日に発表した『物質文化史、その対象と課題』と題する報告のな

かで、物質文化史とマルクスの“テクノロジーの批判的な歴史”との近似性を指摘した」(Равдоникас. Указ. статья в примечании 14, С. 15)と述べているが、同時に「キパリソフは物質文化を生産様式と同一視し、『物質文化史の概念には技術史のみならず、具体的な歴史的なモノの経済の研究も含まれる』として、物質文化史を政治経済学と経営形態史の既存の部分と併せてしまう」(Там же, С. 15)と、その立論の“不正確さ”も指摘している。キパリソフが歴史考証の素材となるモノをかなり広く捉えていたことは、彼の論稿の邦訳からもうかがえる。彼は「事物の労働の媒介性は基本的且つ決定的であるが、尚お歴史的な事物にとって唯一可能な規程(ママ)ではない。その絶対に普遍的な規程ではない。その性質に対しても使用価値に対しても我々は特徴的な保留をなさねばならない。人間の労働行為の諸結果は使用価値、その生産過程に時代を同じくする人間にとっての福祉たる有用生産物ばかりではなく、生産上の屑物や人間にとって無用な生産上の廃物 一勿論現代人にとっても使用価値ではない— もそうである」(F. V. キパリソフ／早川次郎訳「事物—歴史的資料」, ソヴェート同盟国立物質文化史アカデミー編『考古学概論』所収, 14頁)と述べ、「屑物」まで「モノ」に含めている。ここでは、「第一にこれらの遺物は出来損ねであるにしても、労働行為の遺物である限り、恐らく後に至って個人的もしくは生産上の消費に入った正常の生産物より少ない程度にはあろうとも、当該社会の労働過程の研究と逆行的再建のための材料である。第二に、これらの遺物は往々最も多様な部分的結論と歴史的過程と事件の事実的諸モメントの設定の可能性をあたえる」(『考古学概論』, 16~17頁)とされていた。

- (21) Равдоникас. Указ. статья в примечании 14. С. 18.
- (22) Там же, С. 19.
- (23) Там же, С. 28-29.
- (24) Рукописный Отдел Научного архива Институт истории материальной культуры Российской Академии наук, Фонд 2, Опись 1, Дело 2 (1932 г.). лл. 15-17.
- (25) Хроника: Резолюция Всероссийской археолого-этнографического совещания 7-11 мая 1932 года (Резолюция по докладу С. Н. Быковского и Н. М. Маторина о б археологии и этнографии). «Сообщение Государственной Академии истории материальной культуры». No. 5-6, 1932. С. 91.
- (26) Там же, С. 90.
- (27) Там же, С. 90.
- (28) Там же, С. 90.
- (29) Там же, С. 90.
- (30) Хроника: Резолюция Всероссийской археолого-этнографического совещания 7-11 мая 1932 года (Резолюция по докладу Ф. В. Кипарисова об основных положениях плана научно-исследовательской работы по истории материальной культуры во

- вторую пятилетку). «Сообщение Государственной Академии истории материальной культуры». No. 5-6, 1932. С. 94.
- (31) М. А. Тиханова. “Хроника: История техники в научных учреждениях Ленинграда.” «Архив истории науки и техники». Вып. II (1933). С. 337.
- (32) В. В. Данилевский. “За изучение истории материальной культуры-капиталистической и социалистической формаций.” «Сообщения Государственной Академии истории материальной культуры». Вып. 9-10 (1932). С. 52-55.
- (33) Там же, С. 53. なお、「マッチョス」とは、技術史のパイオニアのひとりとして広く知られていたコンラート・マッチョス, 「ダルムシュテッター」とは、化学者で科学史家のルートヴィヒ・ダルムシュテッター, 「エンゲリマイエル」とは、帝政期からの技術史家=技術思想家で、革命後もソ連で教育研究に当たったピョートル・エンゲリマイエルのことと思われる。「リップマン」についてはわからなかった。
- (34) この点については、В. Л. Гвоздецкий. “Ученый и время: К 100-летию со дня рождения В. В. Данилевского.” «Вопросы истории естествознания и техники». 2000. No. 1. С. 112-125: В. Л. Гвоздецкий / 市川浩訳「学者と時代——ワエー・ヴェー В. В. Данилевский 生誕 100 周年に寄せて」日本科学史学会技術史分科会『技術史』第 2 号, 2002 年, 30~45 頁, 参照。この論文でもダニレフスキーは、「戦前ロシア工業の他国に対する依存は驚くべき程度に達していた。……十月革命は作業場で、工場で、帝政ロシアの、ドイツ、アメリカ、イギリス、ベルギー、スイスその他の発達した資本主義諸国の技術に起因する遅れた技術に出会った (Данилевский. Указ. статья, а примечании 34. С. 53)」と述べ、祖国の技術の後進性を嘆き、その克服をソヴィエト“社会主義”に託そうする姿勢を見せている。
- (35) Данилевский. Указ. статья, в примечании 34. С. 54.
- (36) Там же, С. 55.
- (37) Там же,
- (38) https://ru.wikipedia.org/wiki/Смирнов,_Иван_Иванович 2024 年 4 月 21 日閲覧). なお、ポルトニコフ蜂起とは、1606~07 年, イヴァン・ポルトニコフに率いられ、ロシア中央部と南部一帯に広がった大規模な農民反乱をいう。
- (39) И. И. Смирнов. “Против попытки ревизии марксистско-ленинского учения о социально-экономических формациях.” «Сообщения Государственной Академии истории материальной культуры». Вып. 8 (август 1931). С. 4-12. (引用は 9 頁から)。
- (40) И. И. Смирнов. “Возможна ли “марксистская история материальной культуры”?” «Сообщения Государственной Академии истории материальной культуры». Вып. 1-2 (1932). С. 38.
- (41) Там же, С. 38.

- (42) Там же, С. 41.
- (43) Там же,
- (44) Там же, С. 43.
- (45) Там же,
- (46) Там же, С. 44.
- (47) Там же, С. 44-45. なお、スミルノフはラヴドニカスによる考古学の類型学的方法論批判の不充分性も指摘している。これについては、「ラヴドニカスは“4つのモチーフの観念論の本質” [形而上学的性格, 形式主義, フェティシズム, ナショナリスト的観念論 —引用者] を鑑定するだけで, 類型学的方法が帝国主義時代のブルジョアジーの公式の哲学となっているという基本的なことがらは示していない。……彼はドイツの考古学者の帝国主義的ショーヴィニズムがどのように類型学的方法の認識論的基礎に反映を見出したかは示すことができない。……類型学的方法批判は課題外としている」(Там же, С. 42) と述べている。
- (48) Там же, С. 45.
- (49) Там же, С. 38.
- (50) Там же, С. 46.
- (51) Редакция. “К статьи *И. И. Смирнова*. “Возможно ли “марксистская история материальной культуры” ?” «Сообщения Государственной Академии истории материальной культуры». вып. 1-2 (1932). С. 37.
- (52) *Смирнов*. Указ. Сатья, в примечании (42). С. 44.
- (53) Редакция. “К статьи *И. И. Смирнова*. ……” Указ, в примечании 51. С. 37.
- (54) Там же, С. 37.
- (55) Там же,
- (56) Там же,
- (57) Там же,
- (58) Рукописный Отдел Научного архива Институт истории материальной культуры Российской Академии наук, Фонд 2, Опись 1, Дело 3 (1933 г.). л. 51: 他にも参事会は「今日にいたるまでアカデミーが教育人民委員部諸機関に奉仕する課題 [大学・教員養成系高等教育機関の歴史学教室, 学校における歴史の授業, 博物館の仕事 —引用者] に向きあってこなかったこと」を“もっとも重大な欠陥”として挙げるなど, 計6項目の“欠陥”を指摘していた(Там же, лл. 51, 52)。
- (59) *Н. Я. Марр*. “В тупике история материальной культуры?” «Известия Государственной Академии истории материальной культуры». Выпуск 67, Издательство-ГАИМК, 1933. С. 1-149.
- (60) Там же, С. 126.
- (61) Там же, С. 5: ここでの「技術」(техника) という語の用法はマル独自のもので、

彼が「言葉の技術」という表現で人間が発声器官を動かす、その仕方を謂っていることから、一般に「仕方／やり方」を意味すると考えてよい。

(62) Там же, С. 112.

(63) А. Светлов. “Подготовка кадров на новую ступень.” «Сообщение Государственной Академии истории материальной культуры». 1932, вып. 5-6, С. 81.

(64) Там же,

(65) Там же,

(66) Тиханова. Указ, в примечании 31. С. 337.

(67) Сайт: Институт истории материальной культуры Российской Академии наук. (<http://www.archeo.ru/> 2024年4月21日閲覧)。この研究機関に対する「大テロル」の影響については、注(4)参照。

補論 [1] ニコライ・ブハーリンの技術論

第2章で追跡したソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所の所長ニコライ・ブハーリンは、その配下のハイム・ガルベルとは独立に自身の技術観を明らかにしている。彼の政治的失脚以後の学術的活動はほとんど注目されることもなく、わが国にも紹介されることはほぼなかった。ここでは、歴史の闇に消えていた、ブハーリンによる技術の社会科学的把握の試みを見てみることにしよう。

1. ブハーリン批判の前提

1929年、全連邦共産党(ボリシェヴィキ)政治局員ブハーリンは、ヨシフ・スターリンと対立し政治的に失脚した。その後、彼は政府機関紙『イズヴェスチヤ』の編集長を務めながら、レニングラードにあった「知識史委員会」を1930年10月3日付で引き継ぐ。さらに、この「知識史委員会」を基礎に、1932年3月、ソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所が設立されると、ブハーリンはその所長となった⁽¹⁾。ブハーリンは政治指導者ではなく、明敏な頭脳と該博な知識とを備えた一学究として、また辣腕のジャーナリストとして認められるようになる。

ときあたかも、「機械論者」と「弁証法家(デボーリン派)」との間で激しく哲学論争が闘わされていた。この論争のなかで、ブハーリンの所説は、機械論的傾向をもつものとして、しばしば批判の対象となった⁽²⁾。

彼の見解のなかには技術に関する議論もあった。1962年、「[技術論]論争じたいがもっている一面的な性格」を糺そうとした関恒義は、唯物論研究会(1932年発足)が「ブハーリンiraいの機械論的技術観を打破することによってマルクス主義の正しい技術観を確立すること」を課題(のひとつ)としていたことを再確認しつつ、ブハーリンの技術観を「技術体系が人間関係を調和的に決定するといういたって機械論的な体系説」⁽³⁾とした。このような技術観の背後には、ブハーリン独特の弁証法理解、いわゆる“均衡理論”があるとされる⁽⁴⁾。

“均衡理論”とは、金山浩司によれば、「自然現象から社会現象に至るまで、均衡状態の崩れを起点として何らかの変化が起こるという」理論であった。金山が指摘しているように、ブハーリンの所説は、すでに同時代のソ連において厳しい批判に晒されていた⁽⁵⁾。

わが国でも、1958年に岩崎允胤が、「均衡は、弁証法的論理学のひとつのカテゴリーである」としつつも、ブハーリンの見解を、「対立物の統一の見地を均衡の見地と置き換え、事物の運動の原因をその外部に求め、結局、内と外との量的関係に帰着してしまう」ものとして斥け、弁証法における「運動」と次のように対置した。

「均衡を自から定立し媒介し止揚するのが物質の運動の絶対性であり、これが本物の雑多な運動諸形態を生み出す弁証法である。……均衡は絶対的な・運動に先行する自立的なものではなく、それを他者として定立してはたえず止揚する運動の特殊な片面であり、独自の表現形式である。均衡は一定の必然性をもちながら、条件的一時的、相対的なものであった。運動がこれを媒介することによって絶対的、必然的であるかぎり、均衡は偶然的な側面もっている」⁽⁶⁾。

しかしながら、関、岩崎らが参照した文献は、1920年代、彼の政治的失脚の前に現地ソ連で出版されたもの⁽⁷⁾で、「機械論者」対「弁証法家」の哲学論争を経た彼の思索の発展を反映したものではない。まして1924年に亡くなったレーニンのブハーリン評価⁽⁸⁾には哲学論争以降のブハーリンの見解の変化が反映されるはずもなかった。日本にはついで紹介されなかったのであるが、彼は、わずか36頁の小冊子ながら、1932年に『現代資本主義の技術と経済』と題する単著⁽⁹⁾を出版しており、そのなかでは、少なくとも文言の上では、“均衡”(Равновесие)の語を用いることなく、その限りで自説を撤回している。

では、この段階でブハーリンはどのように弁証法を構想するにいたったのであろうか。ここでは、同書の焦点と言うべき技術の問題に関する彼の所説を紹介し、そのことを通じて、ソ連における“官許マルクス主義”が固定化される以前の多様な議論の一端に触れてみることにしたい。

同書については、徳永盛一氏が、関西で開催されていた「科学論・技術論研究会」で紹介したことがある(1990年8月26日)が、ペーパー化はされておらず、管見の限り、本格的にこれを論じた論稿はない。なお、以下では煩瑣を避けるため、同書からの引用については、該当頁番号を引用箇所直後に示すことにする。

2. ブハーリンによる技術の定義

現代資本主義の技術と経済を論じるにあたって、ブハーリンは労働における具体的労働と抽象的人間労働との二重性から議論を展開してゆく。その際、興味深いのは、ブハーリンがこうした労働の二重性把握を商品生産者の社会以前にも適用できるとしていることであろう。ブハーリンは「あらゆる歴史的な社会構成体における労働過程は、よく観察してみると、そのなかにそれぞれ内的に対立しつつ存在している二重の性格を見せている」との一文でこの書を始めている (C. 2)。彼は、「資本主義社会における具体的労働と抽象的労働の矛盾は、生産力と生産関係との矛盾、技術の動きと経済成長との間の矛盾、労働過程の内容とその社会的形式との間の矛盾と結びついている。それゆえ、そこには、“飛躍”，つまり、古い労働の社会的形態を破壊し、新しいその形成に導くような矛盾の高まりをもたらすような特定の歴史的条件下においては避けることができないコンフリクトの可能性がある」(C. 8) と、労働の二重性を出発点とする弁証法を構想している。

同書で主要な検討対象となる技術についても、ブハーリンは同様に労働の二重性からアプローチしてゆく。「具体的な労働は、自然との物質交換として、客観的な自然の法則、その性格、因果性、作用の連関、素材、労働用具などに従って、固有の法則性をもつのである。なぜなら、労働は、生産の社会的過程の契機を構成し、その法則性は社会発展の基本的な法則性に従属しているからである」(C. 5)。そして、“自然の法則”，具体的労働の“固有の法則性”など、ここで重視されている“法則”，ないし“法則性”を機軸としながら、ブハーリンは次のように技術を把握する。

「以下を技術に含めて理解することができる。①生産の技術的側面、つまり、その特有の連関における技術的諸作用の総体、②労働用具の体系とそれに照応した生産過程におけるひとびとの配置、③労働用具の体系そのもの（「筋骨系、脈管系生産体系」）、④自然科学に依拠した規範の体系（技術的過程の理論的側面、あるいはテクノロジー）。ここでの対象は技術学的過程、何よりも労働用具の機能である」(C. 5)。

「社会的生産における労働手段の体系」を以て技術の定義とするのが、ソヴィエト技術史における“正統的な”技術観である⁽¹⁰⁾が、ここではこの定義はひとつ

のモメントの位置におとされている。ブハーリンはこの「労働用具の体系」という技術の第3の定義をそれ自身では「不完全で、一面的で狭い」(C. 5)と排斥する。一方、第4の定義については「テクノロジーはわれわれの分析の対象外にある」(C. 5)としてそれ以上の考察は与えていない⁽¹¹⁾。

3. 資本主義における技術進歩をもたらす諸矛盾

ブハーリンは資本主義の基本的矛盾⁽¹²⁾を次のようにとらえる。

「資本主義の基本的な矛盾は、生産力の高まりと社会の階級的構成の矛盾、生産の社会的性格と獲得の私的性格との矛盾、際限のない生産への衝動と大量消費の制限への傾向との間の矛盾、生産過程の物質的“内容”とその歴史的“形態”との間の矛盾である」(C. 9)。

その上で、資本主義社会において技術進歩に結果する諸矛盾を“技術的契機”に関わるものと技術と労働との関係に関わるもののふたつのカテゴリーに大別し、まず前者として次の5点を“例示”とともに挙げる。

- ① 「労働用具と労働対象との間の矛盾」。具体例として挙げられているのは、ホイットニーによる綿繰機の発明以前の手工業の用具には綿花との“相性”があり、アメリカ産の緑色種子綿花は「比較的単純なやり方で綿繰りできる黒色種子綿花に太刀打ちできなかつた」(C. 12)という事例である。
- ② 「機械とその生産に用いる素材との間の矛盾」。ここでは、この矛盾の例として、工場動力としての蒸気機関の開発・普及が機械の素材を、それまで多用されていた木材から錬鉄に替えていったことなどが挙げられている。
- ③ 「機械の諸部分間の矛盾」。ジェニー紡績機は、登場したばかりのときは、動力を人力に依存していたが、作業機の機構と人力の間には矛盾があり、「この矛盾は蒸気機関の発明によって“除去された”」(C. 13)ことを例として挙げている。
- ④ 「設計された機械とそれを生産する所与の技術的可能性との間の矛盾」。ワット機関が登場した(ブハーリンは1765年としている)当初、板状の鉄材から鍛造で造られたシリンダーから蒸気が漏れる事態がたびたび起こった。「1776年、ウィルキンソンは穿孔のための特殊な機械の発明に成功し、その助けで18インチ・シリンダーの鑄造に成功した」(C. 14)こと

をこの矛盾の止揚ととらえている。

- ⑤ 「個々の生産部門間の技術的基礎の矛盾」。紡績の機械化の進展に伴い、織布の速度向上が求められ、カートライトによる蒸気機関で動く織機の誕生につながったこと、さらに、紡績・織布の機械化が「漂白、捺染、染料工業の技術的基礎と矛盾するようになった」(C. 14) ことをこの例として挙げている。

技術進歩をもたらす矛盾の、第2のカテゴリーは、技術と労働との間の諸矛盾である。それは「一方における生産力の物的要素の発達、物質に反映された技術学的過程と、他方における労働力とその技術的組織との間の矛盾である」(C. 15)。

このカテゴリーには、①「技術と労働力の熟練度との間の矛盾」(C. 15)、②「所与の生産単位内部における技術と技術的分業との間の矛盾」、③「技術と企業規模との間の矛盾」(C. 16) の3つの矛盾が含まれる。

そして、結論的に、これら諸矛盾が総体として「資本主義社会の生産力発展の客観的な過程において、相互に絡み合い、結果として資本主義発展の歪みを増大させる」(C. 17) としている。

4. 独占資本主義における技術進歩

ブハーリンはこの著書『現代資本主義の技術と経済』のほぼ半分を独占資本主義下の技術進歩の諸問題に割いている。「経済的諸関係は独占資本主義の時代には、新しい質を帯びて登場する」(C. 30)。ブハーリンによれば、独占資本主義の基本的な矛盾は次のようになる。

「独占資本主義のもとでは、①新しい特別利潤をえる刺激は低下する。というのは、独占はすでに一定の超過利潤を確保しており、強力な競争相手もないからである。②大規模な革新は現存の資本量の確保を前提とする。③技術的に遅れた生産経営体は先進的なものに追いつかない。なぜなら、商業の視点から見れば、これらの経営体は個人の所有ではないからである。それらの“所有者”はそれら(企業)が“働いた”かどうかに関わりなく、配当を得ている。……④資本家の独占的結合において遅れた(遊休している)生産経営体の存在は、ほかの生産経営体で現実に生産された商品の価格における費用要素を構成するかたちで緩衝帯として現れる」(C. 32)

そして、「新しい企業を設立することがきわめて困難であることは指摘しておく必要がある」(C. 32)と附言する。総じて、ここでは独占の停滞性、腐朽性が強調されている。こうした諸点からブハーリンは、「これらの矛盾は、……同じ大きさというわけではまったくないが、ふたつの重要なこの上ない結果をもたらす。(1)それらは独占資本主義の腐敗現象を呼び起こす。(2)それらは矛盾の強まりが破局を呼ぶまでに拡大する」(C. 31)と結論している。「資本主義の死滅は自動的な自滅ではない」(C. 36)とは言いつつも、後者についてはさらに、「死滅しつつある資本主義としての独占資本主義は、崩壊に、[プロレタリア革命を経て]壊滅に向かつて、克服出来ない一連の傾向を生み出す」⁽¹³⁾(C. 34)としている。

しかし、こうして独占資本主義を“死滅しつつある資本主義”，社会主義への移行期として把握する一方で、ブハーリンは独占資本主義下における技術発展を、来るべき資本主義以後の社会を導くものとして積極的に評価する。

ブハーリンの独占期技術発展の特徴付けは、やはり、ここでも経験的である。電化をはじめとする独占期の技術発展の諸事例を跡づけ、彼はその傾向を「電化を基礎とする普遍的な技術的結合(コンビネーション)を意味していることは容易にわかる」(C. 19)と総括する。また、「生産過程そのものにおける電力利用とともに、さまざまな経営を直接的な物質的・技術的連携で結びつける“原理”も登場し」(C. 18)、「独占資本主義の時代における技術発展の基本的な傾向は、電化を基礎とする技術的結合」(C. 30)を生んだとする。

これに“化学化”，“生産の機械化・自動化”が加わる。

「ますます進化している生産の化学化過程がここできわめて重要な役割を演じている(C. 19)」……「巨大な飛躍を遂げた生産の機械化，自動化は、まさに高度に技術的結合への傾向を強めた」(C. 20, 21)。

そして、「連続ラインとコンベヤーの導入は労働の集約性を信じがたいほど高めた。……他方、生産の電化と複雑な自動機械の制御は技術に関する教養をもった労働力を要求」(C. 22)し、総じて、「上述のような、独占資本主義の技術的基盤の発達は、(a)ますます進む科学の応用と、それとともに、(b)生産、労働、管理と指導の組織における変化を前提している」(C. 23)。

輝かしい独占期技術発展が、“技術的結合”の傾向をもつがゆえに、資本主義の“死滅”をも必然とすると述べることによって、ブハーリンは先述の独占資本主

義の停滞性・腐朽性の議論との平仄を合わせようとしている。

「この傾向の発展は、資本主義的な所有関係とは照応しない。独占資本主義は遅れた技術形態を保守して、その発展にブレーキをかける。それゆえ、基本的な傾向のさらなる展開は、資本主義の枠を超えることになる」(C. 25)。

また、こうも言う。

「電化を基礎に普遍的な技術的結合に向かう技術発達は、資本の個人所有の境界にぶち当たる。電力は、その発展が『ブルジョワジーの指導と照応しなくなる』生産力として現れる」(C. 35, 36)。

5. 未成熟に終わったブハーリン技術論

ここでは、ブハーリンが、その政治的失脚、および「機械論者」対「弁証法家」間の哲学論争の後に執筆した小冊子『現代資本主義の技術と経済』を取り上げて、その種々の論点を紹介した。まず、確認できるのは、彼がここで(少なくとも文言上は)“均衡理論”から訣別していることであろう。哲学論争のなかで、正確な位置づけとは決していえないにもかかわらず、ブハーリンも「機械論者」のひとりとして批判されたが、その際、批判の対象になっていた“ブハーリン理論”は数年前の彼の主張であり、その間の彼の思想的発展は無視されていた。

われわれは、これまで取り上げられることがほぼなかったブハーリンの1932年の著書から、彼がその時点で到達していた技術観とその弁証法の特徴を垣間見ることができた。そこには、“官許哲学”としてできあがってしまったソヴィエト・マルクス主義における技術観とは違った、ユニークな議論が多数見受けられた。また、資本主義下での技術進歩のいくつもの筋道や独占資本主義の停滞性・腐朽性など、それなりに説得力を感じさせる論理展開も見られた。

しかし、技術進歩の筋道に沿った分析ではなく、技術史上のあれこれの事例をパッチワークのように並べ、それらから経験的(帰納法的)に発展の類型を分類し、そこに“弁証法”を接ぎ木しているような印象は拭えない。また、多くの頁を割いた独占資本主義下の技術発展については、諸事例をある意味で単純化しつつ総括し、人為的にたったひとつの傾向に収斂させようとしているようにも見える。

総じて、ブハーリンの技術論の内容は充分説得的と思えるほどの成熟ぶりを見せてはいない。しかしながら、ブハーリンにはさらなる思想的“成熟”を遂げる時間は残されていなかった。科学史=技術史研究所所長職はブハーリンの“送老官”となるはずであった。しかし、「大テロル」の疾風怒濤のなかで、ブハーリンは1937年2月27日に逮捕され、1938年3月15日に銃殺された⁽¹⁴⁾。

注

- (1) この経緯、および、科学史=技術史研究所が辿った運命については、本書第2章参照。
- (2) 「機械論者」対「弁証法家(デボーリン派)」の間の哲学論争については、ルネ・ザパタ／原田佳彦訳『【文庫クセジュ】ロシア・ソヴィエト哲学史』(白水社、1997年、117～120頁)や藤岡毅『ルィセンコ主義はなぜ出現したか—生物学弁証法化の成果と課題—』(学術出版会、2010年、49～51頁)がすぐれたまとめとなっている。ただし、ブハーリンの政治的事跡を追ったロシア現代史研究者、スティーヴン・コーエンは、ブハーリンの思想を「心理、イデオロギー、道徳、習慣等の大いなる重要性を認めた」「多元的アプローチ」をもつものとして積極的に評価し、その機械論的傾向も、スターリンやデボーリンらの弁証法の「目的論的風味」を厭った、主体的な選択の結果とみなしている(スティーヴン・コーエン／塩川伸明訳『ブハーリンとボリシェヴィキ革命—政治的伝記、1888～1938年—』(未来社、1979年。引用は同書148、152頁)。なお、この論争の主人公のひとり、アブラム・デボーリンについては、セルゲイ・コルサコフ／市川浩訳「第2章 “メンシェヴィキ化する観念論”——アブラム・モイセイヴィチ・デボーリン」(金山浩司編著『ソヴィエト科学の裏庭—イデオロギーをめぐる葛藤と共存』(水声社、2023年、83～120頁)参照。
- (3) 関恒義「“技術論”をめぐる若干の問題」『一橋論叢』第47巻第1号(1962年1月)、33、34頁。なお、関が想定する唯物論研究会の第2の課題とは、ナチスの技術観との対決であった。
- (4) ソ連の“正統派技術史学”の形成に影響力のあったアナトーリー・ズヴォルキン、セルゲイ・イヴァニツキーやニコライ・ヴォルコフなど1930年代はじめに技術系高等教育機関において“マルクス主義的技術史”の教壇に立った論者たちはこうした理解のもとにブハーリン理論を厳しく批判していた(本書第1章参照)。
- (5) 金山浩司『神なき国の科学思想』(東海大学出版会、2018年、67、68頁(引用は67頁))。
- (6) 岩崎允胤「均衡論について」、日本哲学会『哲学』1958年第8号、67、68頁(この

文章に先行する引用はそれぞれこの論文の69頁と61頁から)。なお、関などと違う立場に立ち、技術の本質を“客観的法則性の意識的適用”とみる、いわゆる“適用説”論者の近藤完一も、1957年に、ブハーリン的“均衡論”を「事物の発展をその矛盾と統一においてみることなく、量的バランスの問題として、常にその均衡を破るものを外力に期待する」(武谷三男編著『自然科学概論』第2巻、勁草書房、1960年、204頁)ものとみている。

- (7) 関が検討の対象としているのは、ブハーリンの1921年の著書、『史的唯物論の理論』(Н. Бухарин. «Теория исторического материализма». 檜崎輝が1927に邦訳したものを掲げている)であり、岩崎も、おそらく原著は同じものを対象としているのであろう。岩崎は原著の名をドイツ語で掲げ、広島定吉の手による邦訳を挙げている。
- (8) レーニン「彼の理論的見解を完全にマルクス主義的とみなすことには、非常に大きな疑問をいだかないわけにはいかない。というのは、彼にはスコラ学風のところがあるからである(彼はけっして弁証法を学ばなかったし、けっして十分にそれを理解しなかったと私は思う)」(ヴェ・イー・レーニン／邦訳「大会への手紙」、『レーニン全集』第36巻、大月書店 1960年、704頁)と述べている。なお、レーニンのブハーリン評価については、服部文男「レーニンのブハーリン批判—帝国主義の理論的把握を中心として—」(新日本出版社『経済』1970年4月特大号、209～218頁)を参照されたい。
- (9) Н. И. Бухарин. «Техника и экономика современного капитализма». Ленинград: Изд-во АН СССР, 1932 г.
- (10) ズヴォルィキンは、「技術を社会的生産体系における労働手段とするマルクス主義的な定義は、技術を労働手段(技術の主要な内容を構成しているとはいえ、それに限られるわけではない)、生産手段、テクノロジー、生産力などとする類似した定義とは鮮やかな一線を画し、学術領域としての技術史の対象に関する問題に明瞭さをもたらす」(А. А. Зворыкин. “О некоторых вопросах истории техники.” «Вопросы философии». 1953, No. 6. С. 34)と述べている。言うまでもなく、この定義がソヴィエト技術史学のおおよその基本的な理解となった。
- (11) ここで興味深いのは、ブハーリンが技術の諸契機と“それそのものの大きさ(натуральные величины)”との関わりを論じていることであろう。彼は、「あるタイプの技術の諸指標はそれ自体の指標であり、機械、および複合機械の有益な作動の効率や化学反応の速度、タービン出力の指標、燃料利用レベルの指標も同様である」(С. 5, 6)と述べている。この著作では充分展開されてはいないが、彼は、技術進歩の数値化、それによる経済指標への、したがって経済分析への組み込みを展望していたものと考えられる。
- (12) この場合、ブハーリンは“矛盾”の表示器として、“経済指標”を挙げている。すなわち、「経済指標、それは特別に社会的な性格の諸指標である。それらは、自

然経済における，商品社会における，個別性を超えた社会的労働，つまり抽象的労働に関係している。それらは社会的生産関係を反映している」(C. 6)としている。

- (13) ブハーリンはこの文に続けて、「世界大戦は，資本主義の技術のすべてをそのまま“誤導”し，巨大な生産力を破壊し，資本主義の社会階級的基礎を壊滅させ（一連の革命），プロレタリア独裁をもたらしたロシアにおける巨大な革命を引き起こした」(C.34)と述べている。
- (14) https://ru.wikipedia.org/wiki/Бухарин_Николай_Иванович 2019年11月28日閲覧。

補論 [2] ヴィクトル・ダニレフスキー再考

国立物質文化史アカデミー（ガイムク）の精神的指導者ニコライ・マルにあらがれ、一時ガイムクに在籍しながら、アナトーリー・ズヴォルィキンに招かれ、彼を長とする「共産主義アカデミー」幹部会附属“技術史セクション”，あるいは同科学史=技術史研究所「モスクワ技術史部」でハイム・ガルベルらの追い落としに協力し、そのガルベルの事実上の後任として長くレニングラード工業専門学校で技術史を教え、わが国にも紹介された大著を著しながら、戦時には愛国読物の作家となり、戦後、産業遺産研究にほぼ落ち着いたヴィクトル・ダニレフスキーとはいったい何者であったのであろうか。その複雑で、多面的な相貌を繙いてみよう。

1. “ソ連を代表する技術史家”ダニレフスキー

序章で述べたように岡邦雄⁽¹⁾は、1937年、『唯物論研究』誌に発表した「技術論について（上）、（下）」の論稿でダニレフスキーの仕事を紹介した。その後、榎本セツとともにダニレフスキーの著書『18～19世紀の技術史概説』（*В. В. Данилевский. «Очерки истории техники XVIII-XIX вв.»*. М.-Л., Соцэкгиз, 1934）を翻訳し、三笠書房から『近代技術史』の題名で刊行した（1937年）。以降、ダニレフスキーは日本人にとって“ソ連を代表する技術史家”と受け止められるようになった。

しかしながら、“マルクス主義的技術史”確立をめざすグループには、ダニレフスキー、あるいは、彼とズヴォルィキンを中心とするグループのほか、それに先行、あるいは並行して、もうひとつの流れがあった。しかも、彼らは全10巻に及ぶ包括的な技術史の集大成まで構想していたことは本書第2章で明らかにしたとおりである。1932年、レニングラード（現、サンクト=ペテルブルク）に設立されたソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所がその舞台となった。ここでは、若い哲学者、ガルベルらがマルクス主義的技術史の確立をめざして奮闘していたのである。

では、なぜ、ガルベルらではなくダニレフスキーが、“ソ連を代表する技術史家”となったのであろうか。ダニレフスキーについては、ヴラジーミル・グヴォジュツキーによる評伝⁽²⁾があるが、この“代表交替”についてほぼ何も書かれていない。ここでは、第1章に引き続き、従来ほとんど知られていなかったダニレ

フスキーの論壇登場とズヴォルィキン=ダニレフスキー・グループ台頭の経緯を示し、ソ連における“正統”マルクス主義的技術史形成の背景を探ってみよう。

(1) ダニレフスキーの学界デビュー



図11 ヴィクトル・ダニレフスキー

まず、ダニレフスキーとはどのような人物であったのであろうか。彼自身が“刷新”（後述）後の科学史=技術史研究所指導部に提出した経歴書（1937年9月25日現在）を見てみよう⁽³⁾。

彼は1898年のユリウス暦8月23日（グレゴリオ暦9月5日）、ウクライナに生まれた。両親はともに初等教育の教員であったが、父は1916年に亡くなっている（母は1932年に死去）。1916年、ポルタヴァ第一ギムナジウムを卒業すると、ハリコフ技術専門学校に進学するとともに、ハリコフ大学で歴史系の講義を聴講した。1917年5月にロシア帝国の軍隊に召集され、第1次世界大戦に従軍したものの、生来の虚弱体質から1年もたたずに除隊となった。十月革命後の1919年、白衛軍がハリコフに近づく中で、今度は赤軍に動員されるが、発疹チフスで病臥し、療養の途上、血管閉塞のため左足を失う。10か月の入院生活のち、母がいたヤレスキに向かい、同地のいくつかの職業学校で技術と物理を教えた。

1922年秋、ハリコフに戻り、技術専門学校を1923年に卒業し、化学技師免許を取得すると、専門学校の実験ガス工場の蒸留技師を皮切りにいくつかの工場に技師として勤務した。その途上、1924年頃から技術史に関する執筆活動を始め、1926年には全ウクライナ社会博物館に勤務し、1930年からは1年間、副館長を務めた。博物館での仕事と並行して、1928年からハリコフ農業専門学校、ハリコフ国民師範学校などで技術史を講じた。1931年6月6日、ウクライナ教育人民委員部資格審査委員会により「教授」の国家称号を授与された。このころ、社会思想の面で強い影響力を発揮していた言語学者・東洋学者ニコライ・マルの“物質文化史”構想に共感し、その知遇をえた。マルの紹介でレニングラードに移住、「国立物質文化史アカデミー」⁽⁴⁾で働きながら、1934年からレニングラード金属工場附属I.V.スターリン名称高等技術教習所の技術史教室主任となった。そし

て、1936年1月、ダニレフスキー自身の意思には反していたようであるが、彼は高等技術教育委員会によりレニングラード工業専門学校（現在のサンクト＝ペテルブルク国立工科大学）の技術史教室主任に任じられる。

ダニレフスキーによれば、技術史教室は「のちに反革命＝テロリストとして摘発されるガルベルによってその活動はめちやくちやになっていた」⁽⁵⁾。高等技術教育委員会が彼を教室主任として発令しても、校長エフドキーモフはガルベルを解任する意思がなく、ガルベルはその逮捕まで約3か月間、事実上主任として教室を取り仕切っていた。これについては、彼は後日、「逮捕と摘発だけが問題を解決した」⁽⁶⁾と語っている。ダニレフスキーは教室の立て直しに奮闘する。そして、1936年6月まで「完全に閉ざされていた」⁽⁷⁾科学アカデミー・科学史＝技術史研究所の門がその“刷新”を機に開かれ、彼はその上級研究員となった。

(2) ズヴォルィキンの台頭とダニレフスキー

1929年11月の全連邦共産党（ボリシェヴィキ）中央委員会総会は高等工業教育機関へのマルクス主義的技術史の導入を決議した⁽⁸⁾ものの、高等工業教育機関へのマルクス主義的技術史の導入という政策課題は、第1章で見たように、しばらくの間、工業専門学校教員の努力任せになっていた。グレブ・クルジジャンフスキーは高名な電気工学者、「労働者階級解放闘争同盟」以来の“レーニンの戦友”であったが、当時は人民委員会議（内閣）附属高等技術教育委員会議長であった。彼は1934年2月26日付で重工業人民委員部（省）のある局長に書簡を贈り、ソ連全土で統一されたマルクス主義的技術史の教授方法・内容の確立の遅れを嘆き、「1929年の11月総会の決定（は）、……4年間、何もなされていない」⁽⁹⁾と焦燥をあらわにした。この書簡の少し前、1933年には、高等技術教育委員会内に、「マルクス主義的技術史委員会」が附置されてはいた⁽¹⁰⁾。その活性化が望まれるなか、クルジジャンフスキーが「わたしの代理（мой заместитель）」⁽¹¹⁾と呼んだズヴォルィキンらが急速に台頭してくる。ドンバス炭田の経営管理要員としてそのキャリアをスタートさせたズヴォルィキンは学徒としては経済学を専攻しており、この段階で技術史の研究業績はなかった⁽¹²⁾。彼はさかんに技術史分野で著述活動をおこなっていたダニレフスキーに声をかけた⁽¹³⁾。

1936～37年にかけてピークを迎えた「大テロル」の波は、1936年4月、所長ニコライ・ブハーリンがフランスに出張しているタイミングでソ連邦科学アカデ

ミー・科学史=技術史研究所にも押し寄せてきた。その過程については、第2章でも述べたが、ここでも必要な限り触れておこう。

このとき、ガルベルら若い研究者3名が逮捕された。科学アカデミー・終身書記ニコライ・ゴルブノーフは研究所を“反革命=トロツキスト組織”の“巢窟”と断定、いったんは研究所の即時閉鎖を宣告するが、翌日にはその方針を撤回、研究所のモスクワへの移転を命じる⁽¹⁴⁾。モスクワ移転は、しかし、結果として「以前の集団の完全な廃止を意味した」⁽¹⁵⁾。

おもに社会科学の諸分野における、マルクス主義に基づく学術研究・教育機関として1918年に設立された「共産主義アカデミー」（当初は、「社会主義アカデミー」）は科学アカデミーと一体化すべく、1936年に廃止される。この措置に伴い、1936年4月、ズヴォルィキンをリーダーとする「共産主義アカデミー」幹部会附属“技術史セクション”はほぼそのまま横滑りして、ソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所「モスクワ技術史部」となる⁽¹⁶⁾。この直後の同研究所モスクワ移転はその規模の大幅縮小と要員の入れ替えを意味したが、この「モスクワ技術史部」は移転によってほとんどそのまま研究所の「技術史セクション」に横滑りした。

「大テロル」は社会の多くの活動を支えていた要員の大量喪失を意味したが、野心的な若い層にとってはしばしば上位の役職者の不在による異例の出世をもたらした。ズヴォルィキンは、まさにこうした「大テロル」“特昇組”のひとりであり、このような事情は非党員のダニレフスキーも同じであった。

時流に乗ったズヴォルィキンは「科学史=技術史戦線におけるトロツキー=ブハーリン派の妨害の影響をその最後にいたるまで払拭する」⁽¹⁷⁾と題する論文を執筆し、科学史=技術史研究所の前指導部を激しく攻撃した。しかし、研究所閉鎖（1938年）までは望んでいなかったのか、のち、党中央委員会に技術史分野における研究所の設立を嘆願している⁽¹⁸⁾が、これは戦後の話となる。

2. その後のダニレフスキー

ダニレフスキーが“ソ連を代表する技術史家”とみなされるようになったのは、彼の大著によって得た一定の名声にも依っているのであろうが、基本的には「大テロル」のために、もうひとつのマルクス主義的技術史形成の流れが政治的に抹殺されたためにほかならなかった。

ダニレフスキーが同時代のニコライ・ヴォルコフによって厳しく批判されていたことは、すでに第1章で見たとおりである。ヴォルコフはダニレフスキーの主著『18～19世紀の技術史概説』を「大量の事実資料で飽和している」としつつ、「著者の誤りは、たいへん多くの典拠を引きながら、これら原典の通り一遍の分析さえ行わないことにある」と批判した⁽¹⁹⁾。確かに、博覧強記、かつ詳細でありながら、いたるところで論理的正確さを欠いているという印象は、当時のソ連の読者、および岡邦雄らによる邦訳『近代技術史』を読んだ日本の読者の多くも共有していたところであろう。

それにもかかわらず、彼のこの著作がソ連における一般（世界）技術史の代表的著作としての地位を保つことができたのは、ひとつには、ブハーリンの最終的失脚、全10巻におよぶ『技術史全史』を編纂していた彼の研究所の閉鎖の影響が挙げられよう。オクサーナ・シモネンコによれば、これが怯懦を誘い、1950年代始めまで、ソ連の研究者の間では技術史のまとまった著作を出版する気運はなかったという⁽²⁰⁾。

さらに重要なのは、グヴォジェツキーによる評伝がしめす⁽²¹⁾ように、ダニレフスキーの仕事が1940年代に入ってから以降、ほぼもっぱらロシア（ソ連）一国の技術史研究、ないし産業考古学的研究に向けられるようになったことであろう。この分野で旺盛な著述活動を展開するうちに、ダニレフスキーの名前は、技術史に関心をもつ旧ソ連・ロシアの人々にとって、そのロシア（ソ連）技術史に関する数々の研究成果、著作とのみ結びつくようになっていった。ダニレフスキーがロシア国内に残る、中・近世の鉱山、ダム、城塞などの遺構の調査——今日流に言えば産業考古学的調査——に従事しはじめたのは1929年のことであり、ロシア（ソ連）技術史に関する著作が、こうした調査にも支えられたものであったことには間違いはない。しかし、1930年代の著作の多くが世界規模での技術史の展開に向けられていたのに対して、1940年代以降におけるダニレフスキーの関心はほぼ祖国の技術史に限定されてゆく。1940年に出版された『I.I. ポルズブーノフ — 仕事と生涯—』⁽²²⁾と『19世紀までのロシアの水力設備の歴史』⁽²³⁾はとくに評価が高く、1942年のスターリン賞第2席に選ばれている⁽²⁴⁾。

第2次世界大戦がはじまると、ダニレフスキーはその豊富な中・近世史の知識を活かし、一連の戦記物の執筆を通じて戦意高揚をはかる“愛国読物作家”に変身していった⁽²⁵⁾。

戦後、技術史は科学史とともに、旧ソ連の高等教育機関における正規の教育科目として導入されることとなる。1944年に発足したソ連邦科学アカデミー・工学部附属技術史委員会はますます活発に活動を展開し、1953年には既存の自然科学史研究所と合体して、現在も続くS.I. ヴァヴィーロフ名称自然科学史=技術史研究所となる。

ダニレフスキーもそうした技術史の社会的ステータスの上昇のために彼なりに貢献したことになる。ダニレフスキーの“愛国的奮闘”は、グヴォジュツキーが述べているように、戦争終結直後から冷戦の激化にいたる1940年代後半、1950年代前半のソ連社会における愛国キャンペーンの時代の雰囲気にもマッチしたものであった⁽²⁶⁾。

しかし、彼は、身体の障害のこともあってか、新しい研究所に移ることも、特に新たな要職につくこともなく、また、大きな研究プロジェクトを率いるということもなく、レニングラード総合技術専門学校(工業専門学校から改称)の教授職にとどまり続けた。

1947年に出版された彼の著書、『ロシアの技術』⁽²⁷⁾は、ダニレフスキー2度目のスターリン賞受賞対象となったものではあるが、「所々に先入見があり、著者の拙速の痕跡や、その結果としての不正確さや遺漏を含」んだ、「ダニレフスキーにとって悪しき骨折り」と評されるものとなる。このため、専門家の間で、彼は「政治的言動をとる、偏好に満ちた」学者として、その権威を喪失しつつあった⁽²⁸⁾。

あるいは、「閉鎖性、興奮症、人付き合いの悪さ、自己中心性」⁽²⁹⁾といった彼の性格が、周囲の人々をして彼を忌避せしめたのかもしれない。

この時代、共産党中央には、多くの科学者や研究者から、自己や自分がかかわる分野の売り込み、ライヴァルの追い落としを目的とした書簡が多数寄せられた。その多くが、現在ロシア国立社会=政治史文書館(Российский государственный архив социально-политической истории)に保管されている。選挙を通じた“声なき多数”がありえない社会では、こうした権力への手紙が自己の要求実現にとって必然の所為であった⁽³⁰⁾。技術史関連では、技術史教育の興隆を訴えるズヴォルィキンの書簡⁽³¹⁾が知られているが、戦後に限って言えば、ダニレフスキーのものはない。

1950年代、つまり、ダニレフスキーの生涯最後の10年間、彼の研究はますます産業考古学的な特徴を帯びてゆく。また、著述に対する情熱も失われることな

く、最後のまとまった研究書とも言うべき『ナルトフと「機械のわかりやすい説明」』⁽³²⁾にいたるまで数冊を執筆している⁽³³⁾。しかし、彼がソ連の技術史研究・教育の展開において指導的・組織者的役割を担うことはなかった。

3. 日本におけるダニレフスキーの語られ方——「軍事技術論争」に寄せて

わが国においてダニレフスキーの名は戦前わが国最大級の技術論争であった、いわゆる「軍事技術論争」を通じて大きくなっていった。

岡邦雄は、1937年の『中央公論』（7月号）に「技術の歴史的研究—技術史論序説—」と題する論稿を発表した。その中で、岡は「階級社会に於て、人類の歴史は戦争の継続であったのに対応して、軍事技術が一切の技術をリードして来た」⁽³⁴⁾と述べた。この岡の「軍事技術リード」説は唯物論研究会内に批判を呼び、それを踏まえ、岡は『唯物論研究』第57号において、「『リード』なる言葉を一応の意味で撤回」⁽³⁵⁾し、「リード」の意味内容を再定義はするものの、ダニレフスキーを援用しつつ、軍事技術先行の事例を数多くあげ、結果的にはかえって「軍事技術リード説」を補強した。

では、岡をして「リード」なる言葉を想起させたダニレフスキーの用語とはいったいどのような語であったのであろうか。以下、原書にあたって確認してみよう。

ダニレフスキーの原書 (*В. В. Данилевский. «Очерки истории техники XVIII-XIX вв.»*, М.-Л., Соцэкгиз, 1934) 中、「リード」の意味にもっとも近づく語が使われている部分は、そのС.293 (以下、煩瑣を避けるため、この原書からの引用はページ番号のみを示す) の一節、“ Впоследствии военная техника точно же обгоняет производства мирного времени, — например в применении булата в восточных деспотиях и т. д.” (傍線部は述語動詞) であると思われる。岡らはこの部分を「後代に至っても軍事技術はこれと全く同様に平時の生産に一步先んじていた、——それは例えば東洋の専制国家に於けるダマスク鋼の応用に於けるように」と訳している。

研究社の『露和辞典』(1988年版)によると、動詞^{オボグナッチ}обогнать (完了体原形) / ^{オブゴニャッチ}обгонять (不完了体原形) の意味は「追い抜く」とある。また、ソ連で広く用いられた露英辞典⁽³⁶⁾によれば、この語は、英語のoutstrip,あるいはleave ~behindに訳されている。この限りでは、岡の訳「一步先んじていた」は正鵠を射た適訳といえよう。

原書の中には、このほか、英語の **take** にも相当する、広い意味をもった動詞 ヴェスチー **вести** (完了体原形) / ヴォヂッチ **водить** (不完了体原形) が使われている箇所がある (C.297)。ただし、そこでは、“военная техника …… ведет за собой другие области.” (軍事技術は……他の分野を率いる) というフレーズに続けて、「それら [他の諸分野 — 引用者] の経験を活用し、複雑な機械を他に先駆けて応用する」とあり、今日流に言えば、**spin-off** だけではなく **spin-on** の関係も視野に入れた表現となっている。他の箇所でも、ダニレフスキーは、「マルクス・レーニンの戦争に関する学説は、……軍事技術は、ただ、既存の生産様式の土壌の上でのみ発達するものである、ということを示している」(C. 298)、あるいは、「機械制大工業の発達は軍事技術を革命的に変化させる」(C. 307) と述べており、しばしば一般 (民生) 技術の軍事技術に対する規定性を強調している。軍事技術と一般 (民生) 技術がどのような関係にあるのかについては、ありていに言えば、ダニレフスキーその人は充分考察しているわけではない。自分がそのところどころで掲げる具体的な事例にとって都合のよい説明となる側面をそのつど挙げていくにすぎないと見なしてよいであろう。この点でもヴォルコフによるダニレフスキー批判が妥当であると見なせよう。それでも、彼は、階級社会における軍事技術と一般 (民生) 技術との間の相互規定的な関係を想定していたのである。

岡はこの点熟知していたはずであるのに、ダニレフスキーに依拠しながら、なぜ「リード」という不適切な語を用いたのであろうか。先に掲げた、『中央公論』に発表した論稿には「吾々は今や人類未曾有のエポックに際会し、それが潜めている絶滅的な契機を如何にしても発展的な契機にまで転廻せねばならぬ。換言すれば、技術を、それが従来うけていた×××× [伏せ字] ××××××技術 (実は技術全体の×××× [伏せ字] ××××××) から解放してその本来在るべき生産的地盤の上に確実に、かつ全面的に置き直さねばならぬ。それはまさに技術そのものを越えた、ひろく社会的、人類的な、重大な課題である」⁽³⁷⁾ と書かれていた。ここには、本格的な戦争の時代を迎えた知識人の真摯な問題意識を看とることができよう。岡は、ダニレフスキーの一貫性のなさ、深みのなさを知りつつも、論争による認識の深まりによる時代の根底的な批判を期待していたのではなからうか。「軍事技術論争」は岡の内発的な問題意識に発したのであって、ダニレフスキーからの引用は、本質的には岡の仮託に過ぎなかつたのではなからうか。

注

- (1) わが国技術論形成期における岡の貢献については、さしあたり、中村静治『新版・技術論論争史』（創風社、1995年、4、16～18頁）参照。なお、岡は、戦後、自身らが邦訳したダニレフスキーの『近代技術史』（三笠書房、1937年）、および、ズヴォルィキン^{ズヴォルィキン}の論文「技術史の若干の諸問題（*А. А. Зворыкин. “О некоторых вопросах истории техники.” «Вопросы философии».* 1953, No. 6. С. 32-45）」から多数引用した著作『新しい技術論』（春秋社、1955年）を公刊した。
- (2) *В. Л. Гвоздецкий. “Ученый и время: К 100-летию со дня рождения В. В. Данилевского.” «Вопросы истории естествознания и техники».* 2000. No. 1. С. 112-125（邦訳がある。В. Л. ^{ブエー・エリ}グヴォージェツキー／市川浩訳「学者と時代—В. В. ^{ブエー・ヴェー}ダニレフスキー生誕100周年に寄せて—」, 日本科学史学会技術史分科会『技術史』第2号（2002年）30～45頁）。以下、読者の便宜を考慮し、引用はこの邦訳から採ることとする。
- (3) Архив Российской Академии наук (далее- АРАН), Фонд (далее-Ф.) 154, Опись (далее-Оп.) 2а, Дело (далее-Д.) 10а, лл. 1-13.
- (4) マルは「言語は上部構造」に属すると規定し、西欧言語学＝印欧祖語派を激しく批判した。しかし、その死後、スターリン自身が執筆し、党機関紙『プラウダ』紙上に発表された論文「言語学におけるマルクス主義について」（*И. В. Сталин. “Относительно марксизма в языкознании.” «Правда».* 20 июня 1950）で、今度は、そのドグマティズムが激しく批判されることになる。とはいえ、この当時はその影響下に「国立物質文化史アカデミー（Государственная академия истории материальной культуры: ^{ガイムク}ГАИМК）」を名乗る研究者集団が活発に活動していた。ガイムクとその技術史との関連については本書第4章参照。
- (5) АРАН, Ф. 154, Оп. 2а, Д. 10а, л. 12
- (6) Там же.
- (7) Там же.
- (8) АРАН, Ф. 154, Оп. 1, Д. 21, л. 25.
- (9) АРАН, Ф. 154, Оп. 1, Д. 21, л. 220.
- (10) この委員会の第2回目の会合は1935年7月15日に開催されている（АРАН, Ф. 154, Оп. 1, Д. 34, лл. 6, 7-6: 第1回目の開催記録はみつけれなかった）。この段階でこの委員会の幹部会を構成していたのはヴォルィンスキー、ズヴォルィキンとエフゲニー・ラドゥーロフの3名であった。
- (11) Там же, л. 121.
- (12) АРАН, Ф. 154, Оп. 2а, Д. 17, лл. 2-14.
- (13) АРАН, Ф. 154, Оп. 1, Д. 21, лл. 225, 226.
- (14) *Ю. И. Кривоносов. “Институт истории науки и техники: тридцатые – громовые,*

ровые...” «Вопросы истории естествознания и техники». 2002. No. 1. С. 56-59. なお、ガルベルは、1936年4月30日、内務人民委員部レニングラード州管理部により逮捕され、同年12月23日、最高裁判所軍事参事会で禁固10年（公民権剥奪5年、および財産没収）の判決を受けたが、1937年10月10日付内務人民委員部レニングラード州管理部“特別三役”の決定により、「刑罰の高度な措置（Высшая мера наказания: ВМН）」となり、11月4日銃殺が執行された（[https://ru.openlist.wiki/Хаим Иосифович Гарбер](https://ru.openlist.wiki/Хаим_Иосифович_Гарбер) 2019年11月28日閲覧）。

- (15) АРАН, “Историческая справка” к Фонду, 154. С. 4.
- (16) АРАН, Ф. 154, Оп. 1, Д. 99, лл. 10-12 : 「モスクワ技術史部」のメンバーは、部長のズヴォルィキンのほか、ラドゥーロフ、歴史学者ヴァレンチン・ジチャーキン教授、それにダニレフスキーの4名であった。ズヴォルィキンとラドゥーロフは「マルクス主義的技術史委員会」の幹部会メンバーでもあった（注10参照）。
- (17) А. А. Зворыкин. “Ликвидировать до конца последствия Троцкистскр-Бухаринского вредительства на фронте истории науки и техники.” «Вестник Коммунистической Академии». 1937, No. 4-5. С. 15-24.
- (18) Российский государственный архив социально-политической истории, Ф. 17, Оп. 133. Д. 174, лл. 185-187.
- (19) Н. Волков. “[Критика и библиография] В. В. Данилевский. «Очерки истории техники XVIII-XIX вв.». М. Л.; Соцэкгиз. Стр. 356. 1934 г.” «Под знаменем марксизма». No. 4, 1935. С. 200, 201.
- (20) О. Д. Симоненко. «История техники и технических наук: Философско-методологический анализ эволюции дисциплины». М.: 2005. С. 24, 26.
- (21) グヴォージェツキー, 前掲邦訳, 33~40頁.
- (22) В. В. Данилевский. «И. И. Ползунов. труды и жизнь первого русского теплотехника». М.-Л.: АН СССР (Ленинград), 1940.
- (23) В. В. Данилевский. «История гидросиловых установок России до XIX в.». М.-Л.: 1940 г.
- (24) グヴォージェツキー, 前掲邦訳, 34頁.
- (25) 彼がこの時期に執筆し、出版した小冊子には以下のようなものがある。
 - ①『ファシズム —科学と文化の宿敵—』（«Фашизм: заклятый враг науки и культуры». 1941）
 - ②『敵の顔』（«Лицо врага». Свердловск, 1941）
 - ③『アレクサンドル・ネフスキー』（«Александр Невский». Ижевск, 1942）
 - ④『ドミートリー・ドンスコイ』（«Дмитрии Донской». Ижевск, 1942）
 - ⑤『いにしへの精算：1242~1942年 —ドイツ侵略者のスラブ諸民族, バルト沿岸諸国にたいする戦争の概要—』（«Древний счет 1242-1942: Обзор войн немецких захватчиков со славянскими народами и Прибалтийскими странами». Свердловск, 1942）

⑥ 『クジマ・ミーニン —ロシアの国土のための偉大な戦士たち—』(«Кузьма Минин: Великие борцы за русскую землю». Москва, 1942)

⑦ 『ドミートリー・ポジャルスキー』(«Дмитрии Пожарский». Москва, 1942)

いずれも、封鎖下のレニングラードで、疎開地で、困難を極める状況で精力的に書きつづられたものであった。これらは、もっとも長いものでも72頁、多くは10数頁から30数頁、A5～A6版ぐらいのサイズの、本というよりはパンフレットである。『ファシズム —科学と文化の宿敵—』では、アルバート・アインシュタイン、フリッツ・ハーバー、クーラント、マックス・ボルンらをファシズムの犠牲者として描き、ドイツの科学政策、文化政策を徹底批判しているが、『いにしへの精算：1242～1942年』では、アレクサンドル・ネフスキーの事績に遡って、汎スラブ主義を主張し、ソ連によるバルト三国併合を正当化している。その他は、ほとんどがロシア史上の愛国的英雄の伝記である。驚くべきはその重版の多さと印刷数の多さであろう。たとえば、『ファシズム—科学と文化の宿敵—』は初版9万部で、イジェフスク、クィブィシェフ(現、サマーラ)、モスクワ、イルクーツク、ウラン=ウデーと発行地を替えながら7版、『ドミートリー・ドンスコイ』はイジェフスク、モスクワ、クィブィシェフ、スヴェルドロフスク(現、エカチェリンブルク)で6版を重ねている。『いにしへの精算：1242～1942年』は初版1万5千部、『クジマ・ミーニン』にいたっては、初版で25万部である。

(26) グヴォジェツキー、前掲邦訳、35頁。

(27) В. В. Данилевский. «Русская техника». Л.: 1947.

(28) グヴォジェツキー、前掲邦訳、36, 37頁。

(29) 同、41頁。

(30) このような権力への手紙などを手がかりに、ソヴィエト社会の実態と構造に迫ろうとする研究潮流が注目を集めているが、そうした潮流を含め、近年のソヴィエト社会論についての著者なりの紹介として市川浩「ソヴィエト社会論への新視点—最近の科学史研究の成果から—」(関西唯物論研究会『唯物論と現代』第38号、2006年11月、40～52頁)を参照されたい。

(31) А. Зворыкин. ЦК ВКП (б), товарищу Маленкову Г. М. от 15 дек. 1951 г. в /РГАСПИ Ф. 17, Оп. 133 Д. 174. лл. 185-187/.

(32) В. В. Данилевский. «Нартов и “Ясное зрелище машин”». М.: 1958.

(33) グヴォジェツキー、前掲邦訳、38～40頁。

(34) 岡邦雄「技術の歴史的研究—技術史論序説—」、『中央公論』1937年7月号、57～58頁。

(35) 岡邦雄「技術史について(上)」唯物論研究会『唯物論』第57号(1937年)、21頁。

(36) Под общ. ред. А. И. Смирницкого. «Русско-Английский словарь». М.: 1961 г.

(37) 岡、前掲論文(注31参照)、53頁。

結

「マルクス主義技術論」、すなわち、広義にはマルクス主義に基づく技術の社会におけるあり方、社会・経済や文化との関係性の考究、狭義には技術史方法論の探究は、その包括性、体系性のゆえに長く一定の支持・共感を集めてきた。ソ連・東欧における“社会主義”体制の崩壊によって、マルクス主義を壮大な社会実験ののちに“失敗した”社会思想と見る見方が深く広く浸透したが、一方でマルクス主義を公正で客観的な視点から、その内的な理論構成、その影響力の所以を再度俎上に載せようとする、知的運動が起こっている⁽¹⁾。マルクス主義に立つ科学論ということでは、戦前期ソ連における現代物理学をめぐる哲学論争（レーニンによるマッハ主義批判との関連でのマルクス主義の相対性理論や量子力学への態度）が広く関心を集めてきた。科学の国家やイデオロギーとの関係性とともに、マルクス主義科学論の歴史的役割を考察するうえで、興味の尽きない問題である⁽²⁾。

しかしながら、技術史・技術論の分野では惜しむべきことに、科学論に見られるような知的運動はいまだにほとんど見られない。その意味で、本書はソヴィエト・マルクス主義による技術論の社会思想としての形成過程を追う、最初の、包括的な研究となろう。

わが国においては、1930年代、哲学者であった戸坂潤などによる「唯物論研究会」における探究の成果もあり、マルクス主義技術論の影響力が強かった⁽³⁾。特に、ロシア語に堪能であった科学史=技術史研究者の岡邦雄、ロシア語翻訳家の榎本セツが唯物論研究会に紹介したソ連におけるマルクス主義技術論の諸著作が、わが国における技術論の探究に大きく影響したことは想像に難くない。その後、戦後に至っても、ソ連で刊行された、マルクス主義を方法論とする技術史の諸著作はわが国に翻訳・紹介され⁽⁴⁾、少なくない知的影響力を發揮した。

わが国の技術論・技術史研究、ひいては社会思想史全般への影響の大きさにもかかわらず、その“源流”とも言うべき、ソ連における“マルクス主義的技術史”の探究、模索と確立の過程については、資料公開がすすんだ現在も明らかになっているとは言い難い。ロシアにおいても事情は変わらず、数少ない先行研究⁽⁵⁾も、ほぼそのすべてが、「大テロル」の科学史=技術史研究への影響といった、いわば政治史的側面に関心を集中させている。そのため、今日のロシアにおけるマ

ルクス主義に対する方法論的関心の弱まりを反映して、マルクス主義的技術観の形成過程の再検討といった視点から当時の研究の内容を吟味したものはほとんどない。

少なくとも1930年代の前半までは、技術論についても、国家イデオロギーの許容範囲内とはいえ、いくつかのヴァリエントが併存していた。“ソヴィエト・マルクス主義”(今日ではときに侮蔑を込めて呼ばれることもあるが、)が確立される過程にあったソ連で、マルクス主義技術論が、どのような人々によって、どのような探究や討議を経て、どのように体系化されていったのかを明らかにすることは、技術史・技術論の史的展開、ひいては社会思想としてのマルクス主義を公正な史観で洗い直す重要な契機となろう。

本書では、ソ連科学アカデミー・科学史=技術史研究所、国立物質文化史アカデミー、およびソ連邦人民委員会(内閣)附属高等技術教育委員会内「マルクス主義的技術史委員会」において、技術論・技術史の方法論確立に力を尽くした研究者たちの研究活動を追跡し、その全体像を明らかにした。

科学史=技術史研究所は、「地球化学」の創始者のひとりであり、有力な科学行政家にして注目すべき思想家でもあったヴラジーミル・ヴェルナツキー⁽⁶⁾の提唱に基づき組織された「知識史委員会」を前身に1932年に設立された。すでに失脚の途上にあったとはいえ有力な政治家で、マルクス主義の理論家であったニコライ・ブハーリンを所長に戴き、活発な理論活動を展開したが、ブハーリンの最終的失脚、すなわち逮捕(のち銃殺)に連座するかたちで閉鎖され、多くの所員も弾圧された。一方で、この研究所はマルクス主義の科学論・技術論の確立に大きく貢献していた。なかんづく、若い所員ハイム・ガルベルは、ドイツ語版原書にまで遡って原著の用語例を確認するなど、カール・マルクスの『資本論』に精通していたほか、エルンスト・カップ、ルートヴィヒ・ノワレ、フランツ・ルーロー、オズヴァルト・シュペングラーなど「技術の哲学」の領域における古典的な著作を含む、非マルクス主義的な見方に立つ論考も詳細に検討した。こうした当該分野における該博な知識を基礎に、新しいマルクス主義的な技術論を構想していったのである⁽⁷⁾。まず、彼による技術の本質規定、すなわち、「人間の自然にたいする能動的な態度」という規定が、“マルクス主義的”技術論・技術史で当然視されていた「労働手段の体系」としての技術の本質規定とはずいぶん違ったものであることに驚かされる。加えて、彼は産業革命期の技術進歩における原動

機（蒸気機関）の主導性を主張している。これらがどの程度妥当なものであるか、あるいはどのように具体的な表現を付与しうるものなのかは、大いに疑問が残るが、重要なのは、こうした彼の考えが彼の研究のさらなる進化や他者との討論を経て発展されることなく、「大テロル」のさなか、彼の肉体的抹殺とともに中断されてしまったことである。

所長ブハーリン自身も、彼なりの“マルクス主義的技術史”に関する著作を執筆した⁽⁸⁾。興味深いのは、(少なくとも文言上は)彼がかつての悪名高い“均衡理論”から訣別していることであろう。しかし、技術史上のあれこれの事例をパッチワークのように並べ、それらから経験的(帰納法的)に発展の類型を分類し、そこに“弁証法”を“接ぎ木”しているような印象は拭えない。だが、ブハーリンにもさらなる思想的成熟を遂げる時間は残されていなかった。彼も「大テロル」によりその命を絶たれている。

当時、レニングラードでは「国立物質文化史アカデミー」を名乗る研究者集団が活発に活動していた。もともと考古学分野の研究機関であったため、非文字人工遺物の研究に精通しており、その視点から、原始から現代までの人類の歩みにアプローチしようとする壮大な構想をもっていた。この立場から、彼らは“マルクス主義的技術史”に替わる概念装置として、“物質文化史”を提唱する。考古学者ヴラジスラフ・ラヴドニカスは、党中央委員会総会による高等工業教育への“マルクス主義的技術史”導入決定(これは同時にこの科目を担当する教員ポストの大幅増加を意味した)を意識しつつ、マルクス『資本論』第1巻第13章注89の、“批判的なテクノロジーの歴史”の必要性・重要性を強調した有名な章句⁽⁹⁾を引用して、長大な論文⁽¹⁰⁾を執筆し、“物質文化史”の技術史に対する優位性を主張する。彼の主張は、ただちに若い歴史家イヴァン・スミルノフの強烈な反論⁽¹¹⁾に遭遇する。しかし、論争はそれ以上の展開をみせることなかった。そして、そもそも十分な準備のなかったこの構想は一種の自壊作用により消滅してゆく。このことは、ラヴドニカスらが従来からの考古学の守備範囲以外では“物質文化史”の具体的な研究方法を示しえなかったこと、論争を通じてその学術的な内容と方法が具体的に深められなかったこと、要員の養成に失敗したことなどによるものである。加えて、強烈な指導力を発揮したニコライ・マルが亡くなったことにより、“物質文化史”の構想はあとには続かなかった。

かくして、「大テロル」などの激動をくぐり抜け、生き延びることができた唯一

の“マルクス主義的技術史”が、政府高等技術教育委員会「マルクス主義的技術史委員会」においてオーソライズされたそれということになる。

1929年11月の全連邦共産党（ポリシェヴィキ）中央委員会総会が掲げた高等工業教育機関への“マルクス主義的技術史”導入という政策課題は十分な準備なしに提起されたものであり、現場の教員に混乱をもたらすと同時に献身的な努力を要請するものであった。しかし、“マルクス主義的技術史”創造の遅々たる歩みに焦燥を感じた高等技術教育委員会議長、“レーニンの戦友”グレブ・クルジジャンフスキーはその右腕アナトーリー・ズヴォルィキンを介入させる。彼が“下敷き”としたのは、党活動家＝イデオログであったニコライ・ヴォルコフの論文⁽¹²⁾であった。まさに、この論文こそが、その後「労働手段体系説」と呼ばれることになるマルクス主義技術論の“源流”となった。この論文はわが国にも紹介され⁽¹³⁾、相川春喜に支持されることで、わが国マルクス学派の“正統派的”見解ともなった。また、この論文の要点は、戦後ズヴォルィキンによって踏襲・敷衍され⁽¹⁴⁾、これまた、岡邦雄によって日本に紹介され⁽¹⁵⁾、「労働手段体系説」の理論的な拠り所（の、少なくともひとつ）となった。

ズヴォルィキンはマルクスのドイツ語原書に立ち帰り、「非マルクス学派」の学説をも深く検討するガルベルの姿勢を“スコラ主義”と断じ、[[マシネリとは、]多くの場合、より広く、機械の体系、機械制生産だと理解しなければならない、ということがわかるためには、マルクス・レーニンのテキストに親しむだけで充分である]⁽¹⁶⁾と断言する。ここに彼ら（クルジジャンフスキー、ズヴォルィキン、ヴォルコフら）の立ち位置が現れている。彼らの目的は、「古い専門家の一部が直接的な妨害への道に進んだ」⁽¹⁷⁾なかで“新しい技術インテリゲンチヤア”を創造することにあつた。彼らにとって重要なのは、諸学説を吟味し、マルクス主義の原典を研究してアカデミズムによる検証に耐えられる学説を打ち立てることではなく、工業専門学校における要員養成に便利な技術史・技術観を確立することであつた。

本書によって、「労働手段体系説」の舞台裏が明らかとなった。マルクス主義の歴史的退潮は重々承知しつつ、ここから、「労働手段体系説」、あるいはさらに広くマルクス主義技術論・技術史方法論の、公正な史観に基づく見直しが進むことを期待したい。

注

- (1) F.ex. John F. Sitton, *Recent Marxian Theory: Class Formation and Social Conflict in Contemporary Capitalism*. SUNY Press, 1996.
- (2) 金山浩司『神なき国の科学思想—ソヴィエト連邦における物理学哲学論争—』（東海大学出版部，2018年）を参照されたい。
- (3) これについては中村静治『技術論論争史 上・下』（青木書店，1975年）、嶋啓『技術論論争』（ミネルヴァ書房，1977年）が有力な手がかりになる。
- (4) ヴェ・ダニレフスキイ著／岡邦雄・榎本セツ訳『近代技術史』（三笠書房，1937年）をはじめ，エリ・デー・ベリキンド他／邦訳『技術の歴史』（岩波書店，1956年），ソ連邦科学アカデミー（アー・アー・ズヴォルィキンら）／邦訳『技術の歴史 1・2』（東京書籍，1966年），ソ連科学アカデミー編／金光不二夫他訳『世界技術史—太古から産業革命まで—』（大月書店，1986年）など。
- (5) См. А. Н. Дмитриев. “Институт истории науки и техники в 1932-1936 гг.” «Вопросы истории естествознания и техники». No. 1, 2002 г. С. 3-41; Ю. И. Кривоносов. “Институт истории науки и техники: тридцатые – громовые, роковые……” Там же, С. 42-75. Т др.
- (6) その思想については，ヴェルナツキイ・梶雅範訳『ノースフェーラー—惑星現象としての科学的思考—』（水声社，2017年）を参照されたい。
- (7) См. Х. И. Гарбер. “Проблема Maschinerie у Маркса.” «Архив истории науки и техники». Вып. V, С. 1–56.
- (8) Н. И. Бухарин. «Техника и экономика современного капитализма». Ленинград: Изд-во АН СССР, 1932 г.
- (9) 「もし批判的な技術学史があれば，それは，およそ，18世紀のどの発明も一個人のものであることがいかに少ないかを，証明するであろう。これまでのところ，このような著作は存在していない。ダーウィンは，自然の技術学の歴史に，すなわち，動植物の生活のための生産用具としての動植物の諸器官の形成に関心を向けた。社会的人間の生産諸器官の形成史，すなわち，特殊な各社会組織の物質的土台の形成史も，同じような注意に値するのではないか？……」（カール・マルクス／日本共産党中央委員会社会科学研究所監修『新版 資本論』第1巻第3分冊，新日本出版社，2020年，654～655頁）。
- (10) В. И. Равдоникас. “За марксистскую историю материальной культуры.” «Известия Государственной Академии истории материальной культуры». Том VII, Выпуск III-IV, Ленинград. 1930. С. 5-94.
- (11) И. И. Смирнов. “Возможна ли “марксистская история материальной культуры” ?” «Сообщения Государственной Академии истории материальной культуры». Вып. 1-2 (1932), С. 38-46.

- (12) Н. Волков “Некоторые вопросы истории науки и техники.” «Под знаменем-марксизма». No. 4, 1933. С. 153. 当時、著者はモスクワ航空専門学校技術史教室主任であつた。
- (13) N. ヴォルコフ／哲学研究会訳「科学史及び技術史の若干の問題」、『マルクス主義の旗の下に』27輯，白楊社，1934年6月。
- (14) А. А. Зворыкин. “О некоторых вопросах истории техники.” «Вопросы философии». 1953 No. 6, С. 32–45.
- (15) 岡邦雄『新しい技術論』春秋社，1955年。
- (16) А. А. Зворыкин. “Ликвидировать до конца последствия Троцкистско-Бухаринского вредительства на фронте истории науки и техники.” «Вестник Коммунистической Академии». 1937, No. 4–5. С. 19.
- (17) А. Зворыкин. “Основные вопросы преподавания и изучения истории техники.” «История техники». Сборник No. 1, Москва; Изд-во “За индустриализацию.” 1934. С. 5. 1928年10月，ドンバス地方で発生した“ブルジョア専門家”による“反革命サボタージュ事件”，いわゆる「シャフトイ事件」を指す。「シャフトイ事件」とその政治史的文脈については，中嶋毅『テクノクラートと革命権力—ソヴィエト技術政策史 1917～1929—』（岩波書店，1999年）を参照されたい。

あとがき

おそらく1979年の秋(もう冬に近かったと記憶しているが)、大学祭に出店していたある書店のブースで、当時左翼論壇に影響力のあった雑誌『現代と思想』の創刊号から第38号がまとめて売られていた。『現代と思想』は、青木書店が年4回刊行していた総合誌で、1970年代の10年間、創刊号から第40号(終刊号)まで刊行され、1980年に停刊となった(この段階では、第39巻、第40巻はまだ刊行されていなかった)。この雑誌がおもしろいことは以前から知っていたので、思い切って38冊を一括購入し、アパートで読みふけた。その第12号(1973年6月刊。特集「科学・技術革命と現代」)に掲載されていた諸論稿、とくに加藤邦興の「公害論と技術論」に深い感銘を受けた。そこで“技術論”と呼ばれる研究分野があることを知り、強い関心を抱いた。文系の学生にはやや縁遠いものではあったが、ものづくりのありようから人類史全体までを語りうるかのような壮大なパースペクティブに魅力を感じた。

それ以前から、大学院に進学し、将来研究者となることを漠然と考えていたが、技術論、もしくはそれが活かせる社会科学の分野での進学をめざすようになった。最終的に加藤邦興先生が移ってこられていた大阪市立大学の経営学研究科に進学、以降あしかけ8年、加藤ゼミに在籍した。

また、大学院進学直後、ちょうど横浜国立大学を退官され、阪南大学に移ってこられた技術論の泰斗、中村静治先生を招いて、「中村静治先生を囲む技術論若手の会」が定期開催され、さまざまな分野から若手大学教員や院生が集まっていた。「技術=労働手段体系説」の代表的論者として当時も旺盛な執筆活動、それもかなり論争的な性格の強い言論活動を展開されていた中村氏は、わたしのアイドルでもあった。“存在は意識に先行する”との唯物論の大原則を盾に、さまざまな異論を斥ける論理展開は痛快でさえあった。

しかし、「客観的法則性の意識的適用」が技術の本質ではないことには納得できても、それに一辺の活躍の場をも与えない論理構成にはいささかのフラストレーションを感じた。このフラストレーションを抱いた対象は、約40年の歳月を経て、金山浩司によって「(極度の)客観主義」という的確な表現をえることになるが、今から考えると、当時のわたしはこのフラストレーションを「技術の内的発達法則説」批判にぶつけてみたということになるうか。

しかし、この論争が十分な展開を見せることはなかった。その後、マルクス主義は急速に“同時代の関心事”ではなくなっていった。2023年7月29日、日本科学史学会京都支部・阪神支部の合同例会で本書の問題意識を語らせていただいたが、わたしの前の発表者の報告と質疑応答が終わると、何人もの参加者がそそくさと帰っていった。

わたしは、上記の論争の後、旧ソ連を対象とする科学史的・技術史的な実証研究に取り組んでいった（その行程については、自慢話の類ながら、市川浩【覚書】“ソヴィエト科学・技術”の探究—研究を振り返って— 同人誌『イル・ザジアトーレー—IL SAGGIATORE—』第50号、2023年、72～83頁—にまとめた）。そして、時を経て、自分に課した研究課題の遂行にほぼ見通しがつき、かつアカデミック・キャリアの終わりが見通せるようになった数年前から、まるで円環を閉じるかのように、かつてのフラストレーションに立ち還っていくことになった。

幸いにも、かなり前から、ソ連時代のかつての機密文書が見られるようになっており、新しく発掘された史実を基礎に新鮮な眼で問題に迫りうる条件が生まれていたし、これも幸いなことに、2019年度より科研費をちょうだいし（日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「マルクス主義技術論の源流—ハイム・ガルベル(1903～1936年)とその周辺—」)、コロナ禍にもかかわらず、ロシアの友人の手助けもあり、資料調査を旺盛に実施することができた。

“あのおとき見たもの”は一体何であったのだろうか。本書は、わたし自身の技術論の“源流”をたずねる探究に捧げられている。その意味で本書は、ソヴィエト生物学史の泰斗ヴァレリー・ソィフェルの著書(*B. H. Со́йфер. «Очень личная книга»*. Новосибирск: Infolio-Press, 2011)の響みに倣って、“きわめて個人的な書物”と言うことができる。そして、本書の一応の結論は、「労働手段体系説」が、1930年代、技術者養成が急がれたソ連で、主に10代後半の技術者志望の学生に技術史を教える（そのために技術史を叙述する）のに便利な技術観として、他の見方を圧殺して定式化されたものにほかならなかったということであった。本書のメイン・タイトルを『“技術論”の源流をたずねて』としたのは、新しい資料的条件のもと、源流の確認のみならず、源流をたずねる（「尋ねる」と「訪ねる」の両方を兼ねる）ことで発掘できた“ありえた歴史のオルタナティヴ”を大切に思うからである。

ところで、ハイム・ガルベルらがそこでマルクス主義技術論の探究に勤しみ、

やがて「大テロル」の中で閉鎖されたソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所が刊行していた『科学史=技術史アーカイヴ («Архив истории науки и техники»)』は、本国では回収・廃棄の措置が執られたにもかかわらず、驚くべきことに、同時代の日本に輸入され、今にいたるまで保管されている。第5巻、第9巻を除く7冊が、遅くとも1940年までに東北帝国大学の図書館に納入されていた。誰が、どのような経緯でこれを購入したのであろうか。2023年2月6～8日、東北大学に出向き調査したが、多くの関連史料が戦災で焼失していることもあり、何も手がかりをえることはできなかった。いずれにせよ、たとえ、同誌所載の諸稿を読んだ人物がいたとしても、この研究所の研究成果が戦前・戦中の日本の論壇に影響を与えることはなかったことは確実であるが、やはり気にかかる。本書読者のうち、東北大学所蔵の同誌について、何か知っておられる方がいらっしゃれば、この際、ぜひご教示いただきたい。

ここでひとつ、この間寄せられた疑問に応えておきたい。先に挙げた日本科学史学会京都支部・阪神支部合同例会での発表の後、「市川さんはご自身の先生を批判されるのですね」との質問をいただいた。恩師加藤邦興も、確かに「労働手段体系説」に立っていた。しかし、加藤氏も、中村静治流の「労働手段体系説」にある“極度の客観主義”には不満を持っておられたように思う。日常の会話のなかで、氏が「技術力」と「技術開発力」を区別しない中村技術論への不満を述べられるのを何度か耳にしたことがある。こうした不満は、氏をして、「技術開発力」誕生の現場、いわば「客観的法則性の意識的適用」が日々行われている場であるともいえる「工学」の学術としての特性、その社会科学的諸要素を探るべく、近代工学の形成史研究に向かわせることとなった(加藤邦興「評伝：W.J.M.ランキン」大阪市立大学経営研究会『経営研究』第36巻第4号、1985年11月、1～18頁、など)。そのヨーロッパ留学の成果でもあった加藤氏の工学形成史研究は、しかし、その後の多忙、病氣、早逝により中断してしまった。

加藤先生が工学形成史研究に向かっていた1980年代、ちょうどソ連では「科学技術革命論」の発展として、工学の哲学的再検討が盛んにおこなわれていた時期であり、消化不良に終わったとはいえ、わたしもそうした潮流を紹介する論稿(市川 浩「最近のソ連邦における技術学の認識論的研究について」、『経営研究』第40巻第2号、1988年7月、67～77頁)を発表したこともある。その後、ソ連が解体し、ソ連における工学論研究も中断したため、また、わたし自身、その就職

(1989年)後、授業準備に忙殺されたため、こうした課題は長期にわたり“休眠”状態となった。

本書の準備過程で、解体直前のソ連において、「科学技術革命」が鼓吹されるなか、「技術論」(Техническоеведение)、「技術の哲学」(Философия техники)が、とくに哲学分野における探究の大きな課題となり、多数の著作が生まれていたことを改めて知った。

これも“あのとき見たもの”となるるか。「科学技術革命論」といえば、その日本における代表的論客であった芝田進午先生(『科学=技術革命の理論』青木書店、1971年)と、畏れ多いことながら、わずかに3年間とはいえ、広島大学での“同僚”であった。また、アカデミック・サイエンスとしての技術史学を切り開かれた山崎俊雄(いつとき広島大学教授でもあられた)先生とともに、「科学技術革命論」のマニフェスト的な大著、ソ連邦科学アカデミー他編『人間・科学・技術—科学技術革命のマルクス主義的分析—〔上〕,〔下〕』(大月書店、1975年)の翻訳に当たられた中峯照悦先生は、わたしを広島大学へ採用していただいたときの選考委員会主査であられた。これも縁であろう。この領域における研究の“休眠”を解き、あの時代のソ連版「技術論」の正体を探ることで、自分の研究生活を締めくくってゆきたいと考えている。幸い、新たに科研費もいただけることとなった。これで、後続の若い(といっても、今となっては、知己のほとんどが中堅以上というべき年齢ではあるが、……)研究者には煙たがられながら、老骨に鞭打つことになった。

本書が世に出るまで多くの方々にお世話になった。まず、広島大学出版会で審査に当たられた先生方、外部査読をお引き受けいただいた先生(当然、お名前はわからないが)、そして丁寧な編集指導をしていただいた同会の上田大輔さん、横山博文さんをはじめ、関係者の方々には深甚な感謝を捧げたい。また、本書に関連したテーマで様々な議論いただいた山崎正勝先生(東京工業大学名誉教授)、藤岡毅先生(大阪経済法科大学客員教授)、金山浩司先生(九州大学)、齋藤宏文先生(九州工業大学)に心から感謝申し上げる。また、北林雅洋先生(香川大学)にも貴重なご教示をいただいた。本書を構成する諸稿について、それぞれの発表時に日本科学史学会、その西日本研究大会、京都支部・阪神支部合同例会、そして第26回科学史国際会議(26th International Congress of the History of Science and Technology. Prague, 2021)で研究発表をさせていただいたが、こうした機会をお与えいただいた先生方、貴重なご質問、コメントをちょうだいした方々に感謝し

たい。そして、新型コロナ・ウィルス感染症予防措置、ロシア軍のウクライナ侵攻のため、現地に飛んで資料調査を実施することが難しくなったなか、多くのロシアの方々に貴重な研究情報をお届けいただいた。ここで彼らの言葉で謝辞を述べることをお赦しいただきたい。

Автор книги благодарит за научную помощь следующих лиц: Константин Александрович Томилин (ИИЕТ), Оксана Даниловна Симоненко (тоже), Ольга Борисовна Бокарева (Архив РАН), Наталия Сергеевна Порохоренко (СПб АРАН), Сергей Николаевич Корсаков (ИФ РАН), Олег Александрович Устинов (тоже), Елена Александровна Горская (Рукописный отдел научного архива ИИМК), Екатерина Матвеевна Колосова (РГПУ), Константин Сергеевич Дроздов (ИРИ РАН), Иван Михайлович Чиж (Первый МГМУ), Марина Юрьевна Черниченко (тоже), Наталья Снытко (МГОУ) и дорогие друзья мои.

なお、本書は、2019～2022年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)「マルクス主義技術論の源流—ハイム・ガルベル(1903～1936年)とその周辺—」[研究代表者—市川浩：課題番号19K00271A]による研究成果である。

本書の骨格部分が書かれた2023年は、『労働の機械化史論』(溪水社、1992年)の著者でもあった中峯照悦先生が亡くなって10年目に当たっていた。今さらであるが、この拙い、文字通りの小著を、感謝の意を込めて、泉下の中峯先生に捧げたい。

“あのと看見たもの”といえは、研究者としてではなく、ひとりの老人として、ここ数年、幼い日に身近にいた人々がふと漏らしたひとこと、ふと垣間見せたしぐさがどうしようもなく気になるときがある。——あれはいつたい何だったのだろうか。今からでもそれを知るために子どものころの思い出を取り戻したいと思う。マルクスは、「子供の真実」の価値を認めながらも、「おとなは二度と子供にはなれない。なるとすれば[もうろくして]子供じみるのである(カール・マルクス／岡崎次郎訳【遺稿】「[経済学批判への]序説」, 大月書店版『マルクス・エンゲルス全集』第13卷, 1964年, 638頁)と述べている。[もうろく]したくはないが、子どもにはもどりたいたも考へている。

2024年3月 初春の北京にて

人名索引

- 相川春喜(本名, 矢浪久雄 1909~1953) ……2, 3, 4, 6, 7, 13, 15, 19, 21, 31, 41, 130
 アスマス, ヴァレンチン(Valentin Фердинандович Асмус. 1894~1975) ……38
 アッシャー, アボット(Abbot Payson Usher. 1883~1965) ……12
 アボガドロ, ロマーノ=アメディオ(Lorenzo Romano Amedeo Carlo Avogadro. 1776~1856) ……100
 イヴァニツキー, セルゲイ(Сергей Фёдорович Иваницкий. 1888~1942) ……21, 22, 26, 27, 31, 34, 36, 38-40, 112
 イヴァネンコ, ドミートリー(Дмитрий Дмитриевич Иваненко. 1904~1994) ……49
 石谷清幹(1917~2011) ……5
 市川浩 ……5, 14-17, 32, 57-59, 63, 77, 98, 102, 112, 123, 125, 134, 135, 137
 イリインスキー, I.(И. Ильинский. 名・父称・生没年等不詳) ……31
 岩崎允胤(1921~009) ……37, 106, 112, 113
 ヴァヴィーロフ, セルゲイ(Сергей Иванович Вавилов. 1891~1951) ……44, 47, 49, 51, 58, 81
 ヴァヴィーロフ, ニコライ(Николай Иванович Вавилов. 1887~1943) ……47, 59
 ヴァシーリエフ, セルゲイ(Сергей Фёдорович Васильев. 1898~1937) ……43, 46, 54, 57, 58, 80
 ヴェルナツキー, ヴラジール(Владимир Иванович Вернадский. 1863~1945) ……44, 45, 56, 128, 131
 ヴォルインスキー(Волынский. 名・父称等不詳) ……123
 ヴォルコフ, ニコライ(Николай Сергеевич Волков. 1907~?) ……7, 8, 14-16, 19-26, 28, 30-32, 34, 35, 39, 41, 43, 57, 112, 119, 122, 130, 132
 ウスチーノフ, オレグ(Олег Александрович Устинов) ……37, 40
 内山弘正(1915~1995) ……30, 39
 ウラノフスキー, ヤーコヴ(Яков Маркович Урановский. 1896~1936) ……54
 エジョフ, ニコライ(Николай Иванович Ежов. 1895~1940) ……62
 エフドキーモフ(Евдокимов. 名・父称など不詳) ……117
 エプシュテイン, モイセイ(Моисей Соломонович Эпштейн. 1890~1938) ……95
 エンゲリマイエル, ピョートル(Пётр Климентьевич Энгельмейер. 1855~1942) ……102
 エンゲルス, フリードリヒ(Friedrich Engels. 1820-1895) ……34, 58, 81
 岡邦雄(1890~1971) ……7, 15, 16, 57, 115, 119, 121-123, 125, 127, 130-132
 オシンスキー, ヴァレンチン(Valentin Валерианович Осинский—本姓Оболенский—
 一. 1887~1938) ……56, 63
 オリデンブルク, セルゲイ(Сергей Фёдорович Ольденбург. 1863~1934) ……47, 53, 57

- オルロフ, イーゴリ (Игорь Борисович Орлов) ……62
 カップ, エルンスト (Ernst Kapp. 1808～1896) ……9, 26-28, 65, 75, 128
 加藤邦興 (1943～2004) ……6, 14, 133, 135
 金光不二夫 (1927～2000) ……35, 81, 131
 金山浩司 ……3, 4, 8, 9, 13, 16, 17, 58-60, 63, 100, 105, 112, 131, 133, 136
 カルノー, サディ (Nicolas Léonard Sai Carnot. 1796～1832) ……80
 ガルベル, ハイム (Хаим Иосифович Гарбер. 1903～1937) ……8-10, 26, 37, 43, 46, 47, 51, 54, 55, 57, 61, 63, 65-82, 105, 115, 117, 118, 124, 128, 130, 134, 137
 キセリョフ, ミハイル (Михаил Юрьевич Киселёв) ……16
 キパリーゾフ, フョードル (Фёдор Васильевич Кипарисов. 1886～1936) ……98, 100, 101
 北林雅洋 ……136
 木本忠昭 ……1, 6, 12
 グーロフ (Гуров. 名・父称, 伝記の詳細不明) ……25, 29
 グヴォジュツキー, ヴラジーミル (Владимир Леонидович Гвоздецкий) ……102, 115, 119, 120, 123-125
 グコーフスキー, イシドール (Исидор Эммануилович Гуковский. 1871～1921) ……56
 グコーフスキー, マトヴェイ (Матвей Александрович Гуковский. 1898～1971) ……24, 44, 46, 48-52, 54, 56, 81
 クズネツォフ, ボリス (Борис Григорьевич Кузнецов. 1903～1984) ……24, 35
 クリヴォノゾフ, ユーリー (Юрий Иванович Кривоносос) ……44
 クリチェフスキー, エヴゲニー (Евгений Юрьевич Кричевский. 1910～1942) ……98
 クリビン, イヴァン (Иван Петрович Кулибин. 1735～1818) ……50
 クルジジャンォフスキー, グレブ (Глеб Максимилианович Кржижановский. 1872～1959) ……7, 19, 27, 54, 55, 73, 79, 117, 130
 グレヴス, イヴァン (Иван Михайлович Гревс. 1860～1941) ……46
 ゲッセン, ボリス (Борис Михайлович Гессен. 1893～1936) ……46, 59
 ケレル, ボリス (Борис Александрович Келлер. 1874～1945) ……47, 48, 59
 ゲローヴィッチ, スラーヴァ (Slava Gerovitch) ……60
 コーエン, ステイーヴン (Stephen Frand Cohen. 1938～2020) ……112
 ゴールドマン, ウェンディ (Wendy Z. Gold man) ……17, 62, 80
 コーロソヴァ, エカチェリーナ (Екатерина Матвеевна Колосова) ……36
 コスミンスキー, エフゲニー (Евгений Алексеевич Косминский. 1886～1956) ……53, 54
 ゴリムステン, ヴェーラ (Вера Владимировна Гольмстен. 1880～1942) ……98
 コルサコフ, セルゲイ (Сергей Николаевич Корсаков) ……17, 59, 112
 ゴルブノーフ, ニコライ (Николай Петрович Горбунов. 1892～1938) ……54, 63, 64,

118

コンラード, ニコライ (Николай Иосифович Конрад. 1891~1970)	……98
齋藤宏文	……136
三枝博音 (1892~1965)	……2, 4, 12
佐々木力 (1947~2020)	……7, 15
ザパタ, ルネ (René Zaapada)	……60, 99, 112
塩川伸明	……112
シチョーゴレフ, パーヴェル (Павел Павлович Щёголев. 1903~1936)	……53
ジチャーキン, ヴァレンチン (Валентин Тихонович Дитякин. 1896~1956)	……124
芝田進午 (1930~2001)	……136
嶋啓 (1910~1995)	……131
シモネンコ, オクサーナ (Оксана Даниловна Симоненко)	……8, 15, 44, 57, 58, 65, 77, 83, 98, 119
ジャーコフ, ミハイル (Михаил Петрович Жаков. 1893~1936)	……98
ジューコフ, エヴゲニー (Евгений Михайлович Жуков. 1907~1980)	……98
シュペングラー, オズヴァルト (Oswald Arnold Gottfried Spengler. 1880~1936)	……9, 12, 65, 75, 128
スヴェトロフ, А (А. Светлов 名・父称など不詳)	……96
ズヴォルィキン, アナトーリー (Анатолий Алексеевич Зворыкин. 1901~1988)	……7, 8, 15, 24, 25, 27, 29, 30, 32, 38-40, 55, 66, 67, 69, 73, 75-77, 79-81, 112, 113, 115, 117, 118, 120, 123, 124, 130, 131
スターリン, ヨシフ (Иосиф Виссарионович Сталин. 1878~1953)	……7, 10, 11, 37, 44, 46, 49, 54, 58, 60, 62, 66, 84, 99, 105, 112, 123
ステツキー, アレクセイ (Алексей Иванович Стецкий. 1896~1936)	……38
ストルミーリン, スタニスラフ (Станислав Густавович Струмилин. 1877~1974)	……40, 51
スヌイトコ, ナターリヤ (Наталья Снытко)	……33
スミルノフ, イヴァン (Иван Иванович Смирнов. 1909~1965)	……9, 91-94, 103, 129
関恒義 (1924~1993)	……105, 106, 112, 113
ソィフェル, ヴァレリー (Валерий Николаевич Сойфер)	……134
ソシュール, フェルディナン・ド・ (Ferdinand de Saussure. 1857~1913)	……99
ソスノフスキー, ゲオルギー (Георгий Петрович Сосновский. 1899~1941)	……98
ゾンバルト, ヴェルナー (Werner Sombart. 1863~1941)	……12, 27
武谷三男 (1911~2000)	……4, 13, 30, 113
立石洋子	……17, 62, 80
田辺振太郎 (1907~87)	……5, 14
田中克彦	……85, 98, 99

- ダニレフスキー, ヴィクトル (Виктор Васильевич Данилевский. 1898~1960) ……7,
 8, 21, 22, 73, 80, 83, 85, 89, 90, 99, 102, 115-124, 131
 ダルムシュテッター, ルートヴィヒ (Ludwig Darmstaedter. 1846~1927) ……102
 ダンネマン, フリードリヒ (Friedrich Dannemann. 1859~1936) ……24, 34, 35, 50
 チージュ, イヴァン (Иван Михайлович Чиж) ……33
 チェルニチェンコ, マリーナ (Марина Юрьевна Черниченко) ……33
 チコバーヴァ, アルノリト (Арнольд Степанович Чикобава. 1898~1985) ……60
 チーホノヴァ, マリア (Мария Александровна Тиханова. 1898~1981) ……89, 97
 ツェイトリン, エフゲニー (Евгений Александрович Цейтлин. 1907~?) ……40, 48,
 50
 ツェイトリン, ザハール (Захар Аронович Цейтлин. 1898~?) ……48-50, 58
 ディールス, ヘルマン (Hermann Alexander Diels. 1848~1922) ……50, 51
 デッサウアー, フリードリヒ (Friedrich Dessauer. 1881 ~ 1963) ……12
 デボーリン, アブラム (Абрам Моисеевич Деборин. 1881~1963) ……10, 11, 17, 44,
 46, 52, 59, 85, 112
 戸坂潤 (1900~1945) ……2, 4, 7, 12, 13, 16, 57, 127
 ドミートリエフ, アレクサンドル (Александр Николаевич Дмитриев) ……44, 50, 57,
 58
 トミーリン, コンスタンチン (Константин Александрович Томилин) ……44, 58
 ドロズドーフ, コンスタンチン (Константин Сергеевич Дроздов) ……33
 トロツキー, レフ (レオン) (Лев Давидович Троцкий. 1879~1940) ……31, 39, 40, 66
 中嶋毅 ……17, 37, 59, 62, 80, 132
 永田廣志 (筆名, 君島慎一 1904~1947) ……12, 13
 中峯照悦 (1929~2013) ……136, 137
 中村静治 (1916~1997) ……2, 5-7, 13, 14, 37, 41, 123, 131, 133, 135
 檜崎輝 (Ludwig Noiré. 1829~1889) ……113
 ノワレ, ルートヴィヒ (Карл Янович Бауман. 1892~1937) ……9, 27, 65, 75, 128
 バウマン, カルル (Карл Янович Бауман. 1892 ~ 1937) ……46
 パセク, タチヤーナ (Татьяна Сергеевна Пасек. 1903~1967) ……98
 ハーリク, ゲアハルト (Gerhard Harig : ロシア名, Гервард Эрвинович Гариг. 1902~
 1966) ……50, 51, 56
 原田佳彦 ……60, 99, 112
 早川次郎 (本名, 小出民声 1906~1937) ……83, 98, 101
 ブィコフスキー, セルゲイ (Сергей Николаевич Быковский. 1896~1936) ……98
 ブーブノフ, アンドレイ (Андрей Сергеевич Бубнов. 1884~1938) ……63
 藤岡毅 ……13, 16, 41, 59-61, 100, 112, 136
 ブハーリン, ニコライ (Николай Иванович Бухарин. 1888~1938) ……10, 11, 13, 28,

31, 32, 37, 40, 41, 44-47, 52-58, 61, 66, 73, 81, 105-114, 117, 119, 128, 129	
フリック, ヴィルヘルム (Wilhelm Frick. 1877-1946)	……32
プレトネル, オレグ (Олег Викторович Плетнер. 1893~1929)	……98
ベッソーノフ, セルゲイ (Сергей Алексеевич Бессонов. 1892~1941)	……70, 79
ベリキン, レフ (Лев Давидович Беликин. 1896 ~ 1969)	……131
ベルトレ, クロード=ルイ (Claude Louis Berthollet. 1748~1822)	……34
ボガエフスキー, ボリス (Борис Леонидович Богаевский. 1882~1942)	……53, 54
ポクロフスキー, ミハイル (Михаил Николаевич Покровский. 1868~1932)	……24
ポクロフスキー, ユーリー (Юрий Михайлович Покровский. 生没年等不詳)	……24
星野芳郎 (1922~2007)	……4, 5, 14
ボッフア, ジュゼッペ (Giuseppe Voffa. 1923~1998)	……62
ポラック, レフ (Лев Соломонович Полак.—しばしばПоллакと表記されている— 1908~没年不詳)	……49
ポロック, イーサン (Ethan Pollock)	……60
ボロトニコフ, イヴァン (Иван Болотников. 1565 ~ 1608)	……102
榎本セツ (1912~?)	……7, 12, 115, 127, 131
松井康浩	……17, 62, 80
マツチョス, コンラート (Conrad Matschoß. 1871~1942)	……89, 102
マラー, ハーマン (Герман Джозеф Мёллер. 英語名, Hermann Joseph Muller 1890~ 1964. 1946年ノーベル生理学・医学賞受賞。一時, ソ連に滞在)	……51, 61
マル, ニコライ (Николай Яковлевич Марр. 1865~1934)	……49, 60, 83-86, 95, 97-99, 103, 115, 116, 123, 129
マルクス, カール (Karl Marx. 1818~1883)	……5, 9, 23, 25, 26, 28, 37, 39, 45, 48, 54, 65-72, 74-76, 79, 82, 87, 89, 92, 100, 101, 122, 128-131, 137
マンフォード, ルイス (Lewis Munford. 1895~1990)	……1, 12
ミシュエリン, アレクサンドル (Александр Васильевич Мишулин. 1901~1948)	…… 21, 25, 29, 34, 35, 38
ミーチン, マルク (Марк Борисович Митин [Гершкович]. 1901~1987)	……10, 11, 14
ミトケーヴィチ, ヴラジーミル (Владимир Фёдорович Миткевич. 1872~1951)	…… 47, 49, 56, 59
ミレル, アレクサンドル (Александр Александрович Миллер. 1875~1935)	……98
ミローノフ, ユーリー (Юрий Константинович Милонов. 1895~1980)	……16, 21, 24, 25, 27, 28, 31, 34-36, 39, 41
メシチャニーノフ, イヴァン (Иван Иванович Мещанинов. 1883~1967)	……98
モーア, アーロン (Aaron Moore. 1972~2019)	……3, 13
山崎俊雄 (1916~1994)	……2, 6, 12-15, 81, 136
山崎正勝	……14, 136

- ユージン, パーヴェル (Павел Фёдорович Юдин. 1899~1968) ……11
- ラヴドニカス, ヴラジスラフ (Владислав Иосифович Равдоникас. 1894~1976) ……9,
85-88, 91-94, 96, 97, 100, 103, 129
- ラーツィク, アレクサンドル (Александр Александрович Радциг. 1869~1941) ……
48, 49, 52, 53, 80, 81
- ラドゥーロフ, エフゲニー (Евгений Фёдорович Радулов. 1905~?) ……123, 124
- ラリツェヴィチ, ヴァシーリー (Василий Никифорович Ральцевич. 1893~1970)
……10
- ランドス, デーヴィド (David S. Landes. 1924~2013) ……77
- リフシン, アレクサンドル (Александр Яковлевич Лившин) ……62
- ルィコフ, パーヴェル (Павел Сергеевич Рыков. 1884~1942) ……98
- ルィニン, ニコライ (Николай Алексеевич Рынин. 1877~1942) ……53, 61
- ルーリエ, ソロモン (Соломон Яковлевич Лурье. 1890~1964) ……46, 49, 51, 53
- ルーロー, フランツ (Franz Reuleaux. 1829~1905) ……9, 65, 128
- レーニン, ヴラジミール (Владимир Ильич Ленин [Ульянов]. 1870~1924) ……7, 14,
19, 27, 28, 37, 38, 45, 51, 54, 60, 66, 73, 74, 91, 106, 113, 117, 122, 127, 130
- ローカフ, ヤーコヴ (Яков Анатольевич Роках. 1899~?) ……48, 57
- ローゼンベルガー, フェルディナント (Ferdinand Rosenberger. 1845~1899) ……50
- ロモノーソフ, ミハイル (Михаил Васильевич Ломоносов. 1711~1765) ……100

図の典拠

図1 相川春喜

山崎俊雄「相川春喜論」, 技術と人間編集部編『科学・技術論の新局面』技術と人間社, 1973年, 240頁.

図2 ニコライ・ヴォルコフ

Архив Института Российской истории Российской Академии наук: Личное дело Н. С. Волкова.

図3 アナトーリー・ズヴォルイキン

<https://www.geni.com/people/Анатолий-Зворыкин/6000000072218051821>
2024年4月25日閲覧

図4 ニコライ・ブハーリン

[https://ru.openlist.wiki/Бухарин_Николай_Иванович_\(1888\)](https://ru.openlist.wiki/Бухарин_Николай_Иванович_(1888))
2024年4月25日閲覧

図5 アレクサンドル・ラーツィク

<https://www.spbstu.ru/university/about-the-university/history/rectors/radzig/>
2024年4月25日閲覧

図6 ハイム・ガルベル

[https://ru.openlist.wiki/Гарбер_Хаим_Иосифович_\(1903\)](https://ru.openlist.wiki/Гарбер_Хаим_Иосифович_(1903))
2024年5月31日閲覧

図7 ロシア科学アカデミー・物質文化史研究所

<https://www.archeo.ru/images/ИМК.png>
2024年4月21日閲覧

図8 ニコライ・マル

https://ru.wikipedia.org/wiki/Март_Николай_Яковлевич
2024年4月21日閲覧

図9 ヴラジスラフ・ラウドニカス

<https://archaeoglobus.sfu-kras.ru/person/ravdonikas-vladislav-iosifovich/>
2024年4月21日閲覧

図10 イヴァン・スミルノフ

[https://ru.wikipedia.org/wiki/Смирнов_Иван_Иванович_\(историк\)](https://ru.wikipedia.org/wiki/Смирнов_Иван_Иванович_(историк))
2024年4月21日閲覧

図11 ヴィクトル・ダニレフスキー

https://www.rasl.ru/events/2020_events/danilevsky_vv.php
2024年4月21日閲覧

初出一覧

- 序 章： 書き下ろし。一部に、市川 浩「日本における技術史研究—歴史的概要—」（日本科学史学会技術史分科会『技術史』第6号, 2005年, 49～55頁）, および、市川浩「【短信】佐渡：相川春喜（1909～1952）の風景」（日本産業遺産学会『産業考古学』第159号, 2023年, 81～82頁）を利用。
- 第1章： 市川 浩「1930年代前半ソヴィエト工業教育における“マルクス主義的技術史”の探究 —ニコライ・ヴォルコフを中心に—」, 研究会誌『イル・サジアトーレ (*IL SAGGIATORE*)』第48号 (2022年), 1～17頁。
- 第2章： 市川 浩「ソ連邦科学アカデミー・科学史=技術史研究所 (1932～1938年) —技術史分野を中心に—」, 広島大学大学院総合科学研究科社会文明研究講座編集委員会編『社会文化論集』第16号 (2019年), 1～31頁。
- 第3章： 市川 浩「ハイム・ガルベルの技術論 —消された, もうひとつのマルクス主義技術論—」, 日本科学史学会『科学史研究』第Ⅲ期 第59巻 第295号 (2020年), 199～213頁。
- 第4章： 市川 浩「“物質文化史”か“技術史”か? ——1930年代初頭のソヴィエト国立物質文化史アカデミーにおける論争」, 『科学史研究』第Ⅲ期 第62巻 第306号 (2023年7月), 236～150頁。
- 補論 [1]: 市川 浩「ニコライ・ブハーリンの技術論」, 関西唯物論研究会編『唯物論と現代』第64号 (2021年10月), 117～126頁。
- 補論 [2]: 市川 浩「ヴィクトル・ダニレフスキー (1898-1960) 再考—“正統”マルクス主義的技術史の背景—」, 研究会誌『イル・サジアトーレ (*IL SAGGIATORE*)』第47号 (2020年), 17～23頁 / 市川 浩「【随想】ダニレフスキー雑感」, 『イル・サジアトーレ (*IL SAGGIATORE*)』第36号 (2007年), 64～68頁。

著者略歴

市川 浩(いちかわ ひろし)

1957年 京都市生まれ。
1982年 大阪外国語大学ロシア語学科卒業。
1989年 大阪市立大学大学院経営学研究科単位取得退学。博士（商学）。
1989年 広島大学総合科学部に勤務。講師、助教授、教授を経て、定年退職。
2023年 4月より広島大学名誉教授・同平和センター客員研究員、
関西大学、京都大学などで非常勤講師。専攻は科学=技術史。

著書：単著に『冷戦と科学技術-旧ソ連邦 1945～1955 年一』（ミネルヴァ書房，2007年），『*Soviet Science and Engineering in the Shadow of the Cold War* (Routledge Publisher, 2019)』，『核時代の科学と社会—初期原爆開発をめぐるヒストリオグラフィ—』（丸善出版，2022年），『ソ連核開発全史』（ちくま新書，2022年），編著に『科学の参謀本部—ロシア/ソ連邦科学アカデミーに関する国際共同研究—』（北海道大学出版会，2016年）。

『“技術論”の源流をたずねて』

—1930年代ソ連における“マルクス主義的技術史”の探究—

発行日：令和6年11月8日

著者：市川 浩

発行者：広島大学出版会

ISBN：978-4-903068-72-5 C3040 〈電子版〉